
遠い町からやってきた。

加藤アガシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い町からやってきた。

【Nコード】

N2787I

【作者名】

加藤アガシ

【あらすじ】

ようこそ福猫町へ。僕は、大学時代の先輩に頼まれた『絵』を買いに猫がたくさんいる不思議な町を訪れた。本当は逃げてばかりで何もしない僕と、そんな僕を取り巻くおかしな人たちの自分探しの話。

21話から第二章。34話で登場人物紹介を書きました。そして、35話から第三章に行きます。よろしくどうぞ！

? みかんと猫の町

みかん。

電車から降りると、みかんの木のいい匂いがした。

秋は空気が澄んでいるせいか、僕の嗅覚は敏感になる。

『福猫町』

実にコミカルで良い名前の駅だ。

どこことなく、心がふわふわするニュアンスを含んでいる。

それでいて町自体も、その名前にふさわしく昭和時代のような、どこかなつかしい雰囲気を持っていたので僕は一層うれしくなった。

僕は一応、美大を卒業した身なので、こういった美を感じさせてくれる、味のある空間が大好きなのだ。

あくまでも一応で、特別、美に造詣が深いわけではないけれど。

そんな穏やかな景色を眺めつつ、改札を抜けると、一匹の黒い猫が僕に話しかけてきた。

『やあ。こんにちは』

猫はたぶんそう言ったと思う。
僕はそれに答えた。

『こんにちはわ。今日はいいい天気だね』

『ナアー？』

猫は僕の言葉がよく理解できなかったのか、けだるい声をあげてどこか行ってしまった。
猫はネコなりに忙しいのだ。

『この辺は福猫町というだけあって、猫が多いんですか？』

僕は、僕と猫とのやり取りを変な目で見ていた駅員さんに、気まずさから聞いてみた。

『え？ああ、そうさね。』

この辺は猫がワンサカいるよ。
ちよっとした名物みたいなもんだね』

『そうですか。それはなんだか面白いですね』

僕は猫嫌いな母親のことを思い出した。
きつとすごく嫌がるだろうな。

『ところで、やわらか画廊ってどこにあるかご存じですか？』

僕は、秋山先輩から送られてきたFAXの地図を駅員さんに見せた。

僕は先輩から頼まれた『絵』を買いに、はるばるこの福猫町までやってきたのだ。

『やわらか画廊？』

ああ、上杉さんのトコさね。うん、近いよ。

この道をまっすぐ行って、突き当たりを右に曲がったらすぐだよ『

僕は駅員さんに丁寧に敬礼を言って、歩き始めた。

見慣れない土地を歩くのは、やっぱりワクワクするもんだ。

僕は、とてもリラックスしていた。

つづく

？憧れの腹黒美人

秋山先輩から電話があったのは一週間前のことだ。

ちょうどその時、僕はお風呂に入ろうとしていた。

『もしもし、マサルくん？』

『え、秋山先輩？ああ、こんばんわ』

『こんばんわ～。突然だけど、マサルくんにお願いがあるんだけどいい？』

『・・・はい？』

僕は、先輩の唐突な電話に驚いた。
それをまったく気にせず、秋山先輩は続けた。

『あのね、マサルくん。』

この前、電話で仕事辞めて、求職中って言ってたじゃない？
まだ仕事探してる？』

『え、まあ、・・・はい。まだ探してますけど・・・』

僕は、自分が未だ求職中の身であることに恥ずかしくなった。

しかし、先輩にはなんとなく嘘を付きたくなかったので正直に答え
た。

『ホント？』

よかった。じゃあ、お願いなんだけど、来週までに、やわらか画廊
って所から、イルカの絵を買ってきてくれない？

上手くいけば、お返しに仕事まわしてあげられるかもしれないから
さ。ね、お願い！』

つまり、こういうことだった。

現在、出張で青森にいる秋山先輩の代わりに、僕がやわらか画廊という、うさん臭い名前の、とある画廊へ行き、とある絵を買ってきて欲しいというのだ。

僕は、彼女からお礼に仕事をもらえるかもしれないということを知っていて、快諾した。

秋山先輩は、会社や病院などの法人向けに絵画を販売・レンタルしている会社に勤めている。
その界限では、非常に力のある大きな会社で、各地方に部署をもっているほどだ。

求職中の身である僕にとって、そんな大きな会社で働けるチャンスはめったにないだろう。

それに、彼女と同じ会社で働くというのも悪くないと思った。
というより、そうなら非常にうれしい。

秋山先輩は、大学の二つ上の先輩で、彼女が卒業するまでの2年間、
僕らはアパートの隣の部屋同士だった。

上品でバニラの匂いのする彼女を初めて見た時、僕は舞い上がった。
バラ色の一人暮らし、そして夢色の美大生活を期待したのだ。

しかし、彼女のことを知れば知るほど、その容姿に隠された腹黒さ
を知ることになった。

彼女は確かに、『油彩科にその人あり』と言われるほどに超絶美人
だったが、彼女自身そのことを熟知していて、文字通り、その美し
さを隈なく利用していた。

つまり、彼女はとても計算高い女だったのだ。

僕はそういう人の心理やら、駆け引きみたいなのを読むのが、割に得意なタチだったから、

彼女も僕を騙しきれないと踏んだのか、出会ってひと月が過ぎる頃には、僕らは大分砕けた仲になっていった。

あくまで、先輩後輩という関係においてだけでも。

なぜなら、彼女にはムーミンに出てくるスナフキンのような放浪癖のある彼氏がいて、パツとしない僕が立ち入る隙など最初からまったくなかったからだ。

それに、そもそも劣等感の強い僕は、そんな超絶美人の先輩と対等な関係を結べるわけがなかった。

だから僕は、よく彼女の小間使いをさせられたし、僕自身もそんな

立ち位置の方がずっと居心地が良かった。

つまるところ、結局、僕も、彼女に利用されていた男のうちの一人、
ということになる。

まあ、もちろん彼女にとっては、今でもそうみたいだが・・・。

つづく

？誰もがみんな僕を無視する

駅員さんが教えてくれた通り、駅から、やわらか画廊には、あつと
いう間に着いた。

しかし、もう11時すぎだというのに、画廊はまだ開いてなかった。
看板には、定休日は火、木とあり、金曜日の今日はやっているはず
なのに。

僕は、画廊の閉じたシャッターをどんどん叩こうかとも思ったけど、
結局止めた。

それは社会通念上、あまり好ましくない行為だと思ったからだ。

どうしようかと迷っていると、駅で見た猫とは別の猫を見つけた。

今度のは体格の良い三毛猫だ。

『こんにちは』

僕は声をかけてみた。

『なー』

三毛猫は駅で見た黒猫同様、そっけなく行ってしまった。

僕は、まるで世界中のみんなが僕のことを無視しているみたいなきがした。

僕は猫を見かけると、なるべく声をかけるようにしている。

しかし、その行為には特に深い意味はなく、なんとなくか子供のころからの習慣がこびりついてしまっただけなのだ。ほぼ無意識に。

だから、僕は、そんな僕の姿を見た人から、よく変な目で見られた。

だけど、そんなことはむしろどうでもいいと、最近は少しだけ思えるようになってきた。

2年間務めた広告代理店を辞めて、身についたことはたったそれだけだ。

まったく、実に喜ばしい報酬だ。

というのも、もともと僕が会社を辞めた理由は、僕が人の目を気にしすぎる性格だったからだ。

まあ、とにかく過ぎたことなのだから、今となっては、もうどうでもいいのだけでも。

結局、僕は、やわらか画廊の向かいにある喫茶店『楓』に入って、しばらく画廊の様子を見ることを決めた。

もう少ししたら画廊が開くんじゃないかという、期待にも似た一つの可能性を確かめるために。

それに秋山先輩に頼まれた手前、このまま手ぶらでは帰れない。
僕の再就職もかかっているのだ。

つづく

？落ち着かない喫茶店『楓』

僕が入った喫茶店『楓』の内装は、悪くなかった。

というより、かなりイケていた。

広さこそは、カウンター席のほかにテーブル席が3つしかないと狭さだったが、心地のよい絶妙な薄暗さと、味のある明治時代のよくなレトロな様式美。

店内には、趣味の良いスロージャズが流れていた。

だけれども、店員の対応と言ったら、ひどいこと、この上なかった。

まず、僕が入店しても、『いらっしやいませ』の一言もなく、チラッとこっちを見ただけだった。

まるで、映画館でケータイ電話を鳴らしてしまった人を見るみたいに。

店員二人いて、二人ともだ。

一人はカウンターでコーヒークップを磨いていて、どっからどう見ても、マスターという感じの男だ。まるで、気の利いた映画から、そっくりそのまま出てきたみたいだ。

そして、もう一人は大学生くらいの黒髪メガネの文学少女。

本当に文学少女なのだ。

僕という客がいるのに、カウンター席に座り、接客もせずに本を読んでいる。

エプロンをつけてるから、きっとアルバイト店員であることは間違いないだろうに。

顔だって、どこか、ふてぶてしい。

僕がこの状況にオロオロしていると、マスターらしき男は、さもめんどくさそうに、壁に貼ってあったメニューをアゴで示した。

『え、あ、アメリカンコーヒーひとつ』

僕は咄嗟に目に入ったアメリカンコーヒーを立ったまま、注文した。

『あいよ』

マスターはそう呟くと、めんどくさそうに、コーヒーを作り始めた。
この男は、この世の全てがめんどくさそうだった。

18

そして、その声で初めて僕の存在に気付いたかのように、文学少女は立ちあがり、僕を窓際のテーブル席へ座るように手で促した。

最初、この子は口を聞けないのかと、僕は思った。

しかし、出来上がったアメリカンコーヒーを持ってきたときに、そうではないことが分かった。

『どっこい』

彼女はそれだけ言ってアメリカンコーヒーを僕の前に置くと、元
いたカウンター席に腰かけ、再び本の世界に戻った。

かなり分厚い本だったが、何の本なのかはよくわからなかった。

でもきつと、通常の子大学生が読む種類の本でないことだけは確
かだ。

マスターが、僕のアメリカンコーヒーをつくるために使ったコーヒ
ーメーカーを洗い終わると、店内には再び、スロージャズのサック
スの音だけが響いた。

僕はまったく落ち着かなかった。

まるで、まったく知らない、さつき会ったばかりの夫婦の結婚式
に急ぎよ呼ばれたみたいに落ち着かなかった。

それと、僕が頼んだアメリカンコーヒーは特別上手くもなければ、不味くもなかった。

言葉にしようもない程に、普通のアメリカンコーヒーだった。

それを全部飲んでしまうと、僕はひたすら窓の外から見える、『や
わらか画廊』を眺めながら、ただソワソワしていた。

つづく

？品の良い老夫婦

『さっきから何見てるの？』

突然、話しかけられて僕はびっくりした。

僕が振り向くと、店員の文学少女がこっちを睨みつけていた。

本当に、文字通り、僕のことを睨んでいるのだ。

店員のくせに、なんて高圧的な態度だろう。

『いや、あそこの画廊は開かないのかなと思って・・・』

僕は窓の先のやわらか画廊を指さしながら答えた。

正直に言えば、僕は少し緊張していた。

彼女にはそういう、人を強張らせる独特の雰囲気があった。

『画廊に何か用？』

『実は・・・』

『こんにちはわー』

僕が口を開いた瞬間、突然、店内におじいさんとおばあさんが入ってきた。

『あ、いらっしやい』

僕は耳を疑った。

僕には何も言わなかった文学少女が、二人に愛想よく挨拶したのだ。
なんだ、それは？

『いつものを頼むよ』

『はい、ブレンドとアップルティーですね』

僕は、彼女の明さまな鼻^{ひいき}尻に腹が立った。

例え、二人が（たぶん夫婦だろう）常連客だったとしても、僕との扱いに違いがありすぎる。

それに加え、この世の全てがめんどくさいはずのマスターまで、ニコニコして、その老夫婦を迎え入れた。

僕はこの事実になんか傷ついたり戸惑った。

何なんだ、この喫茶店は？

よそ者に対しては冷たくするのが礼儀なのだろうか。

僕はひどく混乱した。

『あれ？お客さん？珍しいね』

入ってきたおじいさんは僕の存在に気付くと、そう呟いた。

いや、呟いたというか、あるいは僕に対して話しかけたのかもしれない。

僕はどちらとも判断できなかったので、何も言わず、軽く会釈をした。

僕は総じて人見知りしやすい。

例え、それがいかにもやさしそうで、品のいい老夫婦だとしてもだ。

『あなた、この辺の人じゃないでしょう？どこから来たの？』

老夫婦は僕の隣のテーブルに腰かけると、今度はおばあさんの方が僕に向かって言った。

まちがいなく、僕に向かって。

『あの、えっと、岩熊という所から来ました。

絵を買いに来たんです。

あそこの画廊に。ちよっと、知り合いに頼まれて・・・』

僕は文学少女に聞かれたときと同様に、少し緊張しながら窓の外のやわらか画廊を指さして答えた。

『へえ。だってさ、茉莉ちゃん』

僕の指さした先を見ると、おじいさんはそう文学少女に向かって言った。

なんで、そんなことを一々、無愛想な彼女に報告する必要があるのだ。

僕はまた、彼女に睨みつけられるのではないかとちょっと身構えた。

つづく

？独特の雰囲気を持つ少女

茉莉^{マリ}ちゃんと呼ばれた文学少女はもう一度、僕のことを睨みつけた。

いや、今度は睨みつけた言うより、僕の顔をジロジロと確認したという感じだろうか。

まるで、気難しい彫刻家が出来上がったばかりの自分の作品を細かく点検するかのよう。

『なんて絵を取りに来たの？』

彼女は何の感情も籠っていない抑揚のない声で僕に言った。

『えっと、タイトルは知らないんだけど、イルカの絵・・・』

僕は慄き、答えた。

秋山先輩からもらった情報は、イルカの絵であるということだけだった。

僕は、もしかしたら、やわらか画廊がラッセンの絵を専門にあつかう画廊なのではないかという不安に駆られた。

『イルカの絵ねえ……。あつたかな』

彼女は府に落ちないという顔で呟いた。

『覚えはないのかい？』

コーヒーをすすっていたおじいさんがコーヒーカップを置くと、口

をはさんだ。

『ええ、記憶にないですね。

まあ、いいや。

あなた、ちよっとそこで待ってて。店長、あたしも上がります』

『あいよ、おつかれ』

文学少女がそう言い、マスターがそれに答えると、文学少女はカウンターの奥へ、行ってしまった。

たぶん奥には従業員室か何かがあるのだろう。

僕が、文学少女の言葉と行動を読めないでいると、おばあさんがニコニコしながら教えてくれた。

『あの子、あそこの画廊の子なのよ』

『ああ、なるほど』

僕は彼女が画廊で育ったことを知り、なんとなく彼女の独特の雰囲気
の秘密が分かった気がした。

これは僕が美大時代に思ったことなのだが、幼い頃から絵に触れる
機会が多かった人間は、ちょっと他の人間とは違う雰囲気を放つ。

どこがどう違うのかと問い詰められると、上手く説明できないけれど、
大体は自分なりの世界を持っているので、他人に対して、どこ
か主観的な感じになる。

僕は大学時代、そういう人間を目の前にするたびに、なんだか無人
島に置き去りにされたかのような孤独感を感じたものだ。

なぜなら、圧倒的な彼らの前では、僕なんか、ありふれた凡庸な人
間だからだ。

『ついて来て』

私服に着替え、すぐに出てきた文学少女は僕にそう言つと、老夫婦とマスターに軽く会釈だけして、店の外へ出ていった。

僕は急いで、マスターにコーヒー代を払い、彼女の後を追って店の外へと出た。

黒いパーカーにジーパン。

そんな飾り気のない格好をした文学少女は、店の中ではたいして気にならなかつたが、意外なほど小柄だった。

そして、その小さな歩幅で、後を追いかける僕のことなど、まるで気にも止めず、スタスタ先を歩いた。

彼女は、僕が思う以上にエゴイスト（主観的）すぎるみたいだ。

つづく

? やわらか画廊

『もしかして、今日は休みの日だった?』

僕は気まずさから、文学少女に聞いた。

やわらか画廊のシャッターの鍵がなかなか開かなくて、彼女はひどく苦戦していたのだ。

『うっうん。』

最近、あたしのお父さんが適当に開けたいときにだけ、ここを開けるの。

一般のお客さんなんてめったにこないし。

あっ、開いた』

彼女はそう言うと、シャッターを一気に持ち上げた。

『どっつ？ 廃れてるでしょ？』

僕の面前にやわらか画廊の店内が広がった。

確かに、彼女の言うように、画廊の中はちょっとホコリっぽかったし、老朽していたけれど、吹き抜けになっている二階の窓ガラスからは日の光が降り注いで、全てがキラキラ輝いていた。

そして肝心の絵画たちは、ただ売るためだけに無造作に並んでいるわけではなく、美術館のように、作品を作品として、『見せる』ための展示をされていて、僕をワクワクさせた。

その絵画のどれもが適当なものではなく、おそらく厳選されたであろう、味のある趣味のいい絵画ばかりだったのだ。

『僕は今まで、こんなに魅力的な空間を見たことがない』

僕はお世辞でも何でもなく、ただ正直に感想を述べた。

本当にそう思ったのだ。

『大げさ。あなたって誇張表現するのね』

彼女は僕の意見を聞くと、呆れるように、しかしどこかうれしそうにそう言った。

『で、イルカの絵だっけ？』

『ああ、うん。あるかな？』

僕は展示されている絵を再度ざっと、見回した。

しかし、イルカらしき絵（あくまでイルカをイルカと表現した絵）はなさそうに見えた。

『たぶん、ここにはないわ。あるとしたら、下の倉庫ね。ついてきて』

僕は地下倉庫へ行った。

やわらか画廊は、吹き抜けの二階建てで、画廊にしては、なかなかの広さだったが、地下室まであることに僕は驚いた。

『ねえ、僕がこの中に入っているの？』

薄暗い倉庫の中には、大量の絵画が丁寧に棚の上に保管されていて、どう考えても僕みたいな客、つまり部外者が入ってはいい場所ではなかった。

『だって、実際にあなたにその絵を見てもらわないと、どれだか分かんないじゃん。』

お父さんは帰ってきてないみたいだし……。

あたしがいちいち、あなたの前に一枚一枚絵を運んできてコレ？コレ？って聞いていくなんて馬鹿みたいじゃない？

で、例のイルカの絵ってどのくらいの大きさで、なんて人が描いた絵？

タイトルが分からなくてもそれくらい分かるでしょ？』

『……あの、ごめん。実は何もわからないんだ。イルカの絵ということしか聞いてこなかったんだよ』

僕は正直に謝った。

『ハア？情報たつたそれだけなの？』

僕は、秋山先輩にくわしく聞いてこなかったことをひどく後悔した。

まさか、やわらか画廊に、こんなにたくさんの絵画があるとは思わなかったのだ。

『しゅめん』

僕は呆れている文学少女にまた謝った。

つづく

？疑われて当然

イルカの絵を探し始めてから20分近く経った。

文句ばかり言っている文学少女も、もちろんそうだと思うが、僕自身もいい加減探すのに、うんざりしてきた。

出てくる絵の大半は風景画や、抽象画で、イルカの絵など、ちっともありそうになかったからだ。

僕は本当に、秋山先輩の求めている絵がこの画廊にあるのか不安になってきた。

『ねえ、君のお父さんはどこに行ったの？いつ帰ってくる？』

僕は、やわらか画廊の店主である彼女の父親なら、全ての絵画を把握しているに違いないと思った。

『さあ、知らない。昨日の朝まではいたけど。いつもフラフラ出て行っちゃうの』

『出ていっちゃうって、画廊をほっというって。』

僕言葉に彼女はムツとして言った。

『さっき言ったでしょ。』

ここは、あの人が開けたいときだけ、開けるの！

今日は、あたしがいたから、特別に開けてあげたのよ。

欲しい絵がどういう絵なのかも、よく分からないで買いに来たママケのお客さんのためにね』

『しゅめん・・・』

僕はそのことに触れられて何も言えなくなった。

『そもそも、あなたはさっき、人に頼まれてイルカの絵を買いに来たって言ってたけど、どういうこと？』

イルカの絵を取ってこいってだけ、言われて来たわけ？』

僕はここまで探してもらって悪い気がしたので、正直に秋山先輩に頼まれた経緯を軽く説明した。

僕が求職中の身であること、絵を買ってくる代わりに仕事がもらえると聞いて来たこと、秋山先輩のことなど。

『ねえ、その秋山って人はどうやって、ここにそのイルカの絵があるって知ったわけ？』

僕が話し終わると、文学少女は質問した。

『さあ、よくわからないよ。』

けど、僕の先輩は絵のレンタル会社で働いているから、そのイルカの絵も仕事で使うために必要になったんじゃないかな。きつと、仕事先の人がここにあることを知っててさあ』

『ここに住んでいるあたしも知らない絵を、その仕事先の人はどうやって知るのよ？』

確かに言われてみればそのとおりだった。

先輩の会社の人が、ここでその絵を見たことがあるなら、この画廊の店主の子供である文学少女も、その絵のことを知っていてよさそうなものだ。

その絵は本当に実在するのだろうか、僕は何だか、秋山先輩に騙されているような気がしてきた。

『とにかく、僕は頼まれてきただけで、よく分からないんだよ。このやわらか画廊から、イルカの絵を買ってこいっただけしか言われてないんだ』

『ふーん・・・』

僕は文学少女に、自分が求職中の身であることを言わなければよかったと思った。

彼女は、僕のことをまるで、イルカの絵をダシにこの画廊に来た詐欺師みたいな目で見た。

『ねえ、君のお母さんは今いないの？この画廊の絵について詳しくないの？』

疑われている気がして気まづくなった僕は、話題を変えることにした。

しかし、彼女はさらに怪しむような目で僕を見て、答えた。

『あたしのお母さんは、もういないわよ。
五年前にどっかの知らない男と、あたしを置いて、蒸発したの』

『・・・ごめん』

結果として、余計気まづくなった。

僕はなんだか、いつもこうだ。
もがけばもがくほどに地雷を踏む。

『いや、別に気にしないで。』

あたしのお父さんがいつもフラフラ出ていっちゃんからいけなかつたの。

そりゃ、そつよね。

いつも、どこで何をしているか分からない旦那だなんて、浮気されて当然よ。

お母さんも、お父さんがどこかで浮気していると疑心暗鬼になって、
浮気したんだと思う・・・』

『あゝあ、ずいぶんひどいこと言ってくれるじゃない？茉莉ちゃん
さっ』

突然、後ろから声がして僕は驚いて振り返った。

『お父さん!?!』

突然、帰ってきた父親に、文学少女もさぞ驚いたようだった。

U
U
U

？先見の明ある店主とイルカの絵

文学少女の父親、つまり、やわらか画廊の店主は異様な恰好をしてた。

もう冬も近づく、10月の下旬だというのに、裸足にサンダル。

薄着の茶色い浴衣にオレンジ色のニットカーディガン。

穏やかな目には分厚い丸メガネをかけ、極め付けに、ボサボサの髪の上にベレー帽を乗せていた。

僕はこんな格好をしている人を見たのは初めてだった。

しかし、彼は本当に文学少女の父親なのかと疑いたくなるほどに背が高く、ハンサムだったので、決して変とか、不恰好というわけではなかった。

要するに、異様な恰好ではあるが、前衛的なファッションとも言え

なくもなかった。

『やあやあ、茉莉ちゃん。二日ぶりだね、元気してた？』

彼はヤギのようなアゴ髭を弄りながら、娘に向かって言った。

なんだか、のらりくらりと喋って、風変わりな人だなと僕は思った。

『今度はどこいったのよ？』

文学少女は低い声で言った。

『いやね、本当は粘土を買いに出かけたただけなんだけどね。』

電車で、隣の席に座っていた高校生が読んでた漫画が面白そうだね。話しかけたら、意気投合しちゃってさ。

そのまま漫画喫茶つてものを教えてもらって、そこで、ずっと漫画を読んでたんだよ。

秘密のピラリキってヤツ。

全183巻もあるんだよ。

茉莉ちゃんは、ピラリキ知ってる？あれ、おっもしろいのね。』

文学少女は深いため息をついた。

父親の奇行ぶりに、もう怒る気も失せたようだった。なんだか、関係のない僕も、彼のゆるさに呆れてしまった。

『それで、そちらはお客さんかな？』

店主は、今度は僕をまじまじと見た。

目が悪いからかどうか分からないが、彼には顔を近づけて話す癖があるようだ。

『あ、はい。あのイルカの絵を買い来たんですけど、恥ずかしながら、タイトルも何も分からなくて・・・』

『ああ、何だ。君がそうか。』

小間使いの影山マサルくん・・・でしょ？』

『ええ、はい。・・・ええ？』

『静香ちゃんに、ちゃんと聞いてるよ。よいしょっと・・・』

彼はそう言うと、まだ僕たちが探していなかった棚から、奇麗に包装されたF6サイズの絵を取り出した。

『秋山先輩のこと、ご存知なんですか？』

僕は質問した。

『うん、もちろんもちろん。』

だって彼女、この町で生まれたんだよ。

・・・って、あれ？

君、もしかして彼女から何も聞いてないの？』

僕は当然、おどろいた。

先輩からは何も聞かされていない。

『わたしはそんな人、知らないけど?』

文学少女が口をはさんだ。

確かに彼女は秋山先輩の話をしても知らなかった。

『そりゃ、茉莉ちゃんは知らないよ。』

茉莉ちゃんが、こゝんな、ちっちゃい時に、静香ちゃん家は引越
しちゃったもん』

店主は指で米粒くらいの大きさを作って言った。
まさか、そんなに小さいわけがあるまい。

『じゃあ何で、お父さんは、静香ちゃんとやらと、まだ親交がある

のよ?』

気にせず、文学少女は続けた。

『親交？

親交なんて、ほとんどないよ。』

彼女が高校生だっけかなあ？

まあ、そのくらいの時に、いきなりここに来て、買ってきてくれて、一枚の絵を持ってきてさあ。

びっくりしちゃったよ。

あの泣き虫・静香ちゃんがあんなに美人さんになって、突然訪ねてくるんだもん。

さらにそれ以来、音沙汰なかったのに、この間、まだあの絵はあるかって電話あったから、またまたびっくりしたんだよ。
『ひゃ〜って』

『じゃあ、イルカの絵って、もともと先輩が売った絵なんですか？』

僕はまた驚いて、質問した。

『そっだよ。作者不明・タイトル不明の素晴らしい絵。』

自慢じゃないけど、僕は先見の明があるから、そのうち、この絵の作者の名前が売れて高値が付くんじゃないかと思って大切にしまっておいたんだけどね……。

でも、まあ、これはいい絵だよ。

まったくの素人の絵だったとしてもね。

もし、静香ちゃんと知り合いじゃなかったとしても、結構高値で買ってたと思うな』

そう言つと、彼はわざわざ包装紙を取り外し、その絵を見せてくれた。

『ご覧あれ。二頭のイルカの愛の物語を』

『・・・きれい』

隣の文学少女がうつとりして呟いた。

一方、僕はというと、ただ圧倒された。

豪快に塗られたエメラルドグリーンの中。

そして、その海の中で二頭のピンクのイルカが寄り添って泳いでいた。

文字通り、泳いでいた。

本当にイルカは、生きて泳いでいるかのように、見えるのだ。

『・・・おいら』

僕は無意識にそう呟いた。

実際にこの絵を見る前までは、もしかしたら秋山先輩が自分自身で描いた絵を売りつけたんじゃないかなと思っていただけけれども、全然違った。

この絵は、先輩の神経質で、繊細な画風とは似ても似つかず、実に大胆な画風だ。

二頭のイルカだって、よく見ればグチャグチャ荒く、豪快に描かれているのだが、それがやけにイルカを生久しく、よりリアルに見せた。

今にも、鳴き声をあげて、踊りだしそうだ。

店主が言ったように、まさしく、愛の物語といった感じの絵である。

『どつだね、小間使いのマサルくん。惹きこまれるでしょ？』

彼は得意げにアゴ髭を撫で、ニヤリと笑った。

つづく。

？漫才親子と新しい仕事

『これ、本当に誰が描いたか分からないんですか？』

僕はこの作者の、他の絵も見てみたいと思った。

『残念ながらね。静香ちゃんが持ってきたときに聞いても知らないって言ってたよ。』

家の物置にずっと置いてあつたんだってさ。』

『物置って。なんかいいのそれ？』

その人が高校生のときに一人で、売りにきたんでしょ？』

文学少女は言った。

『うん。なんかね、彼女も色々ワケありって感じだったね。』

あんまり、関係のない僕がペラペラ話せないけどさ。

まあ、とにかく、こうして、また買い戻すためにマサルくんが来たんだから、いいじゃない。

ねえ、マサルくん』

『はあ・・・』

確かに、秋山先輩はこうして僕に、イルカの絵を買い戻すように頼んだのだから、きつと、この絵に思い入れがあるのだろう。

個人的に買い戻すだけで、先輩の仕事と、この絵は何も関係がないのかもしれない。

『で、マサルくんはいつから働くんだい？』

『……え？何の話ですか？』

僕は混乱した。

僕が無職であることを、なぜ彼は知っているのだろう。

先輩は、そんなことまで話したのだろうか。

『え、さすがにそれは聞いてるでしょう？』

静香ちゃんが、求職中の君を、ここで雇ってくれて頼んできたんだよ。

僕がよく店開けるのを覚えていたみたいだよ。

僕も、他ならぬ静香ちゃんの頼みだし、画廊もちょうどいいかなと

思ったから、OKしたんだけど・・・』

『ええ！？・・・ここで、ですか！？』

僕は当然、驚いた。

てつきり、先輩がまわしてくれる仕事というのは、先輩の会社だと思っていた。

先輩の大手、絵画レンタル会社・・・。

『まさか、本当に静香ちゃんから何も聞いてないの？』

それはこまったな。じゃあ、ここで働くのは嫌かな？』

『いや、別に嫌だとかじゃなくて・・・』

僕は迷った。

確かに、この画廊の雰囲気はすごく好きだし、ゆったりと働けそう
だ。

だけど、僕はもう二度と転職したくはなかったの、ある程度いい
仕事を探していた。

この先、結婚して家族ができて也十分、食べていける仕事。

その点、ここでの仕事はどう考えても、十分稼げるとは思えなかつ
た。

『まあ、そりゃそ〜だよ〜。突然、そんなこと聞かせられたんじ
ゃね〜』

『ちよつと、あたしも、何も聞いてないんですけど!?!
この人がここで働くの!?!』

お父さんはいないときは、いつも、あたしがちゃんとやってあげて
たじゃない!?!』

文学少女も寝耳に水だったようだ。

『茉莉ちゃんは、一応、大学、まだ2年間あるでしょう？』

それに卒業したら、ここ継いでくれる気あったの？』

『それはそうだけど・・・』

『茉莉ちゃんは好きなことやりなさいな。
で、マサルくん。どう？』

店主はまた、顔近づけて僕をジロジロ見た。

『ちよつと、考えてみないと・・・』

僕ははぐらかした。

『うん、そりゃそうだ。おっけ〜。』

じゃあ、その気になったら・・・あれ？名刺どこだっけな〜』

彼は着物の中をもぞもぞ探した。

『お？あつたあつた。ここに電話しておくれ』

僕は、店主が着物から出したグチャグチャの名刺を受取った。

しかも若干、黄ばんでいる。

『申し遅れましたが、やわらか画廊、オーナー兼、店長の上杉国男です。以後よろしく。』

あつ、あと、この可愛い子ちゃんが僕の娘の上杉茉莉ちゃんです。』

『ちよつとー!』

文学少女は彼に肩を組まれ、それを振り払った。

『あなた、もつと、ちゃんとした仕事探した方がいいわよ！』

ここ、ちつとも儲からないんだから。

大体、ウチに人を雇うお金なんてあるの、お父さん?』

『相変わらず、茉莉ちゃんはひつどいな、お金はあるよ。』

僕はこう見えても、なかなかのやり手だからね。

色々、お得意さんがいるのだよ。

まあ、マサル君にも給料は思ったより、出せると思うから考えてみてよね〜。

次の仕事、探す間だけでもいいしさ〜』

僕は何気ない彼の一言に食いついた。

『次の仕事って、期間限定で雇ってもらえるってことですか!?!?』

『うん、いいよ〜。あんまり短期間でも嫌だけどね〜。』

僕は忙しくってさ〜、人手欲しいんだよね〜』

『忙しいって、フラフラして、粘土こねてるだけでしょ!?!?』

『おっ、鋭いツツコミ!』

まったく、漫才みたいな親子だ。

僕はこの時点で大体、この画廊で働くかどうか心の中で決めていた。

じゅく。

？秋山先輩のお願い

秋山先輩は、待ち合わせ場所のファミレス『ムーチャン』に30分近く遅れてきた。

昨日の夜、僕がやわらか画廊から自宅のアパートに帰ってくると、出張から帰ってきたという、先輩の留守電メッセージがあったのだ。

『ごめんね、マサルくん。』

なかなか仕事で抜けられなくて・・・。

まったく、出張終わって、こっちに戻ってきたばかりなのに・・・

人使いが粗すぎるわ。あの会社・・・』

『いや、気にしないでください。おつかれさまです』

秋山先輩は席に着くといなや、すぐに、大声で店員にホットコーヒーを頼んだ。

その声で、ムツとした顔で振り返った男性店員は、先輩が美人であることが分かると愛想よく返事し、すぐにコーヒーを持ってきた。

『どうもありがとう』

店員にお礼を言った先輩は、いかにも仕事ができそうな美人OLといった感じだ。

とは言っても、もともと大学時代からそんな感じで、基本的にはほとんど変わっていないけれど。

強いて変わったことと言えば、髪色が明るくなり、ゆるいウェーブかかったことくらい。

「ただ、オシャレな先輩のことだから、きっとそれもまた、すぐに変わるのだろう。」

「それが私が頼んだ絵？」

「あ、はい、そうです。どうぞ。」

僕は、包装箱に入っているイルカの絵を先輩に手渡した。

「ありがとう！ー！お金いくらかかった？」

先輩は僕から絵を受け取ると、中身も確認せずに、すぐにイルカの絵の代金と、さらにプラスチック製の手間賃をしっかりと払ってく

れた。

『本当にありがとうね。』

本当は私が出張から帰ってきてから、取りに行っても良かったんだけどね。

なかなか休みとれそうになかったから、マサルくんをお願いしちゃったの。』

『いや、別に構わないですよ、それは。どうぞせ暇ですし……。』

それよりも、回してくれる仕事って、あの画廊って何で教えといてくれなかったんですか？』

『あ、余計なお節介だった？』

求職中で可哀想なマサルくんへのサプライズだったんだけど・・・』

先輩はコーヒーを啜りながら、楽しそうに言った。

『いやいや、サプライズって。そりゃ、驚きましたけど・・・』

そういう問題ではないだろう。

『あのね、前から思ってたけど、マサルくんみたいなウジウジ虫は、あーいう、まったりした所でゆったり働くのがいいんだよ。』

ぴったりじゃない？

画廊の店番。

綺麗な絵に囲まれて、ゆとりある絵画愛好家たちだけに、ニコニコして接客してればいいんだから。

どうせ前の仕事だって、なじめないから辞めたんでしょ？」

凶星だった。

僕は、自分が思った以上に仕事ができず、周りにもなじめなかったので耐えきれず、広告代理店を辞めた。

就職が決まった時は、結構大きな会社だと、同期生の友人に自慢していたはずなのに。

『だから、就職活動前にアドバイスしてあげたじゃない。』

マサルくんは広告業界は合わないって。あーいうのはねえ、もっと口が立つ人がやるもんなの』

仕事で疲れているのか、何か広告業界に思い当たる節でもあるのか、

先輩は一転、ちよつと刺のある口調で言った。

『で、やわらか画廊で働かないの？』

『とりあえず、他にいい転職先が決まるまで置いてもらおうと思います。』

店主の上杉さんもそれでいいって言ってくれたんで。

75

『明日、一応面接なんですよ。あくまで、形だけの面接だそうですが・』

『うん。それでいい。君はあそこで上杉のおじさんの生き方を学ぶといいのだ』

『はあ・・・』

僕は、上杉さんののらりくらりした話し方と、奇妙な出で立ちを思い出した。

確かに、僕もあんな風にお気楽になれば、もっと人生が楽しいだろうな。

『ところで、そのイルカの絵はもともと、先輩があそこに売ったものだって本当ですか？』

僕は上杉さんのことを考えてたら、彼が言っていたことを思い出した。

『え？そんなことまで、おじさん話しちゃったの？』

『ええ。先輩は元々、あの福猫町で生まれたって聞きましたよ』

『うん、そうよ。』

小学3年生くらいまで、あの町に住んだ。

おじさんの所の画廊も、そのときによく通ってたのよ。

私、絵が大好きだったし。

まあ、色々、親の関係で、結局引っ越しちゃったんだけどね・・・』

『・・・そうですか』

先輩はなぜか、影のある低い声で話したので、僕はそれを察し、先輩の生い立ちについて、それ以上聞くことを止めた。

大抵の人がそうであるように、先輩にも色々触れられたくない部分があるのだろう。

『じゃあ、そのイルカの絵の作者も、誰だか分からないって本当ですか？』

僕は空気を変えるために話を変えた。

でも、それだけじゃなく本当に、あんな風に、美しいイルカの絵が描ける画家は誰なのか知りたかったのだ。

78

『実はそのことなんだけどさ……』

このイルカの絵の作者を、マサルくんが探して出してくれない？』

『……はい？』

先輩の突然の言葉に僕は耳を疑った。

『・・・マジですか？』

『うん、マジです。お願い！』

出た。先輩のお願い。

僕は大学時代からずっと、彼女のお願いをたくさん聞いてきたのだ。

『えっと、それは・・・何のためにですか？先輩の仕事とは関係なく・
・ですか？』

『うん、そう。仕事とは一切関係なく。』

実はね・・・

昨日までの出張先の美術館で、このイルカの絵について、知っている人がいたの。

その人は、その美術館の学芸員で、もう70過ぎのお爺さんなんだけどね……。

で、最初は、そのお爺さんと今まで見た中で、一番感動した絵の話をしてたのよ。

まあ、そういう話は、仕事柄、結構よくするんだけど……。

でもね、そのお爺さんが話す絵に、私どうも覚えがあったの。

で、どこで見たんだっけ？って考えてたら、突然思い出したの！！

もう私、びっくりしちゃた。

本当に驚いたのよ。

だって、お爺さんがもう一度見たいって話しているのはまさに、この私が昔売った、このイルカの絵、そのものなんだもの。

そりゃ、驚くわよね？

自分の家に置いてあって、自分が売った絵を、知っている人が主張先にいただなんて。

だから、私知りたいのよ。

この絵が、どういう経緯で私の家にあつたのか。
そして、どこの誰がこの絵を描いたのかを』

先輩はいつになく真剣な顔でそう言った。

先輩が僕に向けて、こういう顔をするときは本当に本気なのだ。

『その学芸員のおじいさんは、そのイルカの絵をどこで見たって言
つてたんですか？』

『それがね、残念なんだけど・・・絵しか覚えてないらしいのよ。

そのお爺さんも学芸員だから、結構な色んな所で絵見ているだろう
しねえ・・・。

手がかりが、まるでないから、こうしてマサルくんに捜査依頼して
いるのよ』

『いやいや、先輩の方が、そういう絵を扱う会社で働いているんで
すから、色々、探しやすいんじゃないですか？』

『もちろん、私だって一応、一通り当たって探してみたいし、これからだって探すわよ。でも、まったく分からないの・・・』

『じゃあ、僕だって無理ですよ。何の情報もツテもないですもん』

『いやいやいや、マサルくんには、新しくやわらか画廊という、立派なツテが出来たじゃない？』

画廊で働いていれば、色々情報が流れてくるんじゃない？』

もしかしたら先輩が、僕にやわらか画廊への就職を勧めたのは、そういうことなのかもしれない。

まったく、先輩はめっちゃくちゃだ。

画廊の店主の上杉さんだって、イルカの絵の作者が誰なのか分からなかったのに、素人の、この僕がどうあがいても探せるわけがない。

はっきり言って、可能ゼロだ。

やるだけ無駄とはまさに、このことだと僕は思った。

なのになぜか、僕は本気の先輩のお願いには逆らえず、やるだけや
つてみますと答えていた。

彼女のお願いには、いつも、やるだけやるのだ僕は。

つづく

？面接といつか会談のようなもの？

ファミレスで秋山先輩と別れた後、僕はコンビニで、明日の面接のために履歴書を買って自宅に帰り、自分の履歴を書いた。

雇用主であるやわらか画廊の上杉さんは、形だけの面接と言っていたから、履歴書がなくても気にしないだろうとは思っていたけれど、心配性の僕は一応用意することにしたのだ。

正直、志望動機欄には、何を書いたら良いのか迷ったが、結局、『絵に興味があり、多くの絵画に触れ、造形を深めたい』など、なんだかウソ臭い訳の分からないことを適当に書いて、その余白を埋めた。

僕の場合、いつだって流されるままで、志望動機なんてあってないようなものだ。

・・・

翌日、僕は朝早くに起きて、始発の電車にのり、ふたたび福猫町へ向かった。

福猫町は僕の住んでいる岩熊駅から大分距離が離れているので、やはり画廊での仕事が正式に決まったら、この町に引っ越す必要があるかもしれない。

電車での移動中、僕は、今度はどんな所に住もうか、まだ見ぬ新しい新居のことで、頭がいつぱいになった。

あくまで、その新居も、次の仕事が決まるまでの間だけの予定だけれども・・・。

やわらか画廊についたのはおおよそ10時10分前だったけれど、さすがに僕の面接があることを上杉さんも覚えていてくれたみたいで、画廊はもう開いていた。

『おっはよう！マサルくん。今日はいい天気だね』

僕の姿を見かけると、すぐに笑顔で迎えてくれた画廊の店主の上杉さんは、今日も、一昨日とまったく同じ変な格好をしていた。

『おはようございます。今日はよろしくお願いします』

僕はおじぎした。

『いやだね、そんなかしこまらなくていいよ。』

一応の形だけの面接って言ったでしように。

今日はなんていうか、マサルくんが、どういう人間なのかを知るための面接、というか

会談？みたいなものだよ。

でもまあ、スーツで来てくれた時点で、君のキャラクターがなんとなくつかめるけどね』

そう言うと、上杉さんは僕の一張羅のスーツをジロジロ眺めた。まるで、スーツという服を生まれて初めて見たという風に。

『いや、一応、面接にはスーツかなと・・・』

僕は、彼の視線に気まづくなくて答えた。
そして、やっぱり普段着で来ればよかったと思った。

『うーん、やっぱり画廊店主としては、スーツも悪くないなあ。今度、僕も買いに行こうかな』

上杉さんはひとしきり僕のスーツを眺めた後、そう呟き、画廊の真ん中の、テーブルをはさんで対になっているソファの片方に座り、その対面側のソファに僕を誘導した。

画廊の店内は天気良かったので、吹きぬけになっている二階の窓や、円状のガラスばりの天井から、日光が強く差し込み、一昨日に比べ、よりキラキラ輝いていた。

『ここはすごい建物ですよ。こんな洒落た建物ってあんまりないんじゃないですか？』

僕は思わず言った。

『いいでしょ、いい。』

実は実は、僕が設計したんだよ。

僕はもともと設計士だったりするのだよ』

『ええ、本当ですか？』

上杉さんは得意そうに続けた。

『まあ〜ね〜。』

これでも昔は、業界でちょっとした有名人だったんだよ。

レトロで斬新、かつゴキゲンな家を建てる若手建築家・上杉国男！
！！ってね〜』

『へえ、すい・・』

僕は驚くと同時に、なんだが風変わりな彼なら、どんな偉業を成しててもおかしくないような気もしてきた。

『でも、じゃあ、なんで今は画廊をやってるんですか？』

僕はそう尋ねた後で、しまった、失礼なことを聞いたかもしれないと後悔したが、上杉さんはビョウビョウと答えた。

『うーん、なんていうかな、有名になればなるほど、ものつくりの喜びはなくなるんだよね。つまり仕事として割り切らなくちゃいけないようになるというか。』

でさあ、依頼主の注文も多くなって、それにハイハイ従ってたら、自分がどんどん嫌いになってきちゃってさ。

だから、思い切って、設計士はおしまいにして、父親がやっていたこの画廊を継ぐことにしたんだよ。
僕は絵も好きだしね。』

『なるほど・・・』

僕はひとまず、上杉さんが自分の意志で設計士をやめたらしいので、ほっとしたが、自分と比べ、彼がとてもうらやましくなった。

僕も広告会社を、自分の意志で辞めたとは言え、彼みたいに格好よく（あるいは、潔く）、プライドのために止めたわけじゃない。

どちらかというと、僕の場合、追い込まれて嫌になって逃げ出したという感じだった。

『あ、そうだ！！お茶お茶・・・』

『いやいや、おかまいなく・・・』

突然、僕が遠慮する間もなく、上杉さんは画廊の奥のドアを開けて行ってしまった。

この画廊の奥はおそらく彼と、彼の娘の文学少女の居住区になっているのだろう。

唐突に一人、画廊に取り残された僕は、キョロキョロ画廊の中を見回してみた。

一階は、大体平均的な学校の教室くらいの広さで、壁一面に絵画が綺麗に並べられている。

僕が美大時代に学んだような大御所の有名作家の作品は、もちろんなさそうだったが、今流行りの若手作家の作品だとわかるものは何点があった。

どうやら、このやわらか画廊は、若手作家や、新人作家の絵を多く

取り扱っているらしい。

僕は、大体自分と同世代の作家が活躍していることを妬ましく思った。

一階の端には、簡単な作りの鉄骨階段があり、そこを上れば、一階と同様に、何点かの作品が並べられている二階に上られるようだった。(とは言っても、吹き抜けになっているから、二階は狭い渡り廊下のような感じだが)

一方、その反対側の端には、長年使われていなさそうな(少なくとも僕がイルカの絵を買った時は使わなかった)レジスターが置いてあるカウンターと、そのカウンターの裏に一昨日、文学少女に入れてもらった地下倉庫へと続く、階段があった。

そう言えば、今日は文学少女はいないのだろうかと思つと、ちよつと、お茶を持って上杉さんが奥のドアから戻ってきた。

UNU

？面接というか会談のようなもの？（後書き）

毎度どうも。

とは言え、これを読んでくださっている天使のような方はおられるのだろうか・・・。

この前回分、つまり1-1話を少し訂正しましたので、その旨お伝えします。読んでくださっている方がいれば、どうぞこれからも「遠い町からやってきた。」をよろしくおねがします。

と、なんだか小説口調みたいになってしまったww

？面接といつか会談のようなもの？

『おまたせ。マサルくん、緑茶で良い？』

『あ、はい。すみません、ありがとうございます』

『どづいたしまして、はいどづぞ』

上杉さんは僕にお茶を渡すと、姿勢を正して言った。

『じゃあ、一応の面接ということ、今度はマサルくんのこと聞かしてもらおうかな。』

じゃあ、まず、前の仕事は何で辞めたんだい？
まさか悪いことはしてないよね・・・？』

『もちろんしてません』

僕は、カバンから、職歴も書いてある履歴書を取り出し、上杉さんに渡し、続けた。

『以前はこの広告代理店に勤めていたんですが、どうも仕事に馴染めなくて……』

学生の時は、僕は想像力とか、その手のものに自信があったので、広告業界に向いてると思って就職したんですが、実際、広告の世界に入ってみると、想像力以前に、主張だったり、コミュニケーションが求められたんです……』

僕は特別、会話が苦手とか、そういうわけではないんですか、何と
いうか……、押しが弱くて……』

僕は半分嘘をついた。

僕は正直、会話だって苦手だ。
嫌いじゃないけど、苦手だと思う。

『なってるほどね、まあ、良く知らないけど厳しそうな世界だもんね。』

『広告代理店ってどういう広告作る会社だったの？有名なやつ？』

『えーと、CM制作会社で、たぶん知っていると思いますけど、マリン社のお口快適・四色ガムのCMとか、作っている会社だったんですよ』

『へー、知ってる知ってる！』

あれ作った会社で働いてたんだ！じゃあ、結構大きいとこだよね？」

『いや、まあ・・・、僕は本当に下っ端で、ただの小間使いでしたけど・・・』

確かに僕の勤めていた会社は、テレビCMなどで、なかなか実績のある制作会社だった。

そこで僕は、CM撮影のためのロケハンや弁当の手配、スケジュールの管理などの雑用をやらされていた。

しかも、朝から晩まで怒鳴られっぱなしで、かなりハードに。

そもそも、なぜ、こんな駄目駄目な僕が、そんなところの入社試験に受かったのかは今でも謎だ。

『小間使い、影山マサル……。』

……うん、いいね！

静香ちゃんもそう言ってたけど、君は真面目みただし、信用おけ
そうだ。

まあ、若干、押しが弱くても、画廊には問題ないかな……。
基本、商談は僕がやるしね。

君は、最初は一般のお客さんの相手してもらったり、雑用してもら
うくらいかな。うん。

仕事について、なんか質問あるかい？』

『じゃあ、あの……。聞きにくいんですが、給料と、勤務時間につ
いて聞かせてください』

『おお、それは確かに大事なことだ！』

まず、勤務時間は、火、木が定休日で、時間は10時〜6時くらいまでかな。

給料は・・・え〜と、そうだな〜。

もちろん働きによって変えるけど、最初はこのくらいでどうだい？』

上杉さんはピースしながら言った。
20万・・・。

まあ、大体その程度だろう。
むしろ、割といい方かもしれないと僕は思った。

『オーケーです。ありがとございます。』

それと、僕は今、岩熊に住んでいるんですけど、この町に引っ越し

「きた方がいいですよね？」

僕は来る時に考えていた新居のことを思い出した。

『そうだね、そりやできれば、引っ越してきてもらいたいけど・・・』

うーん、そうだな。

本当は、画廊と僕んち、くっ付いているから、住み込みにしてあげてもいいくらいなんだけど・・

年頃の茉莉ちゃんもいるからな。

冗談じゃない。

僕は他人の家族と一緒になんて暮らせない。
僕は基本的に一人にいる方が好きなのだ。

『お、そうだ！！』

格安のアパートを紹介してあげられるかもしれない・・・。

面接が終わったら、この後、隣の喫茶店に行こう！』

『え？喫茶店？』

僕は一昨日寄った文学少女と、無愛想なマスターがいた落ち着かない喫茶店『楓』を思い出した。

『喫茶店に何しに行くんですか？』

『ふっふっ。行けばわかるさ……。
迷わずいけよ……。BY猪木。』

あっ、そうそう。

ちなみに、あそこで茉莉ちゃん、バイトしてるんだよ』

『ああ、知ってます。一昨日、行ったので。』

それで娘さんに会って、ここを開けてもらったんですよ』

『えっ、なんだっ。もう知ってたんだっ』

上杉さんはなぜか残念がっていた。

『そういえば、今日は娘さんはいないんですか？』

僕は、『今たまたま思い出しましたよ』みたいな言い方で聞いた。

『おっ、気になっちゃう感じですか？』

『いや、別にただ、いないのかなと思って・・・』

うぜえ〜と僕は思った。

僕はもっと素直でふわふわな子が好きだったからだ。

『ふふ、茉莉ちゃんはね、今日は朝から大学だよ。』

高いお金払ってるんだから、まじめにお勉強してもらわなくちゃね。

これからは、マサルくんにもお給料払わなくちゃいけないし・・・』

上杉さんはそう言うと、思い出したかのように、真面目に僕の履歴書に読み始め、僕の書いた適当な志望動機や、趣味の『絵を描くこと』などについて軽く触れ、質問した。

彼は、絵が本当に好きみたいで、僕が美大時代に描いた油絵の話などに、やたら反応して質問した。

どうやら僕は、このやわらか画廊への就職が決まりそうだ。

僕はひとまず、ホッとした。

へっ。

？無愛想マスター・ノリスケ

面接というか会談のようなものは、大体40分くらいで終わった。

とは言え、後半はひたすら、上杉さんによる芸術論講座になっていたが・・・。

『さてと・・・、面接、お疲れ様でした。』

じゃあ、一応、来週から働いてもらえるかな・・・？』

『はい。よろしく願います！..!』

僕はここぞとばかりに、気合を入れて言った。

一方、上杉さんはゆるりと答えた。

『はい、こちらこそ。』

うんじゃあ、そろそろ11時だし・・・、楓に行こうか?』

なんだかよく分からないまま、僕は上杉さんに連れられて、やわらか画廊の向かいにある喫茶店『楓』へと向かった。

僕は正直、この喫茶店には二度と来るつもりはなかった。

それほどまでに、店員の態度がひどかったのだ。
もちろん、文学少女も含めて。

しかし、改めて店構えを見ると、やわらか画廊と雰囲気がよく似ていることに僕は気付いた。

レトロかつ、エレガントなレンガづくり。

『もしかして、ここも上杉さんが設計されたんですか？』

僕は気になって聞いた。

『そつだよ』

相変わらず、上杉さんはニコニコして答えた。

やっぱり、この人はすごいなと、僕は改めて感心させられた。

『おっす!!!ノリちゃん!!!』

上杉さんは喫茶店に入るやいなや、愛想よく、マスターに挨拶した。

そして、無愛想なマスターも一応、それに答えた。

『おう、国男か……。こんな時間にめずらしいな……。』

『へへ、ちよっとね。』

あと、ノリちゃんさ、このマサルくんが来週から、僕の所で働くからよろしくね〜』

上杉さんは僕の肩に手を置き、そう言って、マスターに僕を紹介した。

『・・・どうも、よろしくおねがいします』

僕はマスターに軽く会釈して、そう言った。

『ああ、この前の・・・』

『うんうん、一昨日も、マサルくん、ここに来たらしいね。』

で、マサルくん、彼はここの店主のノリスケ。通称・ノリちゃん。
僕の同級生なんだよ』

『へー、そうなんですか・・・』

上杉さんが、今度は僕にマスターを紹介すると、マスター・ノリスケは何も言わず、会釈というかなんというか、顎を、クイツとニワトリみたいに突き出した。

『マサルくん、ノリちゃんは怖い顔しているけど、いい奴だからね。きつと、色々よくしてくれるよ。
ね？ノリちゃん？』

『まあ・・・、お前がそう言うなら・・・、よろしく』

マスターはそう言って、もう一度僕に向かって、例のニワトリ会釈をした。

それを見て、上杉さんも満足したようだった。

確かに、同級生と言うだけあって、二人は親しそうだ。

しかし、変な格好をして若々しい上杉さんと比べ、マスターはビシツと洗練されたワイシャツを着ているので、二人はとても同じ年には見えなかった。

『じゃあ、ノリちゃん。』

いつものスペシャルブレンドと・・・え〜と、マサルくんは何する
『?』

『え? ああ、じゃあ、同じのを・・・』

『あーいよ』

上杉さんと僕のコーヒーの注文に、マスターは、またもや、めんどくさそうに答えた。

彼が無愛想なのは、特別、僕に対してだけではなく、もともと彼が無口でぶっきらぼうな性格のせいだと、僕はなんとなく分かってきた。

『じゃあ、いつもの席に・・・座ろう・・・かね』

上杉さんは、一昨日、僕が座った席に座り、僕を手招きし、対面上に座らせた。

『もう、そろそろ来ると思うよ』

一体、誰が来るといふのだろうか。

僕が上杉さんの言葉に不思議がっていると、一昨日の品の良い老夫婦が店内に入ってきた。

『こんにちはー』

う
ぐ
う

？僕の話なんて聞いちゃいない

『こんにちわ、ジロさん、キミさん』

上杉さんは入ってきた老夫婦に手を振って、あいさつした。

『あら？？こんにちわー、上杉さんに・・・、アナタ！
またここに来ているの？』

上品でオシャレなお婆さんは、上杉さんと、僕の姿を見るといなや、
すぐに話しかけてきてくれた。

『イルカの絵はあったかい？』

僕が答える前に、今度は、一昨日と同じ席に腰かけたお爺さんが質問してきた。

彼も、お婆さんと同様に品が良く、清潔で洒落たセーターを着ていた。

『はい。おかげさまで無事に買うことができました』

僕は愛想よく答えた。

『それはよかったわね』

お婆さんも椅子に腰かけるとそう言って、ほほ笑んだ。

きつと、この人は、若いころはさぞ美しかったんだろうなと僕は思った。

もちろん、今だって奇麗だが・・・。

『とじろで、上杉さん。』

こんな時間にどうしたの？めずらしい。

「この子と、知り合いなの？」

『いやいや、知り合いといつかなんといいか・・・。』

彼は、色々あって僕のところまで働くことになった影山マサルくん。

以前この町に住んでいた、ほら、あの秋山さんの所の、静香ちゃんの後輩だそうで・・・。
これから、色々よろしくお願いしますね〜
』

『ああ、あの静香ちゃんの・・・』

『よろしくお願いします』

僕は上杉さんに紹介されて、二人に向かって挨拶した。

それにしても、この二人も秋山先輩のことを知っていることみたいで僕は驚いた。

『で、今日は、このマサルくんのごとで、お二人にお願いがあつて来たんですよ。』

マサルくん、この二人は、駅前の『グリーンハイツ』というアパートの管理人をやっているんだよ』

なるほど。

僕は、上杉さんがこの二人に用があると言ったことに合点がついた。

しかし、正直、僕は自分の新居は自分で選びたかった。

なぜなら僕は、清潔でオシャレなアパートじゃないと満足しない。

『引っ越してくるの?』

上杉さんの言葉で全て理解したらしいお婆さんが聞いてきた。

知的な見た目通り、なかなか頭が切れるようだった。

『はい。でも僕は・・・』

『引っ越してくるなら、ウチのアパートに住むといい。』

ちよつと、ひとつ、部屋は空いているよ』

さっきと同じく、僕がお婆さんの質問に答え終わる前に割り込んだ

お爺さんは、ニコニコしながらそう言ってくれた。

ただ、彼はお婆さんとは違い、僕と上杉さんが最初からそのことを頼みに来たことを分かっていないみたいだった。

『はい、それはありがたいんですが・・・』

『はい、おまち!』

今度は、マスター・ノリスケが僕の話割って、僕と上杉さんの注文したコーヒーを持ってきた。

しかも、勢いよく置いたため、コーヒーが少し零れた。

『あ、マスター。あたし達もいつものお願いね』

『はい、了解しました』

お婆さんが注文すると、マスターはノシノシ、カウンターへと戻っていった。

『えっと・・・、そうそう、ジロさん、そのことを僕らは頼みにきたんですよ〜。』

ジロさんの所なら、マサルくんも安く住めるだろうって思ってた』

上杉さんは話を戻した。

『ウチのアパートは、小遣い稼ぎの趣味でやっているようなものだから、割とリーズナブルなのよ』

お婆さんは僕を見て、にこやかに説明してくれた。

もちろん、僕だって安い方がいい。

しかし、やっぱり何よりも、僕が優先するのは清潔でオシャレなことだ。

そうじゃないと、どんなに安くても満足しない。

上杉さんと、老夫婦の二人には申し訳ないけれど、僕はきっぱり、自分で決めると、断る必要がある。

よし、僕は気合いを入れた。

『あ、あの・・・、本当に有難い話なんですけど・・・』

『それより、君は、いつ、ここに引っ越してくるんだい？』

いつ、ウチのアパートに来る？

いつから画廊で働くんだい？』

お爺さんは、またもや割り込んだ。

彼はちっとも、僕の話なんて聞いちゃいない。

・・・はあ。

もういいや、住まいなんてどうでも。

彼らに新居を委ねよう。

僕は流れに逆らわないことにした。

くじく

？まるやかアパート『グリーンハイツ』

喫茶店『楓』で、上杉さんと別れた後、僕は老夫婦のジロウさんと、キミ子さん（という名前らしい）に連れられ、彼らが管理人を務める、駅前のアパート『グリーンハイツ』を見に行くことになった。

『ほら、見えてきた。アレがウチのアパートだよ』

お爺さんが自慢げに指さしたアパートは、『グリーンハイツ』という、その名の通り、見事に緑色したアパートだった。

いや、正確に言えば、淡いミントグリーン。

僕の感じた第一印象は、『そう悪くない』。
そんな感じだった。

特別、清潔ではないし、オシャレでもなかったけれど、その淡いミントグーリンの本体部分（所々黒ずんではいたが）と、そこから突き出た、白い螺旋階段のコントラストは、なかなかいい感じだった。

いい意味で気の抜けたアパートとも言える。

『まるやかで、ステキですね』

僕はお世辞半分、本気半分で二人に感想を述べた。

『そう？気に入ってもらえたなら、うれしいわ』

お婆さんは、にこやかに言った。

このアパートなら、僕も住んでいいかなと思えてきた。

『全部で何部屋あるんですか？』

僕は聞いた。

『え〜と、一階に二部屋、二階に二部屋の全四部屋。』

今は一階と二階に一人ずつ、二人の人が暮らしているのよ。』

『へえ、どんな人が・・・』

『ちなみにマサルくん、その隣にある家に、ワシらは住んでいるんだよ。』

また、お爺さんは、僕の質問に割り込んできた。

正直、そんなことはどうでもいいのに。

と、僕は思いつつ、先にある隣の家を見てみると、なかなかの豪邸があった。

洋風の作りの家で、白い壁にオレンジの屋根。

その屋根には、どつやら屋根裏部屋もあるみたいで、小ぶりのお城みたいに見える。

さらに、重厚な門もあり、その門と玄関の間を、鎖で繋がれたダルメシアンがウロウロしていた。

『すじい・・・』

僕は思わず漏らした。

それを聞いて、お爺さんは満足したようだ。

おそらく、この老夫婦はこの家と、アパートを持っていることから推測するに、かなりのお金持ちのようだった。（とは言え、二人が着ている服からなんとなく気付いてはいたが・・・）

『もう、あなた！』

ウチの家はどうでもいいでしょ！！！

ごめんね、マサルさん。

アパートの部屋の中も、今見せてあげるわね』

『あ、はい。ありがとうございます』

『ついて来て』

そう言いつつ、お婆さんは一階の奥の部屋の前に行き、お爺さんに指

示して鍵を開けさせた。

『中はあまり広くないけど、日当たりは最高よ』

お婆さんはそう言って、僕を部屋の中に入れてくれた。

なるほど。

確かに、バスルームとキッチンスペースはあるものの、あとは6畳程度のフローリングの部屋が一室あるだけで、特別広くはなかった。

しかし、彼女の言うとおり、窓ガラスからは、よく日が差し込み、よく手入れされたアパートのちょっとした庭（パンジーの花壇があった）がのぞけた。

僕は、部屋の中も悪くないと思った。

『いいですね、ぜひ、ここに住みたいです』

僕が二人にそう告げると、突然、隣の部屋から、爆音で音楽が流れ
てきた。

しかも、なんだかよく分からないアニメソングみたいな曲・・・。

うづく

？やましいことなど一つもない

『また、舟木くんだわ・・・』

『しょうがないね、あの子は・・・』

隣から流れてきた爆音に、お婆さんと、お爺さんは顔を見合わせて、そう言った。

『あ・・・となりに住んでいるのは、どういう方なんですか？』

この爆音で一気に、僕はこのアパートに住む気が失せた。

『そのの大学に通っている学生さんなんだけど・・・。
いや、すごくいい子なのよ・・・』

ただ、音楽は、前も注意したんだけどね・・・』

『ちょっと注意してっよっ』

そう言うと、お爺さんとお婆さんは部屋の外に出て、萌え系（？）アニメソングが流れる隣の部屋へと向かった。

なんとなく気になった僕もその後につき、ドアの影に隠れつつ、お爺さんが呼び鈴を鳴らすのを覗くことにした。

こんな音楽を恥ずかしげもなく、爆音で流すのは、どんな奴なのか見てやるうと思っただのだ。

しかし、お爺さんが呼び鈴を押し、しばらくすると、すぐに音楽は鳴り止んだ。

そして、隣の部屋のドアは、数十センチ程度、開いた。
僕のいる所からは、住人の姿は見えない。

『・・・・・・・・』

『あの舟木くん、もっと音楽の音量を下げてくれるかい？』

『・・・・・・・・』

『よろしく頼むよ』

『・・・・・・・・』

確かに、お爺さんらと、隣の住人は何か話をしているようだったが、その声は小さすぎて、僕にはほとんど何も聞こえない。

いわゆる、引きこもりというヤツだろうか。

僕は得体の知れない隣の部屋の住人に気味が悪くなった。

しかし、お爺さんは構わず、続けた。

『そうそう、舟木くん。』

このアパートに、新しく、人が入ってくることになったからね。

ほらほら、マサルくん。

挨拶して』

そう言つと、お爺さんはドアの影から覗いていた僕をむんずと引張った。

ちよつと待て。

僕はまだ、このアパートに住むと決めてない。

いや、確かに、一度は住みたいと言つたけれど、こんな住人が住んでいるとは聞いていない。

『どうも、こんにちわ・・・』

僕は仕方なく彼に向かって、そう言つた。

彼？

いや、彼なのか。むしろ、人なのか。

数十センチしか開いていないドアから、僕が見たのは、顔も見えないほど前髪が長く、ボロボロのスウェットに身をつつんだ不潔なガリガリの生物だった。

『・・・』、こんにち・・・わ』

か細い声ではあったが、一応、彼はそう挨拶を返してくれた。

しかし、僕と目が合った瞬間、すぐに視線を逸らした。（前髪から覗いた彼の二重の目はギラギラと鋭かった）

『じゃあ、そういうことだから、舟木くんも、これから音楽に気を付けてあげてね』

『・・・はい、すみ・・・ません。』

き、今日は・・・だ、だれも・・・いないと・・・思ったので・・・』

お婆さんの言葉に、彼はそう答え、いそいそとドアを閉めてしまった。

まったく、この男は、色々大丈夫なのだろうか。

僕も人のことを、とやかく言える身分ではなかったが、さすがに、彼を見ていると、人事ながら、僕は心配になった。

『今の舟木くんと、もう一人、二階に、女の子が住んでいるのよ。マサルくんはきつと、二階の、その子の隣の部屋の方がいいかもね』

『確かに、舟木くんの隣じゃ、音楽がうるさくて眠れないかもしれないねえ』

お婆さんとお爺さんは、僕の表情を読み取ってくれたのか（たぶん、お爺さんの方は確実に読み取ってはいないだろう）、気を利かして、そう言ってくれた。

女の子。

僕はその言葉にちょっと、グツときた。
もしかしたら、いい出会いがあるかもしれない。

『その二階に住んでいる人は、どんな方なんですか？』

僕は聞いた。

『え〜と、チエちゃんは、明るくて、オシャレな子よ。
たぶん、今は仕事で、上にはいないと思うけどね・・・』

なんかね、隣町のインテリアショップで働いているらしいのよ』

明るくオシャレなチエちゃん（インテリアショップ勤め）・・・。

僕は、頭の中で、僕の理想のふわふわした可愛い女の子を思い浮かべた。

『で、マサルくんはいつから、ここに住むんだい？』

お爺さんのその声で、僕はチエちゃんの妄想から、現実に戻された。

『え〜と、明日中に荷物まとめて、明後日にも引っ越してきます』

僕は、このアパート『グリーンハイツ』に住むことを決めた。

もちろん、このまるやかな建物が、とても気に入ったからだ。

決して、チエちゃんが目当てではない。

僕の入居理由に、やましいことなど一つもない。

たぶん。

つづく

？引越しの誓い

翌日、僕は丸一日かけて、引っ越しのための荷造りをした。

他に良い仕事が見つかるまでの住まいだから、荷物は少なくていい。

タンスや、ソファといった余計な家具はいらない。

座布団や、段ボールがあれば、それで十分だし、狭い部屋の中では却って邪魔になるだけだろう。（そもそも、もう買い替えて良いと思った）

僕は必要最低限の冷蔵庫や、電池レンジなどの電化製品を、一年前に買った軽のワーゲンバスに詰め込み、あとの家具は業者を呼んで引き取ってもらった。

洋服や、生活用具などの細かいものは、明日朝一で宅配便で送ってしまえばいい。

問題は大量に買い集めた本や、CDだ。

僕は散々迷ったあげく、結局、そのほとんどを捨ててしまうことにした。

なぜだか、分からないが、そうすることが正しいことのように思えた。

そうして一通り、部屋が片付き、部屋がガラガラになると、僕はなんだか寂しくなってきた。

この部屋で過ごした二年間は、前の会社で働いていた二年間でもある。

僕は、僕の辞表を受け取った時の、上司の呆れた顔と、『お前みたいなヤツは、一生、いつまでも逃げ回るんだよ』という最後の言葉を一生忘れないだろう。

辞めた会社のことを色々思い出して、落ち込んできた僕は、その日は早めに寝てしまっことにした。

早く、新しい明日を迎えてしまっのだ。

明日になれば、僕はもう福猫町の住人だ。

・
・
・
・
・

福猫町まで、車で行くには、結構な時間がかかった。

当初の予定では、昼までには『グリーンハイツ』に着くはずだったのに、実際に着いたのは、もう夕方になってからだった。

僕は、アパートの管理人のお爺さんに紹介された月極めの駐車場にワーゲンバスを留め、部屋の鍵をもらいに、お爺さんの豪邸を訪ねた。

『おそかったねえ。心配したよ、マサルくん』

本当にお爺さんとお婆さんは心配してくれていたようだった。

『すみません。思ったよりもかかってしまっ……』

『まあ、上がって、ゆっくり休憩していきなさいよ』

二人はニコニコして、そう言ってくれた。

けれど、僕は先にアパートへの荷物運びを終わらして、早く落ち着きたかったので、丁寧に断った。

僕はせっかちなのだ。

そして、お爺さんから鍵を受け取ると、僕は駐車場と、アパートを何往復もして、荷物を202号室（それが新しい新居だ）まで運んだ。

運んでいる途中、一階に住んでいる引きこもりの舟木の部屋（101号室）から、謎の雄叫びが聞こえてきたが、それを除けば、引越は順調に進み、8時前にはなんとか終わった。

それから僕は、駅前のコンビニで、カップラーメンとビールを買って、一人で引越祝いをした。

10時頃に、隣の、例の明るくオシャレなチエちゃんが帰ってきたみたいだったが、今日はもう遅いので、引越しの挨拶は明日にすることにした。

もちろん、引きこもりの舟木にも、明日ちゃんとするつもりでいる。

そうすることで、これからの暮らしの良しあしが決まるだろう。（
下手に反感を買えば、嫌がらせをされるかもしれない）

僕は『今までのように逃げない』と、漠然と自分に誓い、新しい生活を期待しながら寝た。

目が覚めたら僕は生まれかわるのだ。

U
U
U

? ミーシャとフナムシ

新たに生まれ変わった僕は、ソワソワしながら10時になるを待ち、覚悟と期待を持って、隣の部屋のチエちゃんに挨拶をしに行った。

運命の人。

僕はそんな言葉が頭に浮かんだ。

『・・・何?』

僕は目が点になった。

現れたのは、僕の想像したふわふわの女の子ではなく、編みこみのトレッドヘアーをした背の高い女性だった。

しかも、耳はもちろんのこと、まゆ毛の上や、唇まで、ピアスだらけだった。

『あ、あの・・・、あなたがチエさんですか？』

僕はあまりに想像と違う彼女に驚き、そして恐れ、思わずそう聞いた。

『・・・だれ？何の用？』

『あ、いや・・・ぼ、僕は新しく、隣に引っ越してきた影山マサルと言います。引っ越しのあいさつに来ました』

『ふーん・・・。』

・・・ああ、そう言えば、聞いてる聞いてる』

Tシャツにジャージのズボンという格好した彼女は、明らかに寝起きのようで、イライラしていた。

『「これ、つまらないものですが・・・」』

僕は、彼女に引越しの挨拶として、タオルを渡した。

『ふぉーい。ありがとう・・・』

彼女はアクビをしながらタオルを受け取ると、僕をボーっと観察して唐突に言った。

『君さー、今思ったけど、メガネを外したら、芸能人のあの人に似てるよねー。』

何て言ったけ？

ほら、あの、この前、ドラマやってたヤツ!』

『え、誰ですか?』

僕は、芸能人に似てるなんて言われたことは一度もない。

『ほら!何て言っただっけ?』

いいから、ちょっと、一回メガネ外してみてよ』

僕は彼女に言われ通り、メガネを外して見せた。

『……あれ？ああ……、やっぱり気のせいだったわ。もういいや』

何だそれ。

僕は少し、イラっとしてメガネをかけ直した。

『まあ、とにかくこれから、よろしくおねがします』

僕はもう、さっさと帰るつもりだった。

『うん、よろしくシナチク。』

あ、あとさ、アタシのこと、チエって呼ぶの止めてくんない？

たぶん、君は管理人のキミ子さんから聞いたんだと思うけど・・・。
アタシ、その名前気に入ってないんだわ・・・。

アタシのことはミーシャって呼んで。

周りから、そう呼ばれてんだ』

『・・・？ミーシャ？』

『そ。ほらー』

彼女は自分の編みこみのドレッドヘアを指さし、僕に見せつけた。

なるほど。

確かにミーシャだ。

『じゃあ、そういうことでよろしく。』

それと、下のフナムシには気をつけなよ

そう言うと、彼女はドアを、勢いよく閉めた。

フナムシ？

引きこもりの舟木のことだろうか。

気をつけるとは、どういうことなのだろうか。

僕はなんだか怖くなってきた。

しかし、それ以上に、明るくオシャレなチエちゃんへの幻想を打ち砕かれた僕は、打ちひしがれた。

確かに、お婆さんが言っていた通り、彼女は（ピアスだらけのドレツドヘアーで）オシャレだったし、（大胆不敵な感じで）明るかった。

しかし、ニュアンスが大分違う。

・・・はあ。

まあ、現実とはこんなものだ。
運命の出会いなんて、そうそうない。

現実を思い知らされた僕は、一階に住む舟木にさっさと挨拶をすませ、気分転換に町を散策しようと思いついた。

『 …… 』

『 ……おはようございます。
改めて、引越してきた影山です。
よろしくお願いします 』

『 ……よろしく…おねがい…しま… 』

舟木は相変わらずだった。

僕は、なかなか受け取らない彼に、タオルを半ば強引に押しつけ、細心の注意を払って、すぐその場から離れた。

ミーシャが言っていた『フナムシに気をつける』という言葉が頭をよぎって、怖くなったからだ。

実際、彼の機嫌を損ねたら、何をされるか分からない。そんな雰囲気は舟木にはあった。

まったく、この町は変な人ばかりだ。

僕はそう思いながら、目的なく町へと繰り出した。

つづく

？公園でのノーヴァリス

みかん。

やはり、この町はどこからか、みかんの良い匂いがする。

僕は犬みたいに、ふんふん匂いを嗅ぎながら、町を練り歩いた。

福猫町は、駅前通りは商店街などで、そこそこ賑わっているが、駅から離れると、基本的には閑静な住宅街で、非常に落ち着いた雰囲気放っている。

僕は、お爺さんが近くに大学があると言っていたの思い出し（舟木がその学生らしい）、ぶらぶら歩きながら、その大学を探してみることにした。

理由はとくにないが、久しぶりに大学特有の、あのゆるやかな感じを味わいたかったのだ。

駅前通りを越え、やわらか画廊のある住宅街の通りも越え、ひたすら、まっすぐ歩いた。

しばらくすると、木が生い茂る広い公園（というより、ちょっとした森）に出た。

公園の中には、テニスコートもあり、学生らしい男女が楽しそうにテニスをしていた。
おそらく、大学の所有するテニスコートなのだろう。

僕は、公園内の自販機でジンジャーエールを買い、目に入ったベンチに座り、それを飲んだ。

黄色く染まったイチヨウと、テニスをする学生達を、交互に眺めながら、ジンジャーエールを飲むのは、なかなかいい感じだった。

何て緩やかな時間なのだろう。

僕はこの瞬間を味わった。

そして、ちょうど、ジンジャーエールを飲み干すと、どこからともなく、黒猫が現れた。

以前、駅前で見えた猫だろうか。

『こんにちわ』

僕は例によって猫に向かって話しかけた。

『・・・』

『お前はこの前、駅にいた猫かい？』

『……』

猫は何も言わず（当然だが）、僕をジッと見つめていた。

『お前は一体何してるんだ？』

『……いや、あなたが何してるのよ』

猫が喋った！！

……と、最初、思った。

しかし、声が後ろからしたことに気付き、後ろを振り向くと、涼しい目をした文学少女が立っていた。

『何してんの？』

彼女はまた聞いた。

『えっと、別に・・・、何も・・・』

僕は猫に話しかけているところを文学少女に見られ、急に恥ずかしくなってきた。

しかも、気付けば、もう黒猫はいなくなっていた。

『そっちこそ、こんなところで、何してんの？』

僕は話題を変えるために、聞き返した。

『読書』

彼女は端的に、そう答え、文庫本を僕に見せた。

『こんなところ？』

『そう。そこ、あたしの特等席』

彼女はそう言うと、僕の座っているベンチを指さした。

『ああ、ごめん』

僕はジンジャエールの缶をどかし、彼女の座れるスペースを作った。

『ジロウさんのアパートに、引っ越してくるって本当？』

彼女は僕の隣に座った。

『うん。というか、もう昨日引っ越してきたんだよ』

『へー・・・』

彼女がそう言うと、しばらく気まずい沈黙が続いた。
何を話していいのか、僕はよく分からなかった。

『何の本読んでるの？』

僕は彼女の持っていた文庫本に目につけた。

『ノヴァーリスの青い花』

聞いたこともなかった。
有名な作品なのだろうか。

『ノヴァーリスって有名な人なの？』

『さあ・・・？』

まだ、ドイツの詩人ってことだけしか、知らない・・・』

『まだ・・・？』

『だって、まだ読んでないもの。
さっき、大学の図書館で借りてきたばかりなの』

そう言うと、彼女は、その本をパラパラめくりだした。
彼女も、この町にある舟木と同じ大学に通っているのだろうか。

僕の通っていた美大では、なぜか図書館に小説の類の本はなかったので（画集などは山のようにあったが）、彼女の言うように、大学で小説を借りれることに不思議な感じがした。

『君は、本が好きなんだね』

僕は、適当に思ったことを口にした。

しかし、なぜだか分からないが、それが彼女の勘に触った。

『だから何？何か問題ある？』

『いや、別に問題があると言ったわけじゃなくて・・・』

『あつそ。』

じゃあ、あたし、コレ読むから。

あなたは、どっかに行ってきたら？』

つまり、『とつと、失せる』という意味か。

僕は、文学少女の、謎の突然の怒りに、そこから立ち退かずにはいられなかった。

彼女はなぜ怒ったのだろう。

僕はこれから働くやわらか画廊の娘である彼女に嫌われたんじゃないだろうかと心配になった。

つづく

21話へ至って楽で、至って退屈な仕事へ (前書き)

どうも。ここまで読んでくださって、真にありがとうございます！
一応、ここから第二章ということになりますので(起承転結の承とでも言いましょうか)、これからもよろしくおねがいたします。

21話へ至って楽で、至って退屈な仕事へ

第二章

それから、あっという間に一週間が経った。

新鮮だった町の景色も、少しずつ、僕のものとして馴染んでいった。

そうして、一日一日が積み重ねられ、ふっと気付いた時にはもう、ただそこに在る見慣れた日常となってしまうのだろう。

日曜日から始まったやわらか画廊での仕事は、楽しいものではなかったが、大変でもなかった。

一言でいえば、『退屈』という表現が一番合っていた。

九時半になると、僕はやわらか画廊へ行き、上杉さんから預かった鍵で、画廊のシャッターを開け、画廊の中を軽く掃除する。（僕が初めて訪れてきたときから比べ、ずいぶん綺麗になった）

そして、十時には店を開け、ひたすら客を待つ。
今のところそれだけ。

けれど、この三日間で、客なんてほとんど来なかったし、来たとしても皆、展示している絵画に興味深そうに眺めるだけで、購入する人なんて一人もいなかった。
まるで、住民向けに無料開放している美術館みたいだ。

それから、お昼近くになると上杉さんは奥の居住区から、ノソノソ出てきて、僕に喫茶店『楓』で昼食を食べてくれるように言ってくれる。(その間、彼は店番をしながら、粘土をこねて変な動物の作品をつくり、僕が昼食を済ませ、帰ってくると、駅前のブックオフに漫画の立ち読みをしに行く)

楓では、相変わらず無愛想なマスターが、特別うまくもまずくもないサンドウィッチやら、オムライスなど、日替わりで色々なものを出してくれた。

ちなみにアパートの管理人のお爺さんとお婆さんはいつも11時くらいから、お茶をしに楓に来ていて、大体僕と入れ違いで店を出て行く。

二人はいつも仲がよく、互いにニコニコして会話をしていた。

それと、公園での一件で、僕が怒らせてしまったと心配していた文学少女・茉莉は、初日から喫茶店で会ったけれど（彼女は割と客が多い、日、月、金だけ楓でバイトしているらしい）、特別以前とは変わらず、僕に高圧的な態度で接し、それ以外は仕事にも関わらず、本を読んでいた。

しかし、マスターもそれを黙認しているようだった。

それを除けば、僕と彼女の接点は、外出する（主に大学に行く）彼女が、やわらか画廊を通りぬける際に、軽く挨拶をするくらいだった。

そして、大体5時半近くになると上杉さんが姿を見せ、僕はもう一度、画廊の掃除をしてシャッターを閉め、アパートへと帰る。

これが、僕の与えられた仕事だ。

今のところ、画廊の利益になるようなことはまったくしていない。基本的に、ただ、椅子に座って、客待ちをしているだけだ。

至って楽で、至って退屈。

本当にこれで、この画廊はやっていけるのだろうか。

僕が心配になってきた四日目、僕にとって初めてのお客がやって来た。

UNU

22話 嵐の前の正装

その日は、朝から上杉さんの様子がおかしかった。

いつもは、お昼くらいにならないと現れないのに、僕が画廊に着いた時には、もう画廊を開けていて、妙にマトモな格好をしていた。

いつもの薄汚い浴衣ではなく、綺麗な紺色の着物に上等な羽織。便所サンダルではなく、ちゃんとした下駄。

それに何よりも一番、僕が驚かされたのは、その顔だった。

ヤギのような髭を奇麗に剃り、ボサボサの髪には、トレードマークのベレー帽はなく、ゴムで束ねていた。

『どうしたんですか、その格好!?!』

僕は思わず聞いた。

『えへへ。今日はちょっと特別なお客さんが来るんでね。ちゃんとした格好しなくちゃいけないんだよ。』

やっぱり、この前のマサルくんみたいにスーツ買ってきた方が良か

『ったかな？』

『いやいや、めっちゃめっちゃ決まっていますよ』

僕はお世辞でも何でもなく、そう答えた。

元々、背が高く、ハンサムな上杉さんの正式な和服姿は、驚くほどに決まっていた。

いつものヘンテコリンな格好に慣れてしまっていたので、却って気持ち悪いくらいだった。

『ホント？』

そう言ってもらえるとうれしいな。

そんでさ、マサルくん。

今日の午後は、店番いいから、地下倉庫の掃除でもしててくれないかな。

なかなか厄介な商談になると思うからね。

上杉さんは、そう言って目を細めた。

『厄介って、どんな人が来るんですか？』

『うん、お得意さんなんだけどね。』

何て言うか、こう、気性が激しいというかなんとというか……。とにかく、マサルくんは引っ込んでいた方がいいと思うな』

僕は、マイペースな上杉さんがここまで言い、正装までしてしまう、まだ見ぬお得意さんに早くも怯えた。

それを察したのか、上杉さんは続けた。

『大丈夫だよ。僕が相手するから。』

それに2時くらいにならない来ないと思うから、それまでリラック
スしててよ』

こんな朝から店に立ち、もうすでにしっかりと正装している上杉さん
はそう言った。

大丈夫なのだろうか。

僕はなんだか、嫌な予感がしてならなかった。

U, U, U

23話 先輩の家の話とババ抜き

十一時を過ぎると、文学少女が大学に行くために画廊の奥の部屋から出てきた。

今日は一時限だけの授業らしい。

『ちよっと、二人とも何してんのよ?』

ちよつどその時、僕と上杉さんは、落ち着かないので、トランプでもやるうということになり、ソファでひたすらババ抜きのババを押し付け合っているところだった。

『あ、茉莉ちゃん!もう学校行くの?』
『いつてらっしやい』

『いつてらっしやい』

僕も上杉さんに倣い、彼女に向かってそう言った。

『・・・はあ。いつてきまーす』

僕らがババ抜きしているのを見て、ため息をついた彼女は、だるそ

うに大学へと向かった。

『娘さんも、今日そのお得意さんが来ることを知っているんですか？』

僕は、上杉さんが僕の手札から、ババを引いていくを眺めながら聞いた。

『うっん。』

茉莉ちゃんには来ることは黙ってるんだよ。

うわっ！また、ババだ〜！

二人じゃ、ババ抜きダメだね〜。

あれ・・・で、なんの話だっけ？

あ、そうそう。

茉莉ちゃんも、その人のこと知ってて、嫌っているから、来ることは黙ってるんだよ』

『そんなに酷い人なんですか？』

『うっん、まあ、お客様は神様ですから・・・』

上杉さんは苦笑いして、続けた。

『マサルくん、僕はね、日の当たらない画家の作品をどんどん売って、彼らにチャンスを与えたいと思っっているんだよ。

画家が有名になるには、作品を流通させないといけない。

一つの場所で留まってちゃいけないだ。

グルグル回して、色んな人達の目に触れないといけないんだよ』

堂々とそう言うと、上杉さんは、何回もシャッフルした手札を僕に向けて選ばせた。

そしてまた、僕の手札にババが戻ってきた。

流通したババ。

『そう言えば、秋山先輩が買ったイルカの絵なんですけど、あれは本当に誰が描いたのか分からないんですよね？』

僕は唐突に思い出した。

『え？・・ああ、うん。

あの絵は本当に作者不明だよ。

何で？？』

『実は、今思い出したんですけど、秋山先輩にあの絵の作者を探してほしいと頼まれていたんですよ・・・』

ここ最近、引越など色々忙しかったせいで、僕はすっかりそのことを忘れていた。

『うん、はっきり言って見つけ出すのは、かなり難しいと思うな』。

僕も、あの絵の作者を見つけられたら、色んな所に売りこんであげたいんだけどね〜。
仕事じゃ、それらしいのは、まるで聞かないから、まだ無名だと思っただけだね〜』

そう言いながら、上杉さんは、また僕の手札からババを引いた。

『そうですか、やっぱり難しいですよね・・・』

それと、秋山先輩は本当にこの町に住んでいたんですよ？』

『うげ!!! またババ!!!』

静香ちゃんはね〜、うん。そうだよ〜。
今はもうないけど、ちょうど、この通りにあるアパートに住んで
いたんだよ。』

上杉さんは、画廊の外を指さしながら言った。

『気になるんですけど、先輩のご両親はどういう方だったんですか？
あのイルカの絵って、先輩が見つけて一人で売りに来たんですよね？

そのことを先輩のご両親は知っているんですか？

むしろ、あの絵の作者について知っているんじゃないんですかね？』

僕は、色々な事情がありそうで、秋山先輩には直接聞けなかったこ
とを上杉さんに聞いた。

『静香ちゃん家・・・、う〜ん、複雑だったからね・・・。』

僕もよくは知らないんだけど・・・、彼女の家は母子家庭だったんだ
よ。

でも、おそらく静香ちゃんのご両親はどっちも、あの絵には関係し
てないと思うな。

静香ちゃんがあの絵を持って来たのは・・・、え〜と、彼女が高校

生の時だから・・・え〜と・・・。

うん。

まあ、とにかく、あの絵を見つけたのはきつと、お母さんの実家、つまり彼女のお婆さんの家だと思っよ

『え〜と・・・、あれ？』

ちよつと待つてください。先輩は、この福猫町を引越した後、お婆さんの家にいたんですか？』

僕は混乱した。

あまりに一気に、色々聞いてわけがわからなくなった。

『だから、とにかく、静香ちゃんのご両親は、あの絵について何も知らないだろうってことだよ。』

もしも、何か知っているとしたら、むしろ彼女のお婆さんの方だろうね

『・・・はあ、なるほど』

僕は一応、上杉さんの言葉に頷いた。

けれど、それもおかしいと思う。

もし、先輩のお婆さんがイルカの絵について何か知っているなら、先輩は直接お婆さんに聞いただろう。僕はなんだか、よくわからなくなってきた。

『おっと、もうこんな時間だ。』

マサルくん、今日はちょっと早めにお昼休みにしてきていいよ。一時半までには帰ってきてね。』

また、ババが僕の所に戻ってきたところで、上杉さんはそう切りだした。

勝ち逃げか……。

僕は画廊にある八ト時計を見た。

11:43。

特にやることもないから、ここにいても休憩みたいなもんだなと、トランプを片づけながら僕は思った。

『上杉さんはお昼はどうするんですか?』

僕は聞いた。

彼も、今日は朝からここにいたはずだ。

『僕は裏でテキトーになんか作って食べるから気にしないで』

『・・・そうですか。じゃあ失礼します!』

そうして僕は、またいつもの楓で、いつもの上手くも不味くもないマスターのランチを食べに行くことにした。

つづく

24話 憂鬱ナポリタン

『こんにちはー』

『・・・おう』

僕が喫茶店『楓』に入ると、マスター・ノリスケは、いつものようにコーヒーカップを執拗に磨いていた。

彼は、どれだけコーヒーカップを研磨すれば気が済むのだろうか。きっと、コーヒーカップを磨くのが、手癖みたいになっているのかもしれない。

『ブレンドコーヒーと、ランチセットおねがします』

『あいよ』

僕の注文でマスター・ノリスケはコーヒーカップを磨く呪縛から、やっと解放された。

『マサルくん、こんにちはー』

お爺さんとお婆さんは、いつも窓側の席の隣の席に座っていた。

『こんにちはー』

僕も挨拶しながら、自分の特等席になりつつある窓際の席に着いた。

『今日はお昼休み早いのね。どう仕事は？もう慣れた？』

『いや、相変わらず・・・、座っているだけです』

僕は苦笑いして答えた。

画廊の仕事は本当に給料をもらうのが申し訳ないくらいだ。

『暇なのはいいことだよ、マサルくん。リラックスリラックス』

そう言うと、お爺さんはコーヒーを啜る。

彼は、今日も上等な、クリーム色のセーターを着ていた。

もちろん、お婆さんは、またそれよりも上等そうなカーディガンを着ている。

『でも、今日は午後から、お得意さまのお客さんが来るらしいんですよ……』

僕は思い出して言った。

『あら、そうなの？初のお客さん？』

『いやあ、なんか上杉さんによると、なかなか厄介なお客さんだそうで……』

だから、僕はこの後は倉庫の掃除を任せられているんです』

『接客させてもらえないの？』

『……ええ』

お婆さんにそう言われて、僕はなんだか上杉さんに信用されていないような気がしてきた。

そのお客さんがいる間、僕は邪魔にならないように引っ込んでいな

ければならない。

『はい、おまち』

僕が被害妄想を始める前に、ちょうどよく、マスターノリスケはコーヒーとナポリタンスパゲティを持ってきた。

見た目は、とてもおいしそうだ。

でも、味はいつも通り、きつとパツとしないんだろう。

『じゃあ、マサルくん。お食事するでしょうから、私たちはそろそろ帰るわ』

『じゃあね、マサルくん。頑張つて』

そう言うと、二人は会計を済ませ、僕を置いて行ってしまった。

この後、二人は家で昼食を取るのだろうか。

楓に一人残された僕は、食事しながら、いつもそれを考える。

本当はそんなことは二人の勝手だし、別にどうだっていいのだけど。

僕はもうお爺さんとお婆さんのことを考えるのを止そうと思った。

しかし、その後、例の厄介なお客さんのことを思い出し、やっぱり二人のことを考えることにした。暗いことは考えない方がいい。

そうしないと、この特別おいしくないだろうナポリタンは、さらにおいしくなくなってしまっだろう。

つづく

25話 不細工な少年の恋

僕が画廊に帰ってくると、上杉さんは、中学生くらいの太った少年と話していた。

『お願いします!!--』

『いやいや、いくらなんでもそれは無理だよ。あつ、マサルくんお帰り』

上杉さんが僕に気付くと、その少年もチラツと僕のことを見た。まさか、この子が例の厄介な客なのだろうか。

『いらつしゃいませ』

僕がそう言うと、少年は軽く会釈した。

かなり太っていて髪は脂っこく、顔もニキビ面だけれども、礼儀正しいようではある。

どう厄介なのか、僕はよく分からなかったが、上杉さんに言われ通り、ここにいない方がいいのかもしれない。

『じゃあ、僕は倉庫の掃除をします』

『いやいやいや、まって、マサルくん。この子は違うから、まだここにいて大丈夫だよ』

『へ?』

『いやあ、この子はね。駅前通りに住んでいる子でね。この絵を5千円にしてくれって言うんだよ』

上杉さんが指さしたのは、若手作家の牧場の風景画だった。値段は7万8千円。

『どうかお願いします!!これしかないんです!!』

少年の手には、確かに5千円が握られていた。いくら何でも無理があるだろう。

『何で、この絵が欲しいの?』

『それは・・・』

僕がそう聞くと、少年はなんだか急にモジモジし始めた。

正直、不細工な少年のモジモジした姿は見るに堪えないほどに気持

ち悪かった。

『ふふふ。この子はね、好きな女の子にこの絵をプレゼントしたいんだって〜』

上杉さんの言葉に、少年は顔を赤らめて一層、モジモジした。

『この絵じゃないとダメなの?』

画廊には、5千円で買える絵はほとんどなかったが、それでも、7万8千円より、安い絵はたくさんあった。

『メ、メグミちゃんが、この絵の話をしていたんです』

『ほら、マサルくん。一昨日くらいに来た女の子覚えてない?』

『一昨日・・・』

僕は一昨日の記憶を探った。

そういえば、美術館代わりに来た（あくまでも、僕がそう思っただけだが）親子が、この絵を熱心に見ていた気がする。

『もしかして、ショートカットの子?』

僕の言葉に少年は黙って何回も頷いた。
たぶん、イエスだ。

『うんうん、いいよね〜。青春だよね〜。僕だって応援してあげたいけどさ〜。』

でも、さすがに5千円が無理だよ〜』

当り前だ。

もし、5千円で売ってたりしたら、ただでさえ客の少ないこの画廊はすぐに潰れてしまふに違いない。

『そこをなんとかお願いします!~!』

『うん、困ったな〜』

『どうかどうかお願いします!~!』

少年はひたすら上杉さんに頭を下げた。

性格の悪い僕は、どうせこの不細工な少年が、目当ての女の子にこの絵をプレゼントしたところで、おそろく結果は見えているだろう

にと思っていた。

『そうだな、じゃあ、今回は特別に……』

『ダメよ!』

僕らが驚いて振り向くと、大学から帰ってきた文学少女が怒っていた。

つづく

26話 本日のお客様2

『そんな値段で売ってどうすんのよ！まったく儲からないじゃない！』

文学少女は、声を荒げた。

『だ、だよね。そうそう、5千円じゃいくら何でもダメだよ、うん。ダメダメ！分かったかい、キミ？』

『え〜・・・』

少年は唸る。

『とにかく、どんな事情があっても、5千円じゃ売れないよ！もっと別の方法で、彼女のハートをゲットするんだ！恋はガッツだ！！』

上杉さんは熱弁する。

しかし、まったく説得力がない・・・。

『あんたも、わかった!？』

ウチは5千円じゃ売れないから、もう、よそに行きなさい!』

文学少女は今度は少年に向かって声を荒げる。

客だろうと何だろうと、関係ない。

とにかく、彼女はめちゃくちゃだ。

少年は怒鳴られて縮こまる。

『まあまあ、茉莉ちゃん。この子も恋の季節なんだよ。やさしくやさしく・・・』

『はあ?』

文学少女は軽蔑的なニュアンスを込めて、そう言い、少年の顔を見る。

しかし少年は見られて、顔を赤らめる。

『モノで釣る前に、もっと自分を磨いた方がいいわよ』

彼女は不細工な少年に向かって、そう言い放つ。

『深い』と僕は思う。

『そうだね～。まず、髪は毎日洗った方がいいよ～』

上杉さんはそう言つて、少年の肩のフケを払う。
それに一層、少年は顔を赤らめる。

『また、お金を貯めたら、来ます』

そう言つと、少年は逃げるようにして画廊から出て行つた。
しかし、もう彼はこうないんじゃないのかなと僕は思った。

『今日は、学校早いね？茉莉ちゃん』

上杉さんは文学少女の顔色を伺う。

『そんなことより、もう値引きとかやめてよね！それにあなたも、
お父さんを止めてよね！一応、あなただって…』

『ちよつと待つた！』

上杉さんは当然、神妙な顔つきで文学少女の話を止めた。

『お客さん来たみたいだから。じゃあ、マサルくん。倉庫の掃除頼
むよー！』

『は、はい』

僕は突然のことに焦つて、ホウキをもって倉庫に向かう。

『え、え？何？どうしたの？』

一方、文学少女は突然のことに困惑したようだ。

『いいから！茉莉ちゃんもホラッ！倉庫でも行って！
マサルくん！茉莉ちゃんも連れて行って』

上杉さんに言われて、僕は文学少女の腕をつかんで、無理やり地下倉庫に引っ張っていった。

ついに、例の『やかいな客』が来たのだ。

つづく

27話とにかく、彼女はアイツが嫌い

『いらつしゃいませ』

上杉さんの声がする。

僕と文学少女は隠れるようにして、地下倉庫に続く階段前のドアで、息を殺し、聞き耳を立てていた。

『何で、あたしまで、倉庫掃除しなくちゃいけないのよ』

文学少女は、ピリピリとした小声で言う。

『よくわからないけど、厄介なお客さんらしいよ。よくわからないけど・・・』

僕は彼女を倉庫に引き入れたことに、自分の責任がないことを強調した。

『はあ？厄介な客・・・？』

『ちよつとー!』

僕の言葉に燻がった彼女は、地下倉庫のドアを開けようとしたので、僕は慌てて止めた。

『一応、君のお父さんにここにいろって言われているんだから、ここにいてくれよー!』

『なんでよ? 何で、隠れるのよ? 馬鹿じゃない?』

そう言うと彼女は、倉庫のドアを開けた。

しかし、少しだけだった。

どうやら、その『厄介な客』を覗くだけのつもりらしい。

『げっ!』

文学少女はドアの先でそう呟くと、静かに少しだけ開いていたドアを閉めた。

『どんな人だったの？君も知っている人？』

僕は気になって聞く。

『あたしの中学の時の担任・・・』

彼女はボソツと言った。

『え？』

『ああ、いいわ。ここで、掃除しよ』

そう言うと、彼女は階段を下りて倉庫の掃除を始めた。

僕も、彼女と同様にドアからその客を覗こうとしたが、彼女に止められてしまった。

『ほらっ！さっさと、掃除する！』

彼女はテキパキと、床をホウキではき始めた。

なんだかよく分からないけれど、倉庫の外で上杉さんが相手をして
いる客は、彼女にとっても『厄介な客』らしい。

『中学の時の担任の先生って言ったよね？嫌な人だったの？』

それでも気になった僕は聞く。

『うん。すごくね。めっちゃめっちゃ嫌なヤツよ』

彼女は床を掃きながら、語気を強める。

『具体的にどついう風に？』

『・・・とにかく嫌なヤツは、嫌なヤツよ。アイツ、美術教師だったから、たまにウチに来るの。』

見た目キモいし、態度デカイし、最悪なヤツよ。本当に最悪。

でも、高い絵をバンバン買っていくから、お父さんもアレなんだけどね・・・』

アレ？

僕は上杉さんの正装と緊張ぶりを思い出した。

『僕らが隠れないといけないほどに？』

『それは、あなたが万が一にも下手なことと言って、アイツの機嫌損ねたら、困るからじゃない？』

アイツ、細かいことで、すぐに腹を立てるのよ。

例えば、絵にホコリがついているだけとかでね。まあ、一応、ウチも客商売だし・・・』

僕は、僕よりもむしろ彼女の方が下手なことを言いそうだと思った。

でも、それにしても上杉さんの様子は異常じゃないか。

いくら、娘の元担任だったとしても、もてなしすぎだ。

『君は先生に会わなくてもいいの？』

僕は何の気なしに聞いた。

『はあ？冗談でしょ？何で、あたしが！？』

アイツは最嫌なヤツって言ったでしょ！

お父さんにも強く言っているのよ。アイツに会うくらいなら、あたしは、この家を出ていくってね』

彼女が声を荒げたので、僕は外に聞こえるんじゃないかと一瞬恐れ
たけれど、よく考えれば、倉庫は階段を下りたずいぶん低い位置に
あるので、問題はない。

とにかく、彼女はアイツが嫌い。

そのことは十分すぎるほどに、僕に伝わった。

それから、しばらく、僕らは何も話さず、モクモクと倉庫の掃除を
続けた。

28話 厄介なハゲ頭

『もう帰ったかな？』

倉庫の掃除を始めてから30分くらい経ち、ある程度片付くと、僕は暗く湿っぽい倉庫にいることにうんざりして、そう漏らした。

『たぶん、まだ……。アイツが帰ったら、お父さんがここに呼びに来るだろうし……』

彼女はそう言うと、どこか遠い目をした。

僕は、彼女の言葉の節々に何か引つかかるものを感じた。何かを隠しているような、影があるような、そんなニュアンス。

『ねえ、君の先生は何で……』

僕が、彼女に聞こうとしたその時だった。

バーンと大きな音とともに倉庫のドアが勢いよく開けられ、でっぴりと太ったハゲ頭が現れた。

『ここにはないの!!!?』

ざらつく声でそう喚いたハゲ頭は、趣味の悪い紫色のスーツを着ている。

太った体にサイズが合わず、スーツはぴちぴちだ。

『下田先生!!!困りますよ!!!』

僕と文学少女が突然、現れたその男に唾然としてみると、焦った上杉さんがその後から追いかけてきた。

しかし、ハゲ頭はそれをモノともせず、ずかずかと階段を下り、倉庫の中に降りてくる。

『ぬ?おお!上杉茉莉じゃないか!!!』

そしてハゲ頭は、文学少女を見るといなや、大げさにそう言い、近寄り、彼女の小柄な肩をバンバン叩いた。

『どうも久しぶりです・・・』

僕は彼女が一瞬、あからさまに嫌な顔をしたのを見逃さなかった。しかし、それでも、彼女はあくまで礼儀正しく見えるように振舞った。

僕はそれに違和感を感じた。

『ぬっはは!!今はちゃんとやれているのか?』

『・・・ええ』

彼女は引きつつっている。

今はちゃんとやれているのか?

何か引つかかる言い方だ。

『下田先生!ここには、お気に召すようなものはないですよ』

追いかけてきた上杉さんは、慌てている。

『お気に召すかどうかは、私が決める。そうでしょう、上杉さん?』

『まあ、ええ・・・、でも・・・』

『そこの棚の絵はどうか!』

ハゲ頭は、僕がついさっき片づけたばかりの棚から、一枚絵を無理やり引っ張りだす。

『ううん、微妙・・・。あっちのはどうだ・・・』

『ちよっと・・・』

ハゲ頭が倉庫内の絵をあさり始めると、上杉さんはそれを追いかけて制す。

しばらく、それを繰り返した。

どうやら、ハゲ頭は画廊内の絵が全て気にいらなかったようで、倉庫内まで押し掛けてきたようだ。

ハゲ頭が、僕と文学少女が掃除した棚をめちやくちやにしていく間、それを止めようとする上杉さんに対し、僕は何もできず、ただ見ているしか出来なかった。

そして、文学少女も。

なるほど、厄介な客だ。

『お〜!!これはいい!!』

ハゲ頭は一番奥の棚から、一枚の大きな絵を取りだすと、わざとらしく、そう叫んだ。

風景画で、たんぼ畑の絵だ。

それを見た瞬間、上杉さんと文学少女の表情が変わった。

つづく

29話　パンチ

『上杉さん！これ、これ、これ買っよ！！いい！実にいい！！』

興奮するハゲ頭に、上杉さんは真剣な顔で言う。

『すみません、先生。それは売り物じゃないんです』

『いやいや、お金ならいくらでも出すよ！売ってくださいよ！』

『申し訳ないですが、それは本当に無理なんです。出ていった妻の、あの子の母親が残っていた作品なんです・・・』

上杉さんは、そういうとハゲ頭の手から、その手を取り上げようとしました。

しかし、ハゲ頭はそれに抵抗して、絵を背中に回した。

『いやいや、そこをなんとか！倉庫にしまっであっただから、いいでしょう？』

本当に大事なら、普通飾ってここに置いとかないでしょう？』

『違いますよ。ここは湿度、温度の関係で保管状態がいいから置いとくんです』

上杉さんは真剣だ。

しかし、ハゲ頭はまったく絵を返す気がないようだ。それどころか、ハゲ頭は興奮する。

『いいじゃないですか！お金なら、いくらでも出すって言っているでしょうに！売ってくださいよ！！ここは画廊でしょう！？絵は売るためにあるんでしょー！！』

本当になんだらう、こいつは。

僕は目の前で、喚きだした太った中年を心の底から軽蔑した。

教師というのに、あまりにも幼い。

よっぽど、何か言ってるやろうかと思っただけけど、勇気のない僕は口を開くことができなかった。

しかし、僕の隣にいた文学少女は違った。

『無理だっって言っているじゃないですか！！』

彼女は怒っている。

そのことから、その絵が彼女にとって大事であることが僕には分かった。

しかし、ハゲ頭はそれが分からないのか、逆上した。

『黙ってなさい！私は君のお父さんと話しているんだ！君には関係ないだらうが！』

『ですから！その絵はあの子の母親が描いたものでして・・。
あの子にとつても大事な絵なんですよ』

上杉さんも声を強める。

内に怒りを隠していることが伝わってくる。

『ふツは！君は、君を置いて出ていっちゃんうようなお母さんの絵が
大事なのかい？』

ハゲ頭がニヤけながらそう言った次の瞬間、文学少女はハゲ頭をグ
ーで殴っていた。

30話 地下での修羅場

僕はあまりに唐突な出来事に、ただ単純に驚いた。

彼女に突然殴られたハゲ頭は勢いよくふっ飛び、その巨体は後ろにあつた棚に叩きつけられた。

そして、その棚の上からは、無造作に置いてあつた包装用具がバサバサと落ち、倒れたハゲ頭を追撃する。

まるで、香港映画のワンシーンみたいだ。
僕はそのシニールさに事態をつまぐ飲み込めない。

そして、おそらく上杉さんも。

『え・・・あゝ。し、下田先生？』

『うあ”あ”あ”あああああッ！！！！』

上杉さんが恐る恐る呼びかけると、ハゲ頭は発狂して、飛び起きた。頭からは少し血が流れ、目は血走っている。

『このおッ!!ガキがあああ!!!!』

ハゲ頭はこっちに突っ込んでくる。

危ない!

そう思った時には、僕の体は自然に動き、文学少女の前に飛び出していた。

そして、次の瞬間、僕はハゲ頭に殴り飛ばされた。

『ちよつとッ!!!!?』

『マサルくん!?!』

上杉親子はそう叫んだ。

倒れた僕に、文学少女が駆け寄ってくる。

『ちよつと、大丈夫!?!』

とても、頬が痛い。
でも、たぶんそれだけで、問題はない。

僕は体を起こしながら、上杉さんが、ハゲ頭を羽交い締めにしているのを見た。

ヤツはまだ、興奮してフ　フ　言っている。

きつと、上杉さんが手を離れたら、今度こそは文学少女に殴りかかるだろう。

『下・・・田先生！！落ち・・・着いて・・・ください！！！！』

『ふっざけるなッ！！！！俺は客だぞッ！！！！昔の恩も忘れやがってッ！！！！』

『このゴミ女ッ！！！！！！！！！！』

ハゲ頭はジタバタしながら、僕を介抱する文学少女を罵倒する。

『このゴミがッ！！！！ゴミクソッ！！！！！！！！』

『下・田先生・！！落ち・着いて！！！』

罵倒された文学少女は、宥める上杉さんの腕の中で暴れるハゲ頭をキッと睨む。

『誰がゴミよ！！？あなたの方がよっぽどゴミでしょ！！！このクズ教師！！！！』

『ああ”あ”あ”ツ！！？』

『先・生！！茉莉ちゃんも！！！！とにかく・落ち着いて！！！！』

ハゲ頭は、自分を押さえつける上杉さんの腕を振り払おうと必死だ。

『お前も・！その手を・放せツ！！馬鹿親がツ！！誰がコイツを助けてやったと思っっているんだツ！！？』

僕は、必死だった上杉さんの顔が、一瞬曇ったことに気付いた。

しかし、一方の文学少女はその言葉で完全に火が付いたようだ。

『何が「助けた」よッ！！？あんたなんかに助けてもらったことは一度もないわ！！むしろ、逆よ！！このクズ！！！！』

『何だとッ！？人の恩を忘れやがってッ！！！！だから、お前みたいな奴は、苛められてたんだよッ！！！！』

つづく

31話 困惑

文学少女が苛められていた？
僕は耳を疑った。

あんなに気が強い彼女が？

僕が思わず。彼女の顔を見ると、彼女は唇を噛みしめ、その小さな拳を震わせていた。

その姿を目にした僕は、なんだか急に胸が苦しくなり、ハゲ頭を激しく憎悪した。
まったく、どうにかなりそうだった。

『下田先生……、茉莉ちゃんの前でそういうこと言っちゃダメでしように……』

しかし、どうやら、怒りがピークに達したのは僕だけじゃなかったらしい。

上杉さんの声の調子が変わった。
背筋が凍るような、とても冷たい乾いた声だ。

『ああ”あ”！？事実だろッ！！？それに、それを助けてやったの

は、この俺だろッ!？」

『どこがよ・・・?』

ハゲ頭がどや顔でそう言い張ると、文学少女はポツリと呟いた。まだ、その握られた拳は震えている。

『あんななんか事態を悪くしただけじゃない・・・?美幸が苛められたことも、最初から全部知っていたくせに!!!』

美幸?

僕は彼女の話がまったく読めない。僕だけじゃない。

上杉さんも、そしてなぜかハゲ頭も、彼女の言葉をうまく飲み込まず、ポカンとしていた。

『それに、あなたが何もしなければッ!!!あたしだって!!!』

『おい?ちょっとまって!どういう意味だ?』

彼女が肩を震わせてそう言うと、大分落ち着いてきたらしいハゲ頭がそう聞いた。

ハゲ頭は本当に、何も分からず、困惑しているようだった。

もちろん、言うまでもなく僕も困惑している。

ハゲ頭のその態度に、一層腹を立てたのか分からないが、文学少女は急に怒鳴った。

『もう、いい！！！』

そして、彼女は、僕ら三人を置いて、倉庫から走り去っていった。また。

当然、話の途中で突然取り残されたハゲ頭は、彼女に向かって怒鳴り返し、彼女の後を追おうとしたが、上杉さんは手を緩めない。

未だに、羽交い締めになれたままだ。

『マサルくん、茉莉ちゃんのこと頼んだ！』

ワーワー喚くハゲ頭を押さえながら、上杉さんの目は僕にそう合図した。

僕は無言で頷き、急いで彼女の後を追い、倉庫を後にした。

彼女の抱える事情もよく知らない僕が、一体彼女に向かって何を言
ってあげられるのだろうか？

しかし、その時は、そんなことは考えられず、ただ無心で、必死に
なって僕は彼女を追いかけた。

つづく

32話 茉莉の過去

僕が倉庫の外に出ると、画廊を出ていく文学少女の後ろ姿が見えた。

『まっつて!!キミ!!』

僕が叫んでも、聞こえていないのか、無視しているのか分からないが、彼女はそのまま走り去る。

そして、当然僕はそれを追いかける。

『まっつて!!キミ!!おーい!!キミ!!』

しかし、彼女は応じない。

それどころか、一層スピードを上げる。

とても早い。

普段から、まったく運動していない僕にはとても追いつけない。小さい体なのに、どこにそんな力が隠れているだ。

『まっつて!!キミ!!おーい!!キミ!!』

いくら呼んでも彼女は一向にスピードを緩めない。そして、そのまま、角の通りを超え、駅前通りを抜ける。

『まっつって!!キミっつてば!!!!』

もう限界だ。これ以上、僕は走れない。

この前の公園にまで来て、そう思った僕が最後の力でそう叫ぶと、突然、彼女は逃げるを止めた。

『ハア・・・ハア・・・あんた、しつこい・・・。それにキミっつて・・・ハア・・・、その呼び方、かなりキモい・・・』

『ハア・・・ハア・・・、ごめん』

『あたしには、ちゃんと茉莉っつて名前があんの!マ、リ!!』

『ごめん・・・、茉莉・・・、ちゃん』

僕は上杉さんが呼んでいるように、彼女をそう呼んだ。

『ちゃん付けは、お父さんみたいでもっとキモい!呼び捨てでいい!』

『了解、茉莉・・・さ』

僕はなんとなく居心地が悪くなって、さんを付けようしたら、彼女の三白眼に睨まれた。彼女には、なかなかの眼力がある。

『あの・・・えつとさ、大丈夫？』

僕はハゲ頭のことを思い出し、何て言ったらいいのかわからず、そう聞いた。

『え？ああ、走ってたら忘れちゃったてた』

彼女はそう言っただけで笑った。

僕はその笑顔になぜかドキツとした。

『あなたも聞いたと思うけど、あたし、中学の時に、その・・・苛められたの・・・』

彼女は公園のベンチに腰掛けると、話し始めた。きつと、誰かに吐きだしたかったんだろう。

『始めはね、あたしじゃなくて別の子が苛められていたの。』

その子は、その、あんまり自分のことを主張できる子じゃなくてね。

みんなから、馬鹿にされていたの。

でもね、あたしは別にその子に対して、何も悪いことはしてないの

よ。

そもそもあたしは、クラスに関わりを持ちたくない人間だったから。
でも、ある日、あまりにもその子に対してみんなが酷かったからね、
あたし言ったの。

「もう、その子を構わないで」って、「ほつといてあげて」って。

そしたら、それ以来、その子はいじめられなくなっただわ。
標的が変わったのよ。正義のヒーローの、あたしにね」

彼女は公園のテニスコートでテニスをしている大学生たちを見つめながら、続けた。

『結局、あの人は誰でもよかったのよ。』

退屈な日常にスパイスを加えられるなら、誰でもね。
でも、最初はまだ良かったの。ただ単に、嫌われて、悪口を言われ
ているうちはね。

辛くなったのは、あのハゲ教師が注意してからの…』

『注意？』

あのハゲ頭が？

僕は不思議に思った。

『そつよ、注意。』

あたしにとっては大迷惑だったんだけど、ある日、正義感の強い学級委員の子がね、あいつに言ったのよ。

「上杉さんが苛められています」「ってね。

あたしは教師に言うなんてそんなこと、これっぽちも求めてなかったのに。

そしたら、あのハゲ教師は、それをまた全校集会で言ったのよ。

今でも忘れないわ。

「私のクラスの上杉さんが苛めに会っています。みなさんも苛めはやめましょう」「』

あのハゲ頭ならいいそうさ。

僕は心の底から、彼女に同情した。

『それ以来、あたしに対しての苛めは、だんだん陰湿に酷くなっていったわ。

チクったって言われてね。例えば、上履きを隠されたり、ノートを破かれたり・・・。

そういうの、あなた分かる？』

僕は何も言えず、ただ頷いた。

そして、僕は、僕の中学時代に苛められていた女の子のことを思い出した。

確か、その子も、ひどい苛めにあっていた。
その子はそのうち、学校に来なくなってしまった。

『君は、それでどうしたの？』僕は聞いた。

『どうした？別にどうもしていないわ。
ただひたすら、卒業するまで耐えたわよ。』

別にどうしようもないわ。
やられたことはやり返そうともしたけど、そう言うのって結局、馬鹿らしいじゃない。

自分もアイツらと同等の人間になってしまつのも嫌だったし・・・』

『あのハゲ頭はそれに気付かなかったの？その、君の苛めがまだ続いていることに？』

『気付くわけないわ。一応、表向きの苛めはなくなったんだから。
苛めることに飢えているアイツらはね、馬鹿な教師なんかより、よっぽど頭が切れるし、うんと狡猾だわ。
きつと、あのハゲ教師はこれからもずっと、あたしのことを自分が救ったって思い続けるんだわ。』

アイツが余計なことしなければ、あたしはもっと楽だったのに・・・

『

彼女はずっと、テニスをする大学生たちをぼんやり眺めている。

『じゃあ、なんで上杉さんはあんな奴に？』

『どうしてお父さんがアイツに媚びるかって？』

僕は頷いた。

『あなたは親に言える？』

「わたしは苛められていました。先生が注意してから、もっと酷く苛められて、あなたに買ったもらった上履きをゴミ箱に捨てられて、登校するたびに毎日机をひっくり返されていました」って。

言えるわけがないじゃない。

お父さんはね、アイツが言うことをそのまま信じて、アイツにヘイコラしているのよ。

本当のことなんか何も知らないでね！

あたしがアイツを嫌いなのも、あたしが中学の時のことを思い出すから程度にしか思っていないのよ！..!』

彼女がそう言いきってしまうと、僕はまた何も言うことができなくなってしまうた。

彼女に何を言ったらいいか分からない。

僕はあまりに無力だった。

232

33話 雨降って地固まると言っちゃっ

それから、僕と文学少女は他愛のない話をして日が沈むまで時間をつぶしてから、やわらか画廊に帰った。

その話の中で、彼女の唯一の苛めの現実逃避手段が読書であったことが分かった。

だから、以前、僕がそのことについて触れたら怒ったらしい。

そして、彼女は、本の中にある物語世界の素晴らしさについても楽しそうに語り、日が沈むころには、もうほとんど元気を取り戻していた。

そのことで僕はひとまず安心した。

これで、上杉さんに頼まれた手前、胸を張って帰れる。

そうして画廊に着くと、さすがにハゲ頭はもう居なくなっていた。どうやら、帰ったらしい。

口にはしなかったが、僕はとても安堵した。

『ああく。二人ともお帰り〜!!』

『どつも・・・』

もう普段通りのよれよれの変な格好に着替え直した上杉さんは、気味が悪いくらいいつも通りだった。

まるで、厄介な客が来たことが嘘だったみたいだ。

『ただいま』

一方の文学少女は上杉さんにそっけなく、そう言つと、さつさと画廊を抜け、彼女らの居住区へ繋がるドアを開け、行ってしまった。

彼女も彼女で、そのことには何も触れず、なかったことにしようとしているのだ。

彼女らしいなと僕が思っていると、彼女は何を思ったかもう一度、ドアから顔を出し、僕に向かって、『ありがとう』とそっけなく礼を言つて、また閉めた。

僕はなぜかとても照れた。
これがツンデレってやつか。

そんなことを思いながら、僕は何気なく上杉さんのことを見ると、上杉さんは気持ち悪いほどニヤニヤしていた。

『マサルくん、茉莉ちゃんを頼んだよ！あの子はああ見えて繊細なんだ！』

上杉さんは僕の肩に手を置くと、仰々しくそう言った。彼の言動は冗談なんだか、本気なんだかよく分からない。

『で、アイツは帰ったんですか？』僕は半ば無視して聞いた。

『うん。あの後、すぐに帰ったよ』

上杉さんはいつもの調子で笑いながらそう言った。彼は本当によく分からない。

僕はさつき文学少女から聞かされた苛めの真相を、彼に話そうか迷った。

もし、またあのハゲ頭がここに来ることは避けなければならない。

『それで、どうしたんですか？』

『どっつて？どう帰したかってこと？』

うん。僕のおきのおきの作品をタダであげて、無理やり帰ってもらったよ』

『とおきのおきの作品？』僕は聞いた。

『うん。僕のおきのおき。大満足な作品だよ』

そう言つと、上杉さんはその大きな握りこぶしを自慢げに見せた。とつておき…。

『まあ、とにかく、彼はもう二度と来ないだろうね』

それを聞いて、僕は安心した。

たぶん、文学少女はもうアイツに会うこともないだろう。

そして、僕も。

そう思つと、僕はアイツに殴られたことを思い出し、頬に痛みを感じるような気がした。

『そう言えば、マサルくん、君意外と勇氣あるねえ。

感心しちゃったよ。茉莉ちゃんを庇つて、代わりに殴られるなんてさ。』

よく、わが娘を逃げずに守ってくれた！』

僕が頬を押さえたのを見て、上杉さんはそう言った。

僕は褒められて狼狽した。

『いや、別に僕なんか……。普段は逃げてばかりですよ。』

『ん？なんか引つかかる言い方だなあ？逃げてばかり？』

上杉さんは聞いてくる。

文学少女の過去を聞いたからか、僕もなんだか、僕の人生の全てを

白状したくなってきた。

『今だから言いますけど、実は前の仕事を辞めたのも逃げ出したよ
うなもんなんです。』

僕は今まで、嫌なことや、面倒くさいことからは全て逃げてばっか
りなんですよ……。
そういう人間なんです』

『ふ〜ん、なるほど』上杉さんは軽い感じでそう言い、続けた。

『まあ、人生については、よく分からないことが多いよねえ。
僕も仕事を辞めた時、周りの人から逃げたみたいに言われたけどさ
〜、でも人生を真剣に考えたらさ、どっちが逃げなのか分からない
よねえ。』

上手く言えないけど、裏を返せば、楽なことや、楽しいことから逃
げているってことでもあるしね〜』

『楽しいことから逃げる？』僕は思わず聞き返した。

『そ。でも、まあ、とにかくマサルくんはよくやってくれたよ！
それにもし、マサルくんが前の仕事を止めないで、ここにいなかったら、今頃、茉莉ちゃん殴られて、お嫁にいけない顔になっていた
かもしれないもん。』

はははは〜、よかったよかった〜。

今日も平和だ！！じゃあ、マサルくん。あと、よろしく！！

用があるんだよ〜』

そう言うと、上杉さんは、フラッと出て行ってしまった。きつと、いつも通り、駅前のブックオフに立ち読みしに行くのだから。

まったく、あの人は……。

僕は呆れながらも、今日一日でなんだか上杉さんのことが少し分かった気がした。

それと、文学少女・茉莉のことも。

これが俗に言う、雨降って地固まると言っちゃつか。僕はそんなことを思いながら、画廊の掃除を始めた。

こうして、僕にとっての初めてのお客さんが来た日は無事終わったのだ。

雨と言うよりも、嵐だったが…。

第二章〜完〜

*次から第三章に入ります。

【34】登場人物紹介】

【登場人物紹介】

ここでは大分、話数が増えてきたので第3章に入る前に、おさらいを含め、主要登場人物について改めて紹介します。一方的に！（果たして需要があるのだろうか？）

主人公・・・（僕、影山マサル）

美大時代の先輩、秋山に頼まれて、福猫町にやってくる。

しかし、ひよんなことから、この町の画廊で働くことに。元大手CM制作会社勤務。気が弱い。

秋山静香

主人公の美大時代の先輩で元福猫町の住人。超美人だがかなりの腹黒。現在、絵画レンタル会社勤務。主人公に謎のイルカの絵の作者搜索を依頼する。

上杉さん

やわらか画廊のオーナー。元有名建築家。いつも浴衣の自由人だが、怒るとこわい。漫画と絵画をこよなく愛する。妻に逃げられた？

上杉茉莉（文学少女）

上杉さんの一人娘で読者好き。気が強く、無愛想だが、昔苛めにあった経験もあ
り繊細な部分もある。喫茶店『楓』でアルバイトしている大学生2
年生。

マスターノリスケ

喫茶店『楓』の無口なオーナー。上杉さんの同級生。料理はいまいちだが、心はやさしい？

老夫婦（ジロウ&キミ）

僕のアパート『グリーンハイツ』の管理人。二人とも品がよく、やさしい。かなりのお金持ち。喫茶店『楓』の常連客。

フナムシ（舟木）

僕のアパートの隣人。引きこもりの大学生。アニメソングを大音量でかける、深夜に発狂するなど奇行が目立つ。しかし、老夫婦によると引きこもる前は良い子だったらしい。。。

ミーシャ（チエ）

僕のアパートの隣人。編みこみヘアーのかなりのパンクな女性。しかし意外に姉御肌の良い人かもしれない？夜な夜なアパートから出ていく。

秋山先輩の彼氏

スナフキンのような旅人。主人公の美大時代の先輩でもある。

猫

とにかく、この街にたくさんいる。

ということ、自分的是現在部分で物語がようやく立ちあがり、ここからが本番という感じ。です。

どうぞよろしくおねがします！！

35話 疑問がゴロゴロ

第三章

福猫町にも冬がやってきた。

次の仕事が見つかるまでと決めていた画廊の仕事も、もう始めてからひと月半が経ち、それは僕の日常として完全に定着してしまった。

もちろん、仕事だけじゃなく、この町の風景もだ。

僕が抱いた新鮮味は、まるで木の葉のように落ち、どこかに消えてしまった。

今日も、町のそこら中で猫がゴロゴロしているし、やわらか画廊にはここを美術館と勘違いしている住人たちが代わる代わるやってきて何も買わずにそのまま帰る。

それに対し、店主の上杉さんは『まいったね』と苦笑いしつつも、それをのんびりと受け入れていた。

一方、その娘の茉莉は、僕らに『もっとちゃんと働け』と激を飛ばす。

でも、しょうがない。

客がこない。それはしょうがない。

一方、秋山先輩に頼まれたイルカの絵の作者探しも一向に捗らず、ある夜、とうとう痺れを切らしたのか先輩から電話がかかってきた。

正直に言えば、僕は半ば、そのことを忘れていた。

なぜなら、本当に作者を探し出せるわけがないと、どこか諦めていたからだ。

しかし、秋山先輩は違った。

『マサルくん、例の絵のことなんだけども、何か分かった？』

『えっと、申し訳ないですけど……、全然です。』

僕がそう告げる、秋山先輩はため息をついた。

そのことから、僕は、自分が彼女から期待されていたことを知る。

『一応、上杉さんにもう一度、本当に作者不明なのか聞いたんですけど……』

『うんうん、それで』

『ダメでした……』

『え〜。もつとちゃんと聞いてよ〜』

先輩は静かに苛立っている。

聞いても知らないと言っている上杉さんに何度聞いても仕方がないだろうに。

僕も密かに、本当に密かに苛立つ。

『あのイルカの絵は、もともと先輩の家にあつて、先輩が売ったんですよね？』

『うん、そうよ』

『どづいう形で？』

『どづいう形でつて・・・、普通に家の物置で見つけて、その・・・、お金になりそうだなって思ったから、普通におじさんの所で売ったのよ』

244

『先輩の独断で？』

僕は上杉さんから聞いた先輩が母子家庭で育つたことを思い出し、そのことに直接触れないように気をつけながら質問する。

『うん、そう。独断。あたしの独断で売ったのよ』

『その絵について、家族の人は何も知らなかったんですか？家の物置にあつたのに？』

僕は先輩のどこか煮え切らない態度に、ムツとして今度は直接的に聞いた。

『え？うん、そう。誰に聞いても知らないから、こうしてマサルくん調べてもらっているんじゃない』

先輩はそう言つと、急に用事を思い出したとかなんとか言って、強引に電話を切った。

変だ。

僕は彼女の声がしなくなった電話の世界で突然、取り残され、妙に悲しくなった。

先輩は僕に何かを隠している気がする。

そんな疑惑から、僕は自分が先輩から信用されていないような、騙されているような、そんな焦燥感に囚われた。

先輩は、一体、何のためにこんなにも必死になってイルカの絵の作者を探しているのだろうか？

先輩の家族は本当にイルカの絵について何も知らないのだろうか？

そんな風に、たくさん疑問を頭の中でゴロゴロ転がしながら、僕は
その日、眠りに就いた。

つづく

36話 真夜中の大パーティー

『うわぁあああああああー!!』

突然の絶叫に、僕は飛び起きた。

何だ？最初、僕はわけがわからなかった。

とりあえず、部屋の電気を付ける。そのまぶしさにすぐには目を開けない。

僕は目を細めながら、自分の部屋を見渡す。しかし、どうやら誰もいない。

夢だったのだろうか？

僕が不審がつっていると、急にドゥーンという地響きのようなベース音が部屋を揺らした。

そして、間の抜けた大ボリュームのアニメ声と軽快なギターサウンド。

僕はようやく、気付いた。

下の部屋の引きこもり、舟木こと、フナムシの仕業だ。

何てヤツだ。

僕は、フナムシとは、引つ越しの挨拶以来まったく接点がなかった。なにせ、相手は引きこもりなのだ。接点を持てる方がおかしい。

しかし、それにしても、ここで暮らし始めてからおおよそひと月ちよつと、今まで、こんなにも近所迷惑な真夜中の大パーティーが開催されることはなかった。

僕は、ヤツの頭がいかれていることを、改めて思いしらされた。

どうする？ 注意にしにいくか？

僕は迷った。

相手は、こんな音楽を真夜中に爆音で流す、ゴキゲンなファンキー野郎だ。

パーティーの邪魔をしたら、何をされるか分かったもんじゃない。

どうするか？

僕は思考をめぐらす。そして、その間もアニメソングは僕の部屋を揺らす。

決めた。寝てしまおう。

僕は両耳で耳をふさいで、布団に籠る。うん、そんな悪くない。これなら、地響きと揺れだけで、音はまあ、凌げなくはない。

しかし、そう思った矢先、曲が変わった。

ドゥンインドゥンイン！！

ドゥンインドゥンイン！！

ありえなかった。今度はR&B調のアニメソングだ。

ローの聞いたバスドラムが立て続けに8ビートを刻み、それに大音量のベースが絡む絡む。

さすがの僕も、このドラムベースの地響きに発狂しそうになった。

堪忍袋の緒が切れた僕はジャンパーを着てから部屋を飛び出し、階段を駆け降りた。その間、ヤツの部屋に近づくにつれ、アニメソングはだんだん大きくなる。

このオタク野郎！いい加減にしろ！

そして、僕がフナムシの部屋のドアを力いっぱい叩こうとしたその瞬間……

『やめな！』

その大声に、僕が振り返ると、コンビニ袋をぶら下げたミーシャが立っていた。

じじく

37話〜ミーシャの性格〜

彼女はなぜだか知らないが、夜な夜な部屋から出ているようだった。

そして、この日も出ていたらしい。

コンビニにでも、行っていたのだろうか？

彼女は、上下スウェットという格好に、ダウンジャケットを羽織っていた。

しかし、髪型はいつも通り、編みこみヘアで、歌手のミーシャそのものだった。

『君さー、今づk h s d d c s d k l でしょ!?!?』

『はい!?!?』

フナムシの部屋から流れる爆音のせいで、彼女が何を言っているのかよく聞こえない。

『だーから、l w d j f d h v d s c n d!?!?』

やはり、何を言っているのか分からない。

僕がもう一度、ジャスチャ で聞き返すと、彼女はめんどくそそつな顔で『こつちにこい』と僕を手招きした。

そして結局、僕は手招きされるがまま、アパートから大分離れた空き地にまで連れてこられた。

それほどまでに、フナムシのかけるアニメソングは大音量で鳴り響いていたのだ。

アパートの近隣の住人が、苦情を言いに来るのも時間の問題だろう。僕は却って、自分一人だけが苦しめられる中途半端な音量じゃないことに、ほっとした。

『ここなら、聞こえるしょ？』

『ええ、もちろん』

ミーシャの問いに僕は答える。

彼女はいつも軽率な、というより好戦的なもの言いをする。とは言え、挨拶程度の仲だったが・・・。

『さっき、フナムシに文句言おうとしたでしょ？前に、アイツに構うなって言ったの覚えてなかった？』

僕は考える。そんなこと言われたらどうするか。

そもそも、できれば僕も、あんな奴に構いたくはない。

むしろ、アイツが周りに構って欲しいんじゃないだろうか。

『まあ、どうでもいいけどさ、アイツに文句言つと、後からが面倒だよ。放っておくのが一番。明日、シロウさんに言えばなんとかし

てくれるだろうしさあ』

『面倒って、どういう意味です?』

僕は色々おそろしい想像をする。

『前にさ、あいつの隣の部屋に男の子が住んでいたのね。そんであいつが、まあ、今日みたいに始まっちゃったから、たぶん文句言いにいったんだろうね。そしたらその子、ゴキとかで仕返しされて、すぐ引越しちゃったわけだよ』

『ゴキ?』

『うん、ゴキのブリ子ちゃん。フナムシは期待を裏切らず怖ろしく陰湿だよ』

僕は部屋の中に大量のゴキブリを放流されるのを想像してゾツとした。
絶対に嫌だ。

『とにかく、明日、アタシ仕事休みだし、ジロウさんに言うておくよ。なんか知らないけど、アイツ、ジロウさんとキミ子さんの言うことだけは聞くんだよ。部屋追い出されちゃ、まずいからかね。まったくアイツも最初は普通だったんだけどねえ』

そう言うと、彼女はダウンジャケットから、マルボロを取り出し吸い始めた。

僕も勧められたが断った。

僕はタバコは吸わない主義だ。

体に悪いことはしない。かっこいいとも思わない。

そう思い、ずっと吸ってこなかった。

しかし、星を見上げながら、白い煙を吐き出すミーシャは、まるで
広告モデルのように決まっていた。もちろん、スウェット姿ではあ
ったが・・・。

『君さー、何でこの町に猫がたくさんいるか考えたことある?』

『はい?』

彼女は突然切り出した。

猫?

僕はそう言われて、初めて考えてみる。

『きっと、住み心地がいいんじゃないですか? 福猫町っていうくら
いだし』

ミーシャは僕の適当な答えを鼻で笑い、続ける。

『君、インテリみたいな顔してんのに意外と馬鹿だねー。町の名前
は後付けに決まってるしょ? 猫が多いから、福猫町。そんな感じ。
アタシが聞いているのは、そもそもなんで、福猫町って名前が付けら
れるくらい、この町に猫がたくさん集まってくるか? そういうこと

だよ』

『さあ……。何ですか？』

僕はお手上げた。

『アタシの推測だと、きっと、ここには猫が好む何かがあるんだよ！猫の財宝みたいなお宝が！！！』

『……………』

『……………』

僕らはしばらく沈黙した。後に聞いた話によると、彼女なりの冗談だったらしい。

そのパンクな出で立ちからは想像もつかないが、ミーシャは意外とひょうきん者だったのだ。

UJU

38話〜パーティの翌日〜

僕はいつも最低6時間は寝ないと調子が出ない。

子供のころ親が厳しかったこともあり、夜ふかしをする習慣がなかったから、大人になった今でも、大体早く寝てしまっし、朝もダラダラといつまでも寝ていることができない。

だから翌日の仕事で、僕はアクビばかりしていた。

『ねえ、そんなアクビばかりしていると、すごくマヌケなんだけど』

『マヌケって何だよ、ふあー』

僕はまたアクビをしながら、茉莉に言い返した。

その日は、彼女が大学の授業を取っていない日だったこともあり、僕らは二人でダラダラ話しながら、来る予定のない客を待っていた。

『さっきから、何でそんなにアクビするのよ？寝てないの？』

『うん。昨日、アパートでアニソンパーティがあったんだ』

『はあ？』

僕は、僕の回答にイラついた彼女に、昨日あったことを話した。
フナムシによる絶叫とアニメソング祭り。

結局、昨日はミーシャと話したあと、僕は轟音アパートには戻らず、近所の24時間営業のファミレスで朝まで時間をつぶした。ミーシヤはどうしたのかは分からない。彼女はあの後、ふらふら闇に消えて行ってしまったのだ。

『あのアパートにそんなヤツがいたんだ、すごい!』

茉莉は奇天烈なフナムシの話に声を出して笑った。

まったく、他人事だと思つて。

そう思いつつも、僕は話に尾ひれをつけて、フナムシの奇妙な行動を面白おかしく、彼女に話して聞かせた。

そして、それはクールな彼女にはめずらしく、大ウケした。

『あたしも一度、その人見てこようかな』

彼女が笑いながら、そう言うのを聞いて、僕は突然、老夫婦から聞いた話を思いだした。

フナムシも確か、茉莉と同じ、ここからすぐ近くにある大学の学生だったはずだ。

僕は思わず、彼女に舟木と言う学生を知らないかと聞いた。

『さあ。そんな人の話、聞いたことないけど。きっと学部とかが、違うんじゃない？』

もし、アナタの言う通りの人だったら、まちがいなく有名になるはずだろうし。

あたしの学部はあんまり人数多くないから』

『へー、なるほどなるほど。で、君は何学部の学生さんなの？』

『あたしはフランス文学・・・うわッ！！』

何気なく、僕らの会話に加わってきたその男の存在に彼女は驚いた。当然、僕だって驚いた。

驚かないわけがない。

彼はいつだって、どこからともなく突然ふらりと現れるのだ。

秋山先輩の昔からの彼氏であり、僕の先輩でもある大川ヒノキは・・・。

260

39話　ホームレス・ヒノキさん

僕の通っていた美大には、それはたくさん学科があった。その数ある学科の中で、僕と秋山先輩は油彩科、つまり文字通り、油絵を中心として学ぶ科に属していた。

僕が油彩科を選考した理由は特にない。

もともと、絵が好きだし得意だったことはあるが、画家になるつもり、というより、なれるつもりなんてまるでなかった。

僕は単純に、油絵を描いていたから、そうしただけだ。

つまり、僕は美大という空間に属することができるのであれば、学ぶ内容なんて何だってよかったのだ。

勉強をせず、自由に絵が描ける。

高校卒業まで、ひたすら勉強漬けの日々を送ってきた僕にとっては、そのことが、何よりも大事なことだった。

当然、親からは将来のことを含め、猛反対された。

『今まで積み重ねてきた勉強が無駄になるじゃないか』と。しかし、その時の僕はとにかく勉強から離れることしか頭になかった。

そして実際、美大には、そういう学生はたくさんいた。かく言うヒノキさんも、そういう内の一人だった。

『俺は自分の存在意義を、ここで見つけるんだよ』

彼はよく、そんなことを口にした。

『芸術すなわち、自己の発見と投影』それが、彼の芸術論だった。

しかし、彼は、僕や秋山先輩と違い、絵がからきしダメだった。ロクに丸の図形を描くことすらままならないほどだ。

だから、彼は写真科に所属し、かなり熱心にカメラによる『自己の投影』を試みていたらしい。

・・・大学3年生の夏までは。

秋山先輩から聞いた話によると、周りの学生たちが就職活動を始め出すと、彼はなぜか開き直り、もともとの趣味だったギターで食べ歩いていくと宣言し、ブルース一人旅を決行することにしたそうだ。

そして、その旅に味を占めて以来、彼はロクに大学には通わず、ギターとカメラ片手にフラフラ浮浪し、たまに帰って来ては、『住む場所がない』と言い張り、恋人の秋山先輩のアパートの部屋、つまり当時僕が住んでいた隣の部屋に出入りした。

そのことが、きっかけで僕と、ヒノキさんは顔見知りになった。

僕は、彼の適当な学生生活に呆れ、心配しながらも、本当は心の中で憧れていた。

彼こそが、僕の目指した自由な美大生、そのものだったのだ。

しかし、秋山先輩に聞いた話によると、彼は今でも、その延長線上の暮らしをしているらしかった。

そして、実際その通りであることが今、彼を目の前にして分かった。

『やけに楽しそうだな！マサル！』

まさにバックパッカーというゆるい身なりをし、首から一眼レフカメラを下げ、肩にはどデカイリュックサック、手にはポロポロのギターケースを抱え、ホームレスのように髪も髭もモジャモジャのヒノキさんは、驚く茉莉と僕を交互に見て、ニヤけながらそう言った。

彼が笑うと、彼曰く最初の旅でインド人に殴られ欠けたらしい前歯が剥き出しになった。

それを見た茉莉は、おそらく絶句したことだろう。

『何で、ここに?』

僕は気が動転した。

本当になぜ彼がこのやわらか画廊に来たのだろう。

僕がそう聞くと、彼はニヤけながら答えた。

『もちろん、オメエに会うためだよ! 静香に聞いたよ。この画廊、
すげーいいじゃん! 超クール! で、その子は?』

ヒノキさんはもう一度、茉莉をなめるようにして見た。

『あ、あたしはこの画廊に住んで、います・・・』

『へー、すげー! 超いいじゃん!』

『いや、別に・・・』

『いや、マジですげえよ。俺もこんなところ住みてえ。ところで、キ
ミ、名前は何?』

『ま、茉莉です・・・』

『へー。茉莉・・・、マリ・・・、マリ。マリは、なんかリスみたいでかわいいね』

『え？あ、ありがとうございます・・・』

いきなり現れた長身のホームレスにどもる茉莉に対し、そのホームレスはもう次の瞬間には画廊のガラス張りの天井を見上げ、バシヤバシヤ写真を撮っていた。

『すっげー』

さすがの茉莉も、この人には勝てまい。僕は密かにそう思った。

つづく

40話 紹介

『で、何の用あつて僕に会いに来たんですか？はるはる、僕の顔を見るためだけに来たわけじゃないですよ？』

僕がそう聞くと、ヒノキさんは天井に向けていたカメラをそのまま僕に向けた。

『俺、家ナイ。』

静香、家スマセテクレナイ。

俺、コマツタ……。

マサル、オマエノ家、俺スム！』

『イヤダ！』

僕は即答する。

こんな臭い人間と一緒にの部屋で寝るなんて、考えただけでもゾっとする。

僕は、どんなに親しくとも他人とは住めない。

『え〜いいじゃん！俺もアパート見つかったらすぐ出て行くからさあ！な？』

『嫌ですよ！今すぐ、アパート決めてきて、住めるまで漫画喫茶とかで寝泊まりすればいいじゃないですか！』

『だから、俺はそんなすぐ家を借りれる金がないの！とりあえず、ここに来るのに電車いくらかかると思ってたんだよ？』

『知るか！自分で来たんでしょ！』

まったく、何て人だ。

ヒノキさんは頭がおかしいんじゃないんだろうか。

僕は改めて、彼の計画のなさに驚く。

『チツ！サイテーだな、お前。じゃあ、いいよ！マりに頼むから！』

『えっ？』

突然、話を振られて茉莉はギョツとする。

彼女は明らかに、ヒノキさんを怖がっている。

『マリ、こここの画廊に俺を泊めてください！』

『い、いやです』

茉莉も即答する。当たり前だ。

『後生ですから!』

ヒノキさんはしつこい。

その場で土下座して、茉莉を困らせる。

『ヒノキさん、ここでは無理ですよ。他を当たっ……』

彼に帰れと言おうとした瞬間、僕は閃いた。

住む場所ならあるじゃないか。

それも最高の場所だ。たぶん、お金はそんなにかからない。
僕は思わず、にやけてしまう。

『なんだよ、マサル?突然、黙りこくって』

『ヒノキさん、いい所を紹介してあげますよ!』僕はとびっきりの
笑顔で言う。

『ホントか!?』彼もとびっきりの笑顔で答える。

『ええ、本当ですよ！えっと、そうだな。とりあえず、僕がお昼休みになるまで、その向かいの喫茶店で待っていて下さい』

僕は画廊の外から見える『楓』を指さして言う。
ヒノキさんは窓の外を覗き込む。

『ああ、あそこね、オツケー。待ってれば、後でいい所紹介してくれんだな？』

『そうです。あそこで待ってれば、全てオツケーです』

僕は頷く。

こういうときのヒノキさんはやたら物わかりがいい。と言うか、ただ単純なだけかもしれない。

『よし！じゃあ、後で会おうな！』

仕事中に邪魔したな！マリもまた会おうな！』

『ええ・・・』

茉莉は顔を引きつらせながら、ヒノキさんのバイバイに答える。
もう二度と会いたくないという顔だ。

しかし、そんなことには気付かない様子で、ヒノキさんは意気揚々と画廊を後にした。

僕が、彼に紹介するのが、フナムシの隣の開かずの部屋であることも知らずに……。

つづく

41話 つままれた鼻

『何！？あいつ！！』

ヒノキさんの姿が完全に見えなくなると、僕の想像した通り、茉莉は憤慨した。

彼女は自分以上に、上から目線のヒノキさんとは、相性が最悪だったようだ。

『一応、僕の美大時代の先輩だよ。一応だけどね』

僕は、ヒノキさんがここに来たことに自分も迷惑しているんだぞというニュアンスを込めて彼女に説明する。

実際、僕は迷惑していた。

別に、彼のが嫌いなわけではないし、むしろ僕と正反対のその生き方を尊敬していたのは事実であるが、だからと言って特別慕っていたわけでもない。

彼は、遠くから見ている分にはいいが、身近にいと困る人間なのだ。

『あなたの周りって、本当に変な人ばかりね。今時、ホームレスなんて！まだ、匂うわよ！』

茉莉はそう言うと鼻をつまんだ。

確かに、まだヒノキさんの体臭がそこら辺に漂っていた。

おそらく、何日もシャワーを浴びていないのだろう。

僕も鼻をつまみながら言う。

『彼は旅人なんだよ。日本でお金を貯めて、海外へ行って帰ってきてを繰り返しているんだ』

秋山先輩の話によると、彼はもう東南アジアの国を10ヶ国以上は制覇したらしい。

『だからって、こんな臭うなんて！』

『まったく同感だよ』

『で、どうするのよ？楓に行かせて。まさか、ジロウさん達に合わせる気じゃないでしょうね？』

茉莉は鼻をつまんだまま変な声言う。

『そのまさかだよ』

僕も鼻をつまんだまま変な声で続ける。

『いいかい？』

あのアパートは今、一部屋しか空いてないんだ。

さっき話したフナムシの隣の部屋だけ。あそこはまずマトモな人間は住めない。

フナムシがうるさいし、ヤツがゴミを捨てないで貯めているから匂うんだ。

もちろん、ジロウさん達もそのことを知っている。

だから、僕は割とマシな二階の部屋になったんだ。それも格安でね。だったら、フナムシの隣の部屋はどれだけ安くなるんだって話だよ』

『でも、それはそのフナムシに耐えることができればの話でしょ？』

『この匂いで分かるだろう？ヒノキさんはマトモじゃないんだよ。

それに、フナムシに耐えることができなければ、それはそれで面白いよ。

ヒノキさんなら、フナムシを殴り飛ばすかもしれないし・・・』

『毒をもって毒を制すってことね』

『そのとおり!』

僕がそう頷くと、ちょうど画廊の扉が開き、上杉さんが帰ってきた。

たぶん、またブックオフに立ち読みにしに行っていたのだろう。

『ただいま～。あれ～?誰か、おならした～?』

僕と茉莉は、鼻をつまみながら、首を振った。

つづく

42話 アジフライ

僕が上杉さんにお昼休みを言い渡され、ヒノキさんの待っている喫茶店『楓』に行くと、奇妙な光景がそこにあった。

本来、喫茶店のマスター、ノリスケがいるべきカウンターの中に、そのマスター・ノリスケの姿はなく、代わりに、楓のロゴが入ったエプロンをし、腕まくりをしたヒノキさんがいた。

なぜか彼は、カウンターの奥で魚をさばっていたのだ。

『おう！マサル！終わったか！？』

『終わってというか・・・え！？どういう状況ですか？』

僕が困惑し、そう聞くと、その声に気付いたのか、奥の部屋から、また別の魚をもったマスター・ノリスケがぬつと顔を出した。

『おう、お前か・・・こいつが、俺の料理をまずいって言うからよ
お・・・』

『俺が教えてやってんだよ！』

ヒノキさんはそう口をはさむと、にいと笑った。

彼は、なんだかともうれしそうだ。

『こんにちわ。マサルくん。彼、お友達なんですか？』

僕が、その声の方向を振り向くと、いつも場所にいつもみたいに、ジロウさんとキミ子さんが座っていた。

相変わらず、二人とも上品な服を着て、ニコニコしている。

『いやだなく、こいつはただの後輩ですよ！後輩！なあ？』

『ええ、まあ・・・』

まったく、この人は。

もう、この店に馴染んでいるのか。

よく人見知りする僕は、ヒノキさんのその人懐っこい所、あるいは大胆不敵な所が羨ましくなった。

僕もこのくらい積極的に行動力があればなあ。

学生時代、何回、そんなことを考えただろう。

『そう言えば、マサル。俺も、同じアパートに世話になることになったから』

『え？』僕は思わず聞き返す。

『いや、だから、キミ子さんとジロウさんのアパートだよ。紹介してくれるって、そのことだろ?』

『……、……はい?』

僕は耳を疑った。

確かにヒノキさんにグリーンハイツを紹介しようと思っていたのだが、そんな簡単に?

僕が来る前に、もう全て決まっちゃったのだろうか。

『ヒノキくんはお金がなかったらしいから、ラッキーだよ』

ジロウさんがニコニコしながら、頷いた。

ラッキーって、どういうことだ。

キミ子さんは、困惑する僕に説明する。

『私は、一階の……、その舟木君の隣の部屋しか開いてないからって言ったんだけど……、本人が構わないって言うから……』

『ぜんぜん、問題ないツスよ!屋根があれば、どこでも寝れる!』
彼は言いきる。

『どこでもって!ヒノキさんは舟木を知らないから、そんなこと……』

『

『ああ、さつき会ってきたよ、舟木』

『え？』

僕はまた、ヒノキさんがさりりと言った言葉に耳を疑った。
舟木と会った？

『なんか暗そうなヤツではあったけど、まあ、問題ねえだろ。うるさければ、こつちもうるさくすればいいだけのことだろ？』

そう言うと、ヒノキさんはけらけら笑いながら、さばいていた魚にペチペチ小麦粉をまぶし始めた。

この人は本当に、何も分かっていない。

『いやあ、いい部屋だったよ。金も安いし、出世払いでいって言うてくれたし』

『出世払い？』僕は思わず、ジロウさん達を見る。

『だって、ほら。舟木君の隣だし……。もともと、あの部屋、使ってたから、それくらい優遇してあげなくちゃね』

『あざーす！』

ヒノキさんはキミ子さんの言葉にそう返すと、エプロンを取り、カ

ウンターから出てきた。

『ほらっ、マサル。そんなところ突っ立ってないで、まあ、座れよ。俺が作ったスペシャルなフライ食わしてやっからよ。』

ノリスケ！あとは揚がったら、そのまま盛りつければいいから』

『お、おう・・・』

ヒノキさんは僕を無理やり、カウンター席に座らせ、マスター・ノリスケに偉そうに指図する。

マスター・ノリスケは油鍋を前にして、やたら緊張しているようだった。

彼は、料理がてんでダメなのだ。

きっと、揚げ物なんて作ったことがないんじゃないだろうか。

思い返せば、今まで僕が食べてきた彼の料理は確かに、どれもこれも微妙な味だった。

たぶん、普通の客なら、もう二度とここでランチをしようとは思わない。まい。

ジロウさん達がここで昼食を食べないのも、きっとそのせいだ。

僕は、最近、そう結論付けた。

『そろそろ、上げていいんじゃない？』

ヒノキさんもカウンター席に座り、油鍋を覗き込むと、マスター・ノリスケにそう言った。

マスター・ノリスケはそれに慌てて従う。

ヒノキさんはそれを注意深く、見守る。

それにしても、僕はヒノキさんが料理ができるなんて、まったく知らなかった。

口ぶりからは、よっぽど、腕に自信がありそうだ。

『で、できたぞ』

マスター・ノリスケは手を震わせながら、僕の前に皿を突き出した。その皿の上には、きれいな狐色のアジフライ乗っていた。

見た目は完璧だ。

問題は味なのだ。

つづく

43話 素姓の分からないホームレスのすし屋

『いただきます』

『おっ』

僕は、皆が僕の挙動を見守るといふ謎の空気の中、そのアジフライを口にした。

僕は、特にアジフライが好きなのではない。

魚自体あまり好きではないし、めったに食べないのだ。

しかし、そのアジフライは今まで食べたことがないくらい上手かった。

ソースを付けなくても、身に十分に塩が利いていて、ふくつらと揚がり、衣はカリカリだった。

たかがアジフライだが、されどアジフライだった。

『どうだ？うまいだろう？』ヒノキさんが聞いてくる。

『かなり、うまいです……。何で、こんな作れるんですか？』

僕は正直にそう述べる。

『前に、港の定食屋で働いてたことがあんだよ。ほら、ノリスケ、お前も食ってみろよ！』

ヒノキさんは僕から、アジフライの乗った皿を取り上げると、それをマスター・ノリスケの前に突き出した。

そして、マスター・ノリスケは、それを手でつまんでかじった。

『う、うまいな』

『だろ？』

マスター・ノリスケの驚きを見たヒノキさんは、またニヤツと笑った。

『ヒノキくん、ワシらも！ワシらも！』

それを見ていたジロウさんとキミ子さんも、思わず寄ってきて、それを試食する。

二人とも、おいしそうに味わい、その味に感心し、ヒノキさんをやたら褒めたたえる。

ヒノキさんは、まんざらでもない表情でそれに答える。

『こんなにお料理得意なら、楓で雇ってもらえばいいのに。ここも繁盛するわよ。ねえ、マスター、彼を雇ってあげたら?』

キミ子さんが何気なくそう呟くと、ジロウさんも大げさに賛同した。

『それがいい!ヒノキくん、次の旅のために仕事探しているんだろ?ちようどいいじゃないか。ここでお金を貯めるといい!』

ヒノキさんがこの『楓』で働く?

僕は、なんだか想像がつかなかった。

しかし、そう言われたヒノキさんはあっさりその話にのる。

『そりゃあ、いいかもしれないねッス!ノリスケ、俺ここで働いていい?』

『あ?まあ、別にいいぞ』

『マジ?じゃあ、ノリスケよろしく』

『ああ』

そうして、住まいだけではなく、仕事さえも簡単に決めてしまった。なんという、フットワークの軽さなんだ。

僕は改めて、彼のすごさを思い知った。

ヒノキさんは、たった数時間足らずで、もうみんなの心を掴んでしまったのだ。

しかし、ノリスケよ、お前は本当にそれでいいのか？

よく素姓の分からないホームレスを、そんなにあっさり雇うなんて。

僕は心の中で、そう呟かすにはいらなかった。

じじく

44話　フアニーちゃん

昼休みが終わり、ヒノキさんフィーバーで賑わっていた『楓』から、画廊に戻ってくると、いつものように上杉さんは粘土をこねくり回し、一方、茉莉もいつものようにソファの上に寝っ転がりながら分厚い本を読んでいた。

『ただいま戻りました』

『ああ、お帰り。ねえ、見てこれ。すごくない？』

上杉さんは、粘土で作ったよく分からない形をしたよく分からないモノを指さした。

『はあ。何ですか？』僕は聞く。

『何って、猫だよ。福猫町のマスコット、フアニーちゃん』

フアニーちゃん？

商店街とかが町おこしのために作ったのだろうか。
僕はまったく聞いた覚えがない。

『そんなマスコットいましたっけ？』

『お父さんが勝手に作ってるだけよ』茉莉は本を閉じ、むくりと体を起こした。

『それより、さっきの人はどうなったの？本当にジロウさんのところで暮らすことになったの？』

『あゝ、ヒノキさんはジロウさん達にすごく気に入られて、あっさり決まっちゃったよ』

本当にあっさりだ。

あっさりしすぎだ。

あんな汚い格好をしている人が、あんな扱いを受けるなんて世の中おかしい。

『何の話？』事情を知らない上杉さんが言う。

僕は二人にヒノキさんのことや、さっき起きたことを掻い摘んで話した。

もちろん、彼が『楓』で働くことになったことも。

『ない！何で、あんな人が楓で！？マスターは？』

『もちろん、マスター直々のOKだよ』

僕がそう告げると、思った通り、『楓』でアルバイトしている茉莉はシヨックを受けたらしい。

彼女は好き嫌いがはっきりしているので、一度『嫌い』と判断したヒノキさんは、徹底的に嫌なのだろう。

『何で、止めなかったのよ！あなたもその場にいたんでしょ！？』

『何で僕が止めるのさ？僕にそんな権限あるわけがないだろう？それにもう、ヒノキさんは楓のスターだよ』

僕は皮肉をこめて言った。

僕は、何気にヒノキさんの人気ぶりに嫉妬していたのだ。

『最悪……。もうバイト辞めようかな……。』茉莉は思わずそう言う。

『まあまあ、茉莉ちゃん。大丈夫だよ。ノリちゃんはああ見えて人を見る目があるからさ。その子は良い子なんですよ？』

良い子……。なのか？

僕は上杉さんの問いに詰まる。

そして、マスター・ノリスケに、上杉さんが言うような見る目があ
るようには僕は思えない。

というより、彼は何を考えているのかよくわからない。

とりあえず、僕は笑っておいた。

回答に困ったら、ニコニコしてれば大抵うまくいく。

学校で習ったことはそれくらいだ。

『はあ。あたし、ちょっと買い物してくる・・・』

茉莉は大きなため息をつくと、そのままフラフラと出て行ってしま
った。

どんだけ、シヨックなんだ。

僕は、自分の存在がヒノキさんをこの街に呼び寄せたことに罪悪感
を感じた。

僕は他人に迷惑をかけることが何よりも嫌いなのだ。

『それじゃあ、僕も出かけてこようかな』

茉莉が行ってしまうと、粘土をこねていた上杉さんもそう言いだし
た。

また、ブックオフだろうか？

ヒノキさんもそうだが、彼の素行も僕はよく分からない。

上杉さんはいつも何をしているのだろう。謎だ。
気になった僕は思い切って聞いてみた。

『今日は、どこに行くんですか？また、ブックオフですか？』

『え？あゝ、そうそう。ブックオフ、ブックオフ。本を売るならブックオフ』

上杉さんはそう歌うと、粘土が手についてまま、僕を残して出て行ってしまった。

どこかあやしい。

そんな毎日、ブックオフに行くだろうか？

上杉さんは何か隠しているんじゃないだろうか。

疑う僕は、しばらくそれについて考えた。

何も喋らない福猫町のマスコット、ファニーちゃんと一緒に。

45話　そして、未来は動き出す

二人が帰ってくるまでの間、めずらしいことが起きた。

いつもは何も買わずに、ただ絵を眺めていくだけの常連のお爺さんが買い物をしていったのだ。

およそ3000円のA4サイズの額縁を。

それだけとはいえ、お客さんはお客さんだ。

僕はひと月経って、初めて、ここで買い物をする人見た。これはすごいことだ。

何でも、お爺さんは孫が幼稚園で描いた絵を入れるためにそれを使うらしい。

僕は丁寧に接客し、そのお爺さんを見送った。

『ありがとうございます』

僕が愛想よく言ったその言葉に嘘はなかった。

そして結局、上杉さんと茉莉が帰ってきたのは、いつもより一時間

遅い六時をまわってからだった。

二人は帰り道に偶然、駅前の本屋ブックオフではないでぶつたり会ったらしい。

上杉さんは、遅れたことを大げさに謝ったけれど、僕はそんなことはまったく気にしなかった。

いつも、ここで座っているだけなのだ。

それだけなのに給料をもらっていることの方が申し訳ない。

『そうそう、これお土産ね』

そして、なぜか上杉さんはそう言って、僕に生八つ橋をくれた。

そのせいで、僕はアパートへ帰るまで、また新たな謎解きに襲われることになった。

上杉さんはどこへ行ってきたのだろうか？

京都？

いや、まさか、京都なんて、ここから何時間もかかる。

僕は、疑問で自分の頭がパンクしそうになる前に、考えるのを止め、星を数えながら帰ることにした。

今日は、空気が澄んでいて星がよく見える。

僕は分かりやすい形をしたオリオン座がお気に入りだった。

しかし、アパートが近づいてくると、僕はヒノキさんがアパートに引越してくることを急に思いだした。

自分と同じにアパートに、再びヒノキさんが住むなんて、僕は想像がつかない。

彼と静香先輩と過ごした美大時代から、もう4年近く経ったのだ。

それは、とても昔の出来事のようにも感じるし、一方で、つい最近のこの様にも思えた。

とにかく、あの平和で、将来のことなんて何も考えていなかった頃の自分が懐かしい。

僕はあれから、少しは成長しただろうか。

そんな風に、僕は星空を見上げ、少しセンチメンタルな気持ちになった。

そう言えば、ヒノキさんは、いつからここに入居するのだろうか？
いくら何でも、今日で今日は無理だろう。

一体、彼はどこで寝泊まりするのだろうか。

一日くらい、泊めてあげてもよかったかもしれない。

僕は昔を思いだし、穏やかな気分になっていたので、家がない可哀想なヒノキさんを哀れに思い、同情した。

まさか、この寒さの中、野宿しているのだろうか。そして、僕は急に心配になり、足を早めた。

『よお！マサル！！やっと、帰ってきたな！』

ヒノキさんは、あっさり今日から入居していた。

『何だよ、それ・・・』

僕は思わず小声で呟いた。

もちろん、彼には聞こえないように。

じぶく

46話　ホームレスとパンクス

僕がアパートに着くと、一階と二階をつなぐ白い階段の前で、ちょうどヒノキさんとミーシャが立ち話をしているところだった。

おそらく二人はそれぞれ部屋を出る時（もしくは入ろうとした時に鉢合わせしたのだろう）。

未だホームレス姿のヒノキさんと、編み込みヘアかつ、ピアスだらけで皮ジャンを着こんだパンクなミーシャが並んで立っている光景は、なかなかの凄みがあった。

二人のことを知らなかったら、たぶん、僕は目を反らして通り過ぎる
違くない。

『あんだ、彼のこと知ってんの？』

ヒノキさんが帰ってきたばかりの僕に向かって、意気揚々と話しかけるのを見ると、ミーシャは驚いていた。

『こいつ、俺の後輩。そもそも、こいつのツテでここに住むことになっただんだよ』

ヒノキさんはミーシャに向かつて、僕との関係を紹介した。
ミーシャはそれに『へー』と言いながら、実際はあまり興味がなさそうだった。

『もう、今日から住めることになったんですか？』

僕は一応、ヒノキさんに確認した。

『ああ。もう、部屋の鍵は貰ったよ。荷物もすくねえから、何もイジルことねえし、今日からそこに住むよ』

そう言うと、彼はすぐそのの、フナムシの隣の奥の部屋を指さした。僕らは全員そろって、その部屋を見つめる。

『あんだ、相当変わってるよね。めちゃくちゃ臭いし汚いし。フナムシの話もちゃんと聞いたんでしょ？あいつの隣は結構、危険だよ』

ミーシャは話しながらタバコを取りだし、それに火を付けると、ヒノキさんにもそれを勧めた。
彼はそれを受け取り、火をもらい、一口吸い、ゆっくりと煙を吐き出してから答える。

『たぶん問題ねえよ。俺ア、けっこう危ない目に会ってきたから、

そういうの慣れてるし。インド行った時なんか、マジで殺されそうになったんだぜ』

ヒノキさんは、ご自慢の欠けた前歯をミーシャに見せつけた。

僕は、彼がこの武勇伝を誰かに得意そうに話している光景を、今までに何度も見てきた。

それが彼の自己紹介のお決まりエピソードなのだ。

『ふーん』

しかし、ミーシャはそう言うだけで特に、その武勇伝に食いつかなかった。

彼女は興味のないことには、とことんどライだ。

ヒノキさんはそれが悔しいのか、続ける。

『でも、俺もやられたら黙っていらねえ性格だから、相手をボコボコしてやったけどな。相手はクソでかいヤツだったけど・・・』

『そ。じゃあ、とにかくフナムシに気を付けなよ。二人ともおやすみ』

自分のすごさを熱弁したいヒノキさんの話なんか聴きたくなかったのだからミーシャは、手をひらひらと振ると、自分の部屋がある二階へ、さっさと昇って行ってしまった。

ミーシャはすごくクールだ。

『なんか変な女だな・・・』

そう悔し紛れに呟いたヒノキさんの言葉を、僕は聞こえないふりをして無視した。

『あっ、そうだ！マサル。あとで、俺の部屋に来いよ。久しぶりに飲もうぜ？』彼は突然切り出す。

『別にいいですけど、酒はあるんですか？』

今度はヒノキさんが、僕の言葉に聞こえないふりをして無視する。

お前が買ってこい。

そう言いたいのだ、彼は。

その無言のメッセージに言い返すのも、面倒くさくなった僕は、酒を買いに、来た道を引き返すことにした。

まったく、今日はムカつくほど綺麗な星空だ。

夜の散歩をするのには、最高最適。

つづく

47話　ヒノキさんの思考？

ヒノキさんは異様に酒が強かった。

でも、それは正しく言うのなら、『強くなった』と言うのが正確らしい。

大学入学当初の彼はまったく飲めず、ビール一杯で顔を真っ赤にしてフラフラになったらしいが、軽音サークルの飲み会で先輩たちによる熱い歓迎を受けているうちにどんどん鍛えられていったと言う。

だから、僕があまり飲めず酒を断ると、いつもヒノキさんは『鍛える』と怒鳴った。

しかし、それから4年近くたった今日のヒノキさんは、せっかく僕が買ってきた酒を前ほど飲まなかったし、僕に無理に酒を進めるようなこともしなかった。

彼はある程度、酒が入るとポツリポツリとゆっくり話し、同時に僕が卒業してから、今までどうやって過ごしてきたかと聞きたがった。

そして、僕はそれに対して、掻い摘んで話した。

広告会社に入社し、退社したこと。秋山先輩のお願いによって、やはり画廊に務めることになったことなどをだ。

『ふーん。静香から、ちょっと聞いてたけど、お前も色々あったんだなあ』

僕が話し終わると、彼は遠い目をしてそう言った。

『ヒノキさんは、秋山先輩とは結構会っていたんですね？』

僕は聞く。

『いや、あんまり。俺はずっと、フラフラしてたからなあ。かたや、あいつは現役バリバリのOLだもんなあ。すげえよ、あいつは。』

ヒノキさんは苦笑いする。

『うまくいってないんですか？』

『うまくいくとか、いかないとか、そういうんじゃないよ。静香とはもう長いから、そういうんじゃない。まあ、うまく言えないけどさあ。でも、まいったぜ。家に泊めてくれないんだもんなあ。』

『普通、そんな格好の人間と一緒に暮らしたくありませんよ』

ヒノキさんは、未だホームレスみたいな汚い格好をしていた。彼の部屋ではなく、もし僕の部屋で飲もうと彼が言いだしたら、僕は全力で断っていたはずだ。

『つか、着替えがないんだよ。シャワーも、まだお湯が出ないしよお』

彼は自分の体の匂いを嗅ぎながら、続ける。

『それに、ずっと風呂がない生活していると不思議とそれに慣れちまうんだ。それはすごいことだよな。生活なんて続ければ続けるほどに、なんでもなくなっちまうんだからさあ。すげえ、人間すげえ。』

酒に強い彼も、めずらしく酔っているのだろうか。どことなく目が虚ろに見える。

『それで今回はどこに行ってきたんですか？』

僕がそう質問すると、彼は長々とその旅を話し始めた。

本当かどうかわからないが、今回はモンゴルへ行ってきたらしい。彼はモンゴルの移動式テント・ゲルに泊めてもらおうと、目的なくモンゴルの大草原をウロウロしたらしいが、なかなかゲルが見つからなかったらしく、仮に見つかったとしても泊めてくれることはなかったらしい。

それで、野宿を繰り返して、一週間してすぐに帰ってきたと彼は語った。

『不思議な国だったなあ。首都部はそれなりに栄えているんだけど、ちよつとそこから離れると大草原が広がっているし。二つの世界が共存しているというか、自然部分がちゃんと孤立しているというか。それに星はめっちゃくちゃ綺麗だし。ぐちゃぐちゃしてる日本と比べたら、すげえよ。そういうところに身を置くと、色々考えるよなあ』

本当に色々考えているのだろうか。

僕は思わず、突っ込みたくなった。

しかし、一見お気楽そうに見えるヒノキさんも、やはりそれなりに色々なことを考えて生きているのだろう。

僕は他人の考えることはよくわからない。

とくに、ヒノキさんの思考については検討もつかない。

それは、おそらく彼が、僕と対極の性格だからだろうと僕は常々思っている。

だけど、本当のところは、それすらよく分からない。きっと一生、わからないことなのだろう。

つづく

48話〜ヒノキさんの思考〜

『で、お前はいつまで、働くつもりなんだ?』

『え?』

『え?じゃねえよ。あの画廊だよ。次の仕事が決まるまでの繋ぎなんだろ?静香から、そう聞いたぜ?』

『ええ、ああ・・・』

僕は突然、聞かれて困ってしまった。
確かにそうだ。

やわらか画廊は、次の仕事が決まるまでの間だけ務めるつもりだったのだ。

僕は上杉さんや、茉莉、そしてこの街自体に、居心地の良さを感じて、なんだかそのことを忘れてしまっていた。

ヒノキさんの言うとおり、ここは繋ぎだ。

いつまでも、ここで、ユラユラとのんびり生きていられるわけではない。

それじゃ、ダメなんだ。

僕はもっと上へ、もっと逃げずに闘わなければならない。
しかし、一体何と闘うんだ？

『もしや、お前アレか？アレだろ？』

『え？アレ？』

ヒノキさんの言葉で僕は突然、現実に戻された。
アレってなんだ？

『あの画廊の子・・・、マリン、グツときちまったんだろ？』

『は？』僕は彼の突然の言葉に耳を疑った。

『それで、お前、あの画廊にいつまでもいるんだろ？』

『いやいや、そんなわけないじゃないですか！？別に僕は・・・』

『照れんなよ。ガキじゃあるまいし・・・。』

ヒノキさんはニヤニヤしている。
どうやら面倒な勘違いをされてしまったらしい。

『まあ、そのまま、あの画廊の婿養子になる人生もありかもなあ』

ヒノキさんは言う。

なんだか厄介なことになってしまった。

『だから、茉莉とはそんなじゃないんですよ。ただの雇い主の娘なんですから。それに僕はもっと素直な子が良いの知っていますでしょ？』

僕は冷静になって、彼の誤解を解くことを試みる。

『マリも素直そうだったじゃんかよ？』

『それはヒノキさんに対する表の顔ですよ。本当のあの子は、もっとワガママな感じですよ。ぜんぜん素直じゃないですよ』

本当の茉莉はすごいんだ。

僕はヒノキさんに、彼女のズバズバとしたもの言いを聞かせてやりたいと思う。

『お前、馬鹿か。じゃあ、お前の言う素直は、ただの従順ってことじゃねえか。いいじゃん。ワガママ。そっちのが自分に素直ってことだろ?』

ヒノキさんは鬚を弄りながらそう言う。

そう言われれば、確かにそうだ。

僕はそのことに何も言い返せなくなる。

しかたない。

こういうときは、話をすり替えよう。

僕は彼に質問する。

『ヒノキさんの方は、いつまでここにいらっしゃるんですか?』とせ、また、お金を貯めたら、海外に行くんですよね?』

『あ?..ああ』

『何ですか?今の間は?』

『いや、そろそろ俺も、遊んでいられねえ年齢かなとも思うしなあ・
。。でも、まあ、次の旅をしてから考えるかな・。』

『へえー』

やはり、ヒノキさんも自分で言っとおり、色々考えているのか。
僕は思わず感心してしまう。

『じゃあ、次はどこに行くんですか？やっぱり自然の国ですか？』

僕は純粋な興味として聞く。
最後に彼が選ぶ土地を。

『えーと、最後は・。・。やっぱりアメリカかなあ。自由と夢の国だ
し。アメリカ、ひと月の旅!』

おいおい。

アメリカにひと月滞在するには、いくら金を貯めればいいんだ。

この時、僕はヒノキさんの次の旅が相当先になるだろうことを知っ

くじ

た

49話 脱皮

『で、昨日の夜もパーティーがあつたわけ？』

僕が大きなアクビをすると、茉莉はいじわるくそう聞いた。

『昨日は、ヒノキさんと飲んだんだよ、ふあ。フナムシは大人しかったけど』

結局、ヒノキさんはあの後、スイッチが入つたように飲み始め、それにつきあわされた僕はまた睡眠時間が十分とれなかつたのだ。僕は最低でも6時間は眠らなくてはならないのに。

『あの人、本当にこの街に住むわけね？』

茉莉はピリピリした声で僕に確認した。

『うん。アメリカ旅行の資金が貯まるまでね』

『アメリカ旅行？』

『次は最後の旅で、最後だからアメリカへ行くらしいよ』

僕はヒノキさんにさんざん聞かされたプランを茉莉に説明する。

僕がそうであつたように、茉莉もそれを聞いている途中でウンザリ

し、『もういい、大学に行く』と言い残し、行ってしまった。

日曜の今日は、お昼前から楓でのアルバイトの日で、そもそも授業はないはずなのに。

そうして茉莉が行ってしまつと、僕は画廊内の絵画をなんとなく眺めながら、ソファに座って時間が経つのを待った。

画廊の絵画は相変わらず、いつも通り（当たり前だが）で、若手作家のモダンのもが多い。

僕は、もうそれを穴が開くくらい見てはいたが、どれも難解でまだ『核』のようなものが見えていなかった。

これらの絵は僕には一生、分からないのかもしれない。
しかし、秋山先輩に頼まれたあのイルカの絵は少し分かった気がした。

先輩に頼まれた作者探しもしくちなと僕は思った。
しかし、どうやって？

そうして、絵画鑑賞にも飽きてしまつと、また暇になった。

上杉さんはまだ姿を現さない。たぶん、まだ寝ているのかもしれない。
い。

ああ、なんて暇なんだ。

そう思いながら、天窓からの暖かい日差しに当たっていると、僕はウトウトしてきた。

しかし、それを狙ったかのように突然、画廊の扉が開いた。

『よっ！』

その声で僕は、一気に正気に戻された。
ヒノキさんだ。

しかし、彼は昨日とは全然違っていた。

まず、ヒゲがなくなっていたし、頭は丸坊主になっていた。

さらに駅前で買ってきたのだろう服（中学生が着ていそうな安物ではあるが）を着ていた。

昨日のホームレス姿から一転、どこからどうみても好青年になっていた。

『脱皮ですか？』僕はその姿を見て言った。

『ああ、脱皮だな。今日から楓で働くしな。一応、ちゃんとしておかないとヤバいだろ？』

ヒノキさんはそう言って、ニヤついた。

前歯は折れたままだったので、その清潔になった姿との間に、違和感を感じた。

『で、何の用です？冷やかしですか？』

僕は昨日に続き、彼に睡眠妨害をされたので多少、イラついていた。

『おいおい。ひでえな。ちょっと顔出ただけだよ。つーか、ここ客来るのかよ』

『来ますよ』

僕はそう言った。

嘘はついていない。昨日、確かに来た。一人だけ。

『ふーん。あ、そう言えば、茉莉は？』

『ああ、なんかどっか行っちゃいましたよ』

『ふーん』

ヒノキさんはニヤニヤしながら言った。

昨日の夜のまま、未だ、彼は僕が茉莉に好意を抱いていると勘違いしているのだ。

散々否定したのに、その誤解は解けないので、僕はもうその勘違い

を受け入れ、彼のくだらない冷やかしを無視することに決めていた。
決めていた。

決めていたのに、彼は思いもしないことを言い始めた。

『まあ、頑張れよ。茉莉も楓でバイトしているんだろ？俺が色々応援してやるからよ！』

応援？応援？

僕はその言葉に嫌な響きを感じた。

『いやいや、いいですよ！本当に！』

本当に放つといてほしい。

『まあまあ、照れるな。俺がうまくやるからよ！

じゃあ、俺もう行くわ！早めに行って、ノリスケに料理教えてやらないとな。さらば！』

僕が意見する間もなく、ヒノキさんはそのまま行ってしまった。
ああ、もう本当に。本当にめんどくさい。

これじゃあ、ヒノキさんがバイト中に茉莉に変なことを言わないか
気になってしょうがない。

僕は茉莉が今日の楓でのバイトをサボることを祈った。

つづく

50話 〳やわらか画廊の秘密〳

* 前回部分に、新たな文章を付け加えました。
前回部分を、すでに読んでくださった方は申し訳ありません。
よろしく願います。

上杉さんが僕に昼休みを知らせに来た時、僕はソファの上でスヤスヤと眠っていた。

二日続けて、ろくに寝ていないから、こういうことになる。
もちろん、それは僕のせいではないと思うけれど。

『マサルくん〳。勤務中の睡眠は職務怠慢だよ〳。給料ドロボーだよ〳』

上杉さんは僕を起こすと、冗談のようにそう言った。

彼はニコニコしながら注意するので、僕は逆に恐縮してしまい、何度も謝った。

この街に来てから少し、僕は気がゆるんでしまったのかもしれない。
気をつけなければ。

僕はもう二度と仕事に眠るまいと心に誓った。

『うん、まあ、今度から気を付けてね。それじゃあ、明日からの出張中任せないからね』

『はい、すみません！・・・え？、出張？』

出張？

上杉さんは何気なく、変なことを口にした。

出張って何だ？

僕は耳を疑った。

『うん、出張。僕、明日から何日間か、ここ開けるから。あれ？それは知ってた？』

『いや、聞いてないですよ！出張って、え？上杉さんどっかいつちやうんですか？』

『うん、そつだよ。絵の買い付け&売りに行くんだよ。どっちかっつていうと、ウチは横流しで稼ぐタイプの画廊だからね。B t o B、つまり法人向けの画廊ってことだね』

『へ？法人向け？』再び、僕は耳を疑った。

『そうだよ。僕はこう見えても、目利きのバイヤーなんだよ』

僕はその時、衝撃の事実を知った。

この画廊に客が、まったく来なくても潰れないのは、そういうことだったのだ。

この画廊は、他の画廊や、絵を扱う法人に、上杉さんが買いつけた作品を横流しにする仲介業のようなものなのだ。

そう考えると、この画廊に新人作家の絵ばかりあるのも頷ける。

一般の客への商売は、オマケみたいなものだったのだ。

僕はひと月経って初めて、このやわらか画廊の儲けの仕組みを知った。

と言うより、よく考えれば分かったはずなのに、僕は何も考えないただのマヌケだったのだ。

僕をしている店番が、この画廊の仕事の全てだと思い込んでいた。

『そうか！だから、上杉さんはいつもどこかに行っているんですね？いつも、てつきり、ブックオフですつと立ち読みしているんだと思っていましたよ』

『え？』

『え？違うんですか？昨日の八つ橋のおみやげとかも、買いつけの仕事とかじゃ・・・？』

『え？』

『え……？』

どうやら、彼のいつもの徘徊は仕事とは関係のないものらしい。上杉さんのきよとんとした顔で、僕はそのことを知った。

『ま、まあ、とにかく僕は明日からいないからよろしくね。分からないことあったら、茉莉ちゃんにでも聞いてよ。じゃあ、とりあえず、今はお昼休みどうぞ〜』

『は、はあ・・・どうもです』

僕は、なんだか色んなことがありすぎて、頭の中がぐるぐるした。

とにかく今は、何も考えたくない。

つづへ

51話〜ヒノキさんの作戦〜

考えたくないのに、僕は嫌な予感がして『楓』に入るのをためらった。

『僕が茉莉に好意を抱いている』と勘違いしたヒノキさんが、彼女に向かって何を言っているか分からないからだ。

もし変なことを言っていたら、気まずくて仕方がない。

僕は気付かれない様に、『楓』のしゃれた小窓から店内を覗いてみる。

しかし、角度的な問題で何も見えない。

カウンターの方を見るためには、もう少し、斜めから覗きこまないといけない。

しかし、そうすると、中からこっちが気付かれてしまう。

僕は忍者のごとく、体を捻り……

何をやっているんだ、僕は。思春期の少年か！

突然、自分の行動と、その情けなさに、なんだか馬鹿らしくなってきた僕は、思い切って店内に入ることにした。堂々と胸を張って。

それはまさに、王様のごとく。

『こんにちはー』

『ちょっと、こっち来て!!』

と、入った瞬間、突然現れた茉莉に腕を掴まれ、僕は店の外に連れていかれた。
なぜか、彼女は怒っている。

『何？何だよ？』僕は嫌な予感がする。

『何だよじゃないわよ!!こっちが何なの!?アイツ!本当にもう何なの!?!』

『アイツ?』僕は一応確認する。

『あのホームレスよ!!あんたの先輩!!』

茉莉のその言葉に、僕は背筋がぞくりとした。
やっぱりヒノキさんが彼女に向かって、何か余計なことを言ったに違いない。

僕は思わず、しどろもどろになってしまう。

『あの・・・、えっと・・・、ヒノキさんから何か言われたの?』

『言われたもクソもないわよ!アイツつたら・・・』

『おいおい、二人とも何、内緒話してるんだよ!』

茉莉の話の途中で突然、ヒノキさんがニヤニヤしながら店の中から出てきた。

それに対し、茉莉は『ヒツ・・・』と声を挙げ驚き、話すのをやめる。そして、急によそよそしくなる。

一方の僕は、おそらく彼女に何かを吹き込んだのだろう彼のそのニヤついた顔を見た途端、彼をぶん殴りたくなってきた。(もちろん、殴らないけれど)

まったく、ヒノキさんは茉莉に一体何を言ったんだ。

『ヒノキさん、一体・・・?』

『ほら、これ!!--マサルも!!--』

僕が問いかけるといなや、ヒノキさんはいきなり僕に袋に入った大量の紙を手渡した。

なんだ、これ？

僕はその袋の中から一枚、紙を取り出した。

『楓にいらしよい！とってもおいしいランチ始めたよ！』

紙に手書きされたその言葉と、豚らしき謎の生物のイラストを見た僕は絶句した。

しかも、字間違っているし……
いらっしよいってなんだよ……。

『あ……？これは、ビラですよ……？』

『そう、ビラ！早めに来て時間が余ったから、これを作っていたんだよ。いいだろ？これで客寄せして、俺の料理を食べば、この店は大繁盛間違いなしだろ！？』

『ええ……、そうですね……』

僕は顔を引きつらせるしかなかった。

もともと広告会社で働いていた僕にとって、このビラのクオリティの低さはもはや芸術の域に達しているんじゃないかと思えた。

謎の豚のイラストが妙に怒りを誘う、斬新なデザインだ。

そして、そもそも、店主のノリスケはこの店を流行らしたいのか・

。お前はヒノキさんにそんなビラを配る権利を与えてそれでいいのか、ノリスケよ・・・？

僕はヒノキさんのガッツにため息をついた。

『じゃあ、今からこれを二人で配ってこいよ!!』

『え?』僕は耳を疑った。

『いやあ、ちょうど良かったぜ。マリー一人にやらせるより、二人で配った方が効果あるもんな!!』

『あ・・・、一応、僕は客としてここに来たんですけど・・・』

『いいからいけよ!時間の無駄だろ!!』

ヒノキさんは急に声を荒げる。

僕は『茉莉と二人で配ってこい』という、彼のその言葉の意図が分かり、うんざりする。

しかし、ヒノキさんは僕らに有無を言わせず背中を押し、駅の方へ僕らを送り出した。

後ろを振りかえると、ヒノキさんは意味ありげにウィンクしていた。

だから、僕は別に茉莉のことが好きなのじゃないんだって。

つづく

52話「おいでよぶー」

『そんなに怒るなって』

『ねえ、それ本気で言っているわけ？こんな変で恥ずかしいピラを配らなくちゃいけないの？』

僕がそうなだめると一層、茉莉は膨れた。

確かに僕だって、これを配るのは恥ずかしい。

僕は冗談っぽく言った。

『配ったことにして、これ捨てちゃう？』

『あなたってサイテーね。もったいないじゃない。せつかく作ったのに・・・』

僕は冗談で言ったとはいえ、彼女が意外に律義なことを言うので驚いた。

自分から、このピラに文句をつけたくせに。

一応、ヒノキさんは嫌っていてもバイトさせてもらっているマスターには恩があるのだろうか。

しかし、このビラで却って、店の評判が悪くならないだろうか。

『ねえ、このビラについてマスターは何て言っているの？彼はひっそりと店をやりたいんじゃないの？』

僕が思ったことを口にする、彼女は急に笑いだした。

『そのビラの豚のイラスト・・・マスターが書いたのよ』

『え？』

僕は思わず、その袋からビラを取りだし、イラストをもう一度見た。擬人化された豚（らしき生物）が小憎たらしい笑みを浮かべ、『おいでよぶー』と言っていた。

あの硬派なマスター・ノリスケがこれを・・・？
僕も思わず吹きだした。

駅前に着くと、さっそく僕らはビラを配り始めた。

正直、僕はこんなビラを配ったところで、誰も受け取ってはくれないと思っていた。

ポケットティッシュじゃないし、こんな変なビラだし・・・。

しかし、なぜだか分からないが多くの人があっさりと、そのビラを受け取ってくれた。

中には、『超かわいいー』とマスターの描いた豚のイラストを絶賛する女子高生までいた。

そうして、学生やら、主婦やら、老人などにビラを受け取ってもらう度に、僕はなんだか自分自身が受け入れられているような不思議な感覚に囚われた。

もちろん、単純にこの福猫町の住民たちがやさしいだけなのかもしれないけれど。

とにかく、受け取ってもらうのは悪い気分ではなかった。

むしろ、僕は嬉しくなってきた。

『ねえ、これを受け取った人たちは楓に来ると思う？』

僕とは違い、クールに配っていた茉莉は出しぬげに言った。

彼女はこういう仕事が苦手らしい。（もちろん、僕だってあまり得

意じゃないけれど)

僕は彼女を元気付けるように言った。

『でも少なくとも機会があれば行ってみようと思っんじゃないかな。広告ってそういうものだよ。こういう店もあって、こういうことをしているんだってという概念を覚えてもらうんだ。イツカのためにね』

『ふーん……。元広告マンの見解としては、一応意味はあると読むのね。じゃあ、そのイツカっていつ?』

『イツカはイツカだよ。そういうのはタイミングの問題なんだ』

『ふーん……。』

それから、僕らはただひたすら黙々とビラを配り続けた。

正直な話、僕は茉莉に言われるまで、自分が配るビラを受け取ってもらうことが嬉しくて、受け取った人たちが楓に来るかどうかなんて考えていなかった。

しかし、実際にこうして配っていると、広告の『効果』よりも、まず『伝える』ことの方が僕はよっぽど大事に思えた。

広告会社で働いていた時は、ただの小間使いだったから忘れていたけれど、もともと僕は絵を描くことなど『伝える』ことが大好きだったのだ。

僕は大事なことを思いだした気がした。

『おいでよぶー』

僕はピラを受け取ってくれた学生の後ろ姿を見て、こっそり呟いた。
マスター・ノリスケの『伝えたいこと』を代弁して。

つづく

53話 職務放棄

茉莉は、まだ楓に帰りたくないと言った。
それほどまでにヒノキさんに会いたくないらしい。

だから、僕らはピラ配りが終わると（30分もしないうちに配り終えた）、駅前の本屋に入ることにした。
彼女がそうしたいと言い出したからだ。

もちろん、僕は『昼食を食べるために帰りたい』と一応主張したが、彼女によって即刻却下された。

茉莉曰く、本屋で時間をつぶし、ヒノキさん達には、僕らはまだピラを配っていることにするらしい。

そして、この時点で僕は『本日は昼食抜き』を覚悟した。
まあ、茉莉と二人でどこかで食事するのはなんとなく気まずいので、それはそれで別にかまわなかったのだが。

『何か探している本でもあるの？』と僕が聞くと、

『別に。見るだけ』と彼女は答え、文庫本の書棚へと向かった。

僕は、読書好きな茉莉と一緒にくっついて歩いていたら『邪魔をするな』と言われそうなので、そのまま彼女を放っておいて、一人本屋の中をぶらぶら見て歩き、目についた美術雑誌を手にとった。

『特集・美術展入賞作品図鑑』と表紙にはある。

僕はパラパラとめくり、掲載された美術展入賞作品とやらを眺めた。

僕からしたら、どれもこれもどこかで見たことあるような絵、あるいは深い意味がありそうで、実は何も意味がないんじゃないかと思えるような退屈な絵ばかりだった。

彼らの絵は一体誰が評価したのだろう。

そもそも、『表現』に順位をつけること自体おかしい話だ。

僕はその雑誌の入賞作品に納得いかなかった。

もちろん、そこには『僕だってこのくらい描けるのに』という成功している画家たちへの嫉妬心もあった。

しかし、そんなものとは関係なしに誰でも無条件でハツとさせられる絵はきつとあるはずだ。

大きさや、書き込みの量、テーマなど関係なしに。

僕は例のイルカの絵を思いだした。

まさしく、あの絵こそ、無条件でハツとさせられるものだった。

やはり、あの絵は評価されることを目的としていないアマチュアの画家が描いた絵なのだろうか。

しばらく思考をめぐらした。

それから僕は、本屋の雑誌内で『イルカの絵の作者』探しを始めた。当然、無意味と思いつつも。

しかし、もしかしたら、プロとしてどこかに載っているかもしれない。

可能性があるなら調べる価値はあるだろう。

だんだん作者探しに躍起になってくると、もう会計を済ませたらし

い茉莉がやって来て言った。

『ねえ、まだ帰らないで平気なの？もう2時20分よ』

『え？』

気付くと僕は、昼休みの時間を長く取りすぎていた。

『職務怠慢の次は、職務放棄かい？』

僕が急いで画廊に戻ると、上杉さんはそうニッコリ笑った。
意味深な感じに。

つづく

54話 暇の報い

それからの僕は、やわらか画廊の仕事に精を出した。

と言うこともなく、ますます怠情になっていった。

なぜなら、監督者である上杉さんが出張に出て行ってしまったので、たまに顔を出す茉莉を除けば、画廊には僕一人しかいないからだ。

監督者がいないというのは、人間をダメにするなあとは僕はしみじみ思った。

そもそも上杉さんは、何日間、画廊を空けるのかさえ言わずに出て行った。

オーナー不在の今、客がほとんどこないこの画廊は僕にひたすら孤独と退屈を感じさせてくれた。

しかし一方、向かいの喫茶店『楓』は大いに賑わっていた。僕の予想が外れ、あのビラ配りの効果がすぐに出たのだ。

あのお粗末なビラを見て、楓にやってきたモノ好きなお客さんがいた。

そして、そのモノ好きなお客さんがヒノキさんの作るランチを絶賛し、それが口頭で伝わっていき、気づけば楓は流行の店になっていたのだ。

そして、上杉さんが出張に出てから4日目、とうとう昼時に店の外に行列までできるようになった。

もともと、楓には客席があまりない。

しかし、そのことを除いても僕はこの行列に驚かずにはいられなかった。

このまま楓は、廃れた喫茶店から『町の名物洋食屋さん』になってしまうのではないだろうか。

僕は画廊で一人、その行列を眺めながら、そんなことを思った。

そして、アパートから持参した食パンを食べた。(あえて昼休みは取らなかった)

まったく、楓に比べ、このやわらか画廊は平和だなあ。

僕は満腹になり、とうとうとしてきた。

と、その瞬間、画廊の扉が開いた。

『もう、無理……。やってられない……』

楓でバイト中の茉莉がまた戻ってきた。
これで、本日二度目だ。

彼女のバイトは、たった三日で一人で大量の客を捌かなければいけない激務へと変わったしまったのだ。

『大丈夫？』僕は聞いた。

『ぜんぜん…』彼女は言った。そして、そのまま接客用ソファに寝転んだ。

『まったく、ここは良いわよねえ。暇で……。あなたは一体ここで何してるの？』

『何って……。』

僕は接客と言いかけて口をつぐんだ。

ここ最近、朝から晩まで座っているだけだった。
居眠りと読書を交互に繰り返しながら。

『はぁ……。もう、お父さんも帰ってこないし……。はぁ……。』

茉莉はため息を繰り返した。

バイトだけではなく、上杉さんの謎の出張にも呆れているのだ。

『おい！マリ！！逃げんなよ！！給料減らすぞ！！』

そして、ヒノキさんが茉莉を追いかけて来た。これも本日二度目だ。自身の料理が大ヒットしたヒノキさんは、まるで店長きどりだ。

茉莉は、彼の登場にすつくと姿勢を正した。

『でも、何であたしだけが接客なんですか・・・？あなたもやればいいじゃないですか・・・？さ、皿運びとか・・・、会計とか・・・』

茉莉は弱弱しく反論した。

さすがに、多少ヒノキさんと話せるようになったようだが、未だにぎこちない。

なぜだか分からないが、彼女はヒノキさんに対しては心を開けないようなのだ。

そして、それにヒノキさんは気付いていない。

彼はいつだって威圧的な態度で人をこけ下ろす。

しかし、そこに悪意はない。たぶん。

『馬鹿かお前・・・、シェフが表に出たら格好がつかねえじゃねえか！？ノリスケは何やらしても使えねえしよお』

僕は使えない呼ばわりされた店主のノリスケに同情した。

『でも……』

茉莉はまだ何か言いたそうだった。
仕方ないので僕は助け舟を出すことにした。

『ヒノキさん、表に出ちゃいけないシェフがこんな店の外にいていいんですか？もう格好も何も無いじゃないですか？』

ここにいるということは、ヒノキさんは狭いカウンターから、客席を通り、行列を抜けてここに来たのだ。そして、店内では、一人になったマスターノリスケのてんでこ舞いが想像できる。

『つつてもなあ、それはマリが逃げだすからだろ……。こんなクソ忙しい時に……。つーか、何もしてないお前が口を挟むな！！』

僕は見事に一喝された。

『はぁ……。本当に暇でいいわよね……。』

そして、なぜか茉莉まで僕を非難がましい目で見ると、まったく、僕はただ暇なんだ。

僕は自分が暇であることにイライラしてきた。

そして、思わず言ってしまった。言っではいけないことを。

『別に僕だって、好きで暇しているわけじゃないよ……』

その言葉にヒノキさんは即座に反応したのだ。

『じゃあ、お前も働けよ！ここ空けてさあ、楓で働けばいいじゃない？』

『え？』

僕は耳を疑った。

何だかんだ言っただけ、僕はここでの退屈を楽しんでいたのだ。

正直あんなに、にぎわっている楓では働きたくない。

『だって、ほら。さすがにこの店番してないとヤバイですよ……僕は言った。』

『別に問題ねえだろ、客こねえし。それに、マリの父ちゃん今いねえんだろ？なあ、マリ？問題ねえよな？』ヒノキさんは言った。

『あ、・・・え」と、問題ないですね。・・・うん、そうよ。あなたも楓に来なさいよ。どうせ客来ないんだし』茉莉が言った。

こうして僕は、なぜか楓に連れて行かれた。
やわらか画廊の仕事を本当に放棄して・・・。

つづく

55話　チグハグな夫婦

繁盛している楓での仕事は想像以上にハードだった。

一人で客の相手をしていた茉莉が逃げ出したくなるのも分かる気がする。

僕は慣れない接客に注文を間違えたり、皿を割ったり、なんだかんだで何度もヒノキさんに怒鳴られるはめになった。（マスター・ノリスケは特に何も言わない）

そして、それを見ていたお客さん達もどこなく、『この人大丈夫かしら？』的視線で僕のことを見てくる気がするので僕は余計ミスを重ねた。

要するに、僕はダメダメだった。

昼時が過ぎ、ようやく客足も途絶えた頃には、僕は完全に意気消沈していた。

『お前、ぜんぜん使えねーな』

『すみません…』

ヒノキさんの言葉に僕自身も同意した。
もはや、言い返す気力もなければ、言い返せる根拠もない。

『もしかして、前の広告の仕事もこんな感じだったのか？』

『いや…、ええ、まあ…』

『そりゃ、辞めるわけだな』

僕が曖昧に答えると、ヒノキさんは僕を軽蔑した目で見た。

僕は彼の言葉に怒るところか広告会社で毎日怒鳴られていたの思
い出し、なんだか悲しくなってきた。

『その会社でどんな仕事してたの？』

空いた客席の皿を片づけていた茉莉が突然言った。

『どんなって…、ただのアシスタントだよ。ディレクターの言う
ことを黙々とこなすだけだよ』

『ふーん…、黙々とねえ…。働くって大変よねえ…。』

茉莉は意味深にそう言うと、皿を下げにカウンターの奥へ行ってし
まった。

確か、彼女も来年あたり就活のはずだ。

そして、その姿が見えなくなったタイミングを狙ったように、ヒノキさんは僕に耳打ちしてきた。

『で、どうなんだよ？マリとは？』

またそれが。

僕は彼のその勘違いに、変わらずうつんざりした。

『だから、別に僕は・・・』

『いらっしやいませー！』

と、突然、お客さんが来たので、ヒノキさんは勢いよく挨拶して、奥へと引っ込んだ。

あいかわらず『シェフは客の前に姿を見せない』をポリシーにしているわけだ。

まったく、シェフはいい身分だ。

僕は一人接客に当たる。

『いらっしやいませ。二名様でよろしいでしょうか？』

『見て分かるでしょ？一人に見える？』

僕の接客に対し、香水臭いその客はそう言い放った。
鼻に付く嫌なオバサンだ。

趣味の悪い（あくまで僕の主観だけれども）白いふわふわのコートに、ヴィトンのバック、指にはウソ臭い指輪をたくさんしていた。
まるで、田舎から出てきたばかりの成金みたいだ。

『こちらにどうぞ』

僕がそのオバサンの態度と格好に目を丸くしながらもそう言つと、
オバサンはいかにも意地の悪そうな顔でフンツと鼻を鳴らし、それに従った。

しかし、もう一方のオジサン（たぶん、夫だろう）は気が弱そうで
『どうもねえ』と、僕に向かって言ってくれた。彼はひよろりとノ
ツポメガネでやさしく、なんだか正反対の夫婦だ。

『ご注文は何にいたしましょう？』

席に着かせると、僕はメニューが貼ってある壁を示しながらそう言
った。

ランチは、ヒノキさんの日替わり定食の一種類しかない。

『コーヒー、二つ……』

オバサンはメニューに一瞥もくれず、強い口調でそう言った。彼女はなぜか不機嫌で『何でこんな店で注文しなくてはいけない』みたいな雰囲気を出していた。

タバコに火を付け、勢いよく煙を吐きだす。

とにかく、このオバサンはヒノキさんの料理が目的でここに来たのわけではないらしい。

この喫茶店を『喫茶店』として利用する客に僕は驚いた。今まで来た客はみんな、話題のヒノキさんランチが目当てだったのだ。

意外に思いながらも『コーヒー二つですね』と僕が注文を聞き入れ、カウンターへ戻ろうとすると、今度は気の弱そうなオジサンが話しかけてきた。

『ねえ、キミ。ここら辺にグリーンハイツって言うアパートあるの知らない？』

グリーンハイツ？

僕は自分の耳を疑った。

なぜなら、グリーンハイツは僕が住んでいるアパートだ。

僕のアパートにこのチグハグな夫婦が何の用だろっ？

つづく

56話 夫婦の正体

『ええ、知っていますけど・・・』

僕が不審に思いながらも、そう答えるとオジサンは安堵の表情を浮かべた。

『そうかい、それはよかった。じゃあ、どこにあるか教えてくれな
いかな？もう探して探して、ここら辺を何周もしちゃったんだよ』

僕は簡単にグリーンハイツまでの道順を彼に説明した。

もちろん、僕がそのグリーンハイツの住人であることを伏せて。

わざわざ言う必要もない。

なぜなら、このチグハグな二人があやしく思えたからだ。

僕がマスターに注文を言いカウンターに引き返してくると、聞き
耳を立てていたらしい茉莉が小声で言った。

『ダレ？あの二人？何であるアパートに用があるわけ？』

彼女もあの二人を怪しんでいるわけだ。

『さあ？ジロウさん達に用があるんじゃないかな？』

『ジロウさん達に？』

僕は彼らが管理人のおじいさんとおばあさんの知り合いなんじゃないかと推測していたが、どうやらそれに茉莉は納得いかないようだった。

彼女はうーんと考え出した。

『おーい。ランチで二つでいいよな？もう出来たぞ！』

『え？』

僕が振り返ると、早とちりしたヒノキさんは日替わり定食を用意していた。

彼は、あの夫婦も他のお客さんと同様に自分の料理が目当てで来たと勘違いしているのだ。

『あの、ヒノキさん……。注文、コーヒーだけだったんですけど……』

『え?』

『おし!分かった!』

僕がそう伝えると、口をあんぐり空けるヒノキさんをしり目に、今まで息をひそめていたマスター・ノリスケがそう言い、テキパキとコーヒーの準備を始めた。

ノリスケは、なんとなく自分の仕事ができうれしそうだった。

一方のヒノキさんは日替わり定食を見つめながら、シヨックを受けていた。

『ちょっと待てよ。じゃあ、一体、何しに、この喫茶店に来たんだよ?』

いや、普通にお茶しに来たんでしょうと、僕が突っ込む前にヒノキさんは調理場から首を出して、客の夫婦を視察した。まるで、子供だ。

『ちなみにヒノキさんはあの二人、知らないですよね?』

『は?知るわけないだろ?何なんだよ?あの客は?ランチを食わないなんてどういふ神経しているんだ?』

僕はなぜか悔しがるヒノキさんに、あの夫婦からグリーンハイツについて聞かれたことを説明した。

一応、ヒノキさんもグリーンハイツの住人だ。

まだ家賃を一銭も払っていないらしいけれど。

僕の話聞いたヒノキさんは、ますます夫婦をじっくりと観察した。どうやら、本当に知らないらしい。

『おい、できたぞ！運んでくれ』

僕ら三人（茉莉も含め）が調理場から、謎の夫婦を覗いていると、マスター・ノリスケが言った。
注文のコーヒーができたのだ。

『おし！じゃあ、俺ちょっと、置きながら聞いてくるよ』

『え？ちょっと、ヒノキさん？』

僕が止める間もなく、コーヒーを受け取ったヒノキさんは夫婦のもとに行ってしまった。

あんなに『シエフは客に姿を見せない』と言っていたのに。

どれだけ、ランチを注文されなかったことがくやしんだ。

『おまたせしました〜!』

ヒノキさんが元気よくコーヒーをもって夫婦に近づく、何かを話していたらしい夫婦はヒノキさんを見た。

そして、ヒノキさんは『僕もグリーンハイツに住んでいるんですよ』
みたいなことを言っつて切り出し、夫婦に何か話し始めた。

そして、それに夫婦も笑顔で答えている。(無愛想だったオバサンの方も!)

しかし、調理場からその様子を伺う僕と茉莉にはその声がよく聞こえない。

ノリスケが勢いよく、コーヒーを作る機械を洗い出したからだ。

『今、あのオジサン何て言った?』

『私も分かんないわよ。勉強がどうとか・・・』

『勉強?アパートに勉強しに来たんだって?』

『さあ?ていうか、勉強になんか普通来るわけないでしょ?』

僕らは、かすかに聞き取った『勉強』という単語に頭をひねりながら、ヒノキさん達の様子を見守った。

なんだかヒノキさんは驚いて、興奮しているように見える。一体、何の話をしているんだろう。

僕は気になって仕方がない。

そして、ようやく話が終わったらしいヒノキさんが、やたらニヤニヤしながら、調理場へ戻ってきた。

『何だったんですか！？何の用だったんです？』

僕が聞くよりも先に、痺れを切れらしたらしい茉莉が興奮してヒノキさんに聞いた。

ヒノキさんはそれにもつたいぶって、ニヤリと笑みを浮かべる。僕らはその笑みに思わず、息を飲む。

そして、ヒノキさんは言った。

『あの夫婦…、フナムシの両親だってよ』

う
ぐう

57話 ひと雨

「あの二人が…?」

僕は衝撃の事実に驚いた。

あの引きこもりのフナムシに親がいたなんて。

いや、もちろんいて当然なんだけれども、なぜだか意外に感じた。それほどまでにフナムシは浮世離れしていたからだ。

「たぶん一人暮らししている大学生の息子に会いに来たってところだろう? 息子は引きこもっているのに・・・」

ヒノキさんが言うと、茉莉は聞いた。

「あの二人は、そのフナムシという人が引きこもっているってこと知らないみたいなんですか?」

「ああ、知らないんだらうな・・・。俺が知っているっていったら、自慢の息子だつて笑つてたぜ。もちろん、言えるわけないしな。」「オタクの息子さん、引きこもってますよ」なんて言ったら、あの二

人、きつと発狂しちまうぜ』

自慢の息子が……。

確かに、この街にある大学（フナムシが通っているのを見たことがないけれど）は、この辺じゃ、割と頭の良い大学らしい。

もちろん、茉莉もその大学に通っているから、彼女もそういうことなんだろう。

僕はコーヒーを飲んでいる夫婦を再び、覗いた見た。

フナムシは髪が伸びきっていて妖怪のような風貌だから、似ているとかそういうことは分からなかったけれど、なんとなくあの二人がフナムシの両親であることに違和感を感じなかった。

きつそうな教育ママと、子供に無関心そうな気の弱い夫。

『なるほど、なるほど』と僕は一人頷いた。

家庭環境による性格形成。

僕は失礼な考察を始めた。

夫婦がコーヒーを飲み干し、席を立つと、茉莉はレジに立ち、彼らの会計に当たった。(僕はレジの扱いが分からないので、二人が使ったコーヒーカップの片づけに当たった)

きつそうなオバサンは会計を済ませると『さっきの子に、よろしくね』と言って、顔を綻ばせて店を後にした。

きつと、ヒノキさんがおべっかでも使ったのだろう。
フナムシの母親は、そういうのに、いかにも弱そうだ。

『どうなるんでしょうね？あの二人がアパートに行って息子の現状を知ったら……。ひと雨きそうですよね……。』

僕が二人を見送り、心配してヒノキさんにそう言つと、彼は楽しそうに笑った。

『さあな。まあ、とにかく面白いことになるんじゃないか？これは見ものだな』

見ものか……。まったく、この人は。

僕はまたフナムシのせいで眠れなくなるんじゃないかと怯えているのに、彼はむしろこの状況を楽しんでいる。
なんとというお気楽さだ。

そして、ヒノキさんは、マスター・ノリスケと一緒に、自分が作った余った定食をムシャムシャ食べ始めた。

つづく

58話 魔界の扉

『うあ”あ”あ”あああああああ！！！！！！！！！』

その声に目を覚ますと、僕は枕元の目ざまし時計を見た。
時刻は深夜3時35分。

やっぱりそうなるよなあ。

フナムシだ。

予想通り、フナムシのシャウトは始まった。

あれから、僕とヒノキさんが楓の仕事を終えてアパートに帰っていると、さすがにフナムシの両親の姿はなかった。

しかし、フナムシの部屋の前には『何か』があったことを思わせるには十分すぎるほどの生ゴミが散乱していた。

おそらく、引きこもりのフナムシが両親を帰らせるために、それらを武器として利用したのだろう。

ヒノキさんはそれを見て、『可哀想に・・・』と誰に向けてだか分からないが呟くと、ホウキとチリトリでそれを片づけた。

当然、フナムシの部屋の前の通路に散らかったゴミは、アパートの

住人みんなのゴミでもあるのだ。(ちなみに、隣のヒノキさんの部屋の前も生ゴミでめちゃくちゃだった)

フナムシは一体何を抱えているのだろうか。

どちらにしても僕は他人に迷惑をかけれる彼の神経が分からない。

ドゥンインドゥンイン！！

ドゥンインドゥンイン！！

ひとしきりシャウトが終わると、今度はアニソンが始まった。

相も変わらず、大音量だ。

いや、むしろ以前よりも音が大きいかもしくない。

部屋の窓がびりびりと揺れるのを見て、うるさい以上に部屋が壊れないか僕は不安になってきた。

さて、どうするか。

ヒノキさんは、もしパーティが始まったら、仕返しに行くと言っていたけれど、どうなのだろう。

ミーシャから聞いたゴキブリを使った復讐をされるのも怖い。

もちろん、ヒノキさんにはそのことを重々話しておいた。

僕は前と同じようにしばらく悩んだ。

どうしたらいい。頭脳を使え。頭脳戦でフナムシを鎮めるんだ・・・。

と、僕が何か良いアイデアはないか考えていると、僕の部屋のドアが叩かれていることに気付いた。
フナムシのアニソンのせいでしばらく気付かなかったのだ。

僕が出ると（もちろん、確認してから）、ヒノキさんが部屋に入ってきた。

『おい！fdjjjふいじちくぞー！！！！』

『はい！！！？』

やはり、大音量のアニソンのせいでよく聞こえない。
さながら、LIVEハウスだ。

『いくぞ』

ヒノキさんは大きく口でそう僕に伝えてきた。

いくぞ？

冗談じゃない。アイツの所に直に言ったら、復讐される。

僕は『いやです』と同様に口の形で彼に伝える。

しかし、ヒノキさんはお構いなしに僕の腕を掴んで、無理やり僕を部屋の外へ連れ出した。

僕は抵抗するが、腕の力じゃ、ヒノキさんにはかなわない。

行くなら一人で行ってくれ。

僕はぶんぶん腕を振り回すが、結局、階段を下せられ、爆音が響き、ドアがブルブルと振動するカオスなフナムシの部屋の前まで引っ張ってこられた。

そして、ヒノキさんは一瞬、抵抗する僕のことを見るとニヤリと笑い、僕の腕を掴んでいない方の左手でフナムシの部屋のドアを力強く、何度も叩いた。

ダアンダアン
ダアンダアン

僕はブルブルと震えていた。

それが冬の寒さのせいなのか、異形のフナムシへの怯えなのか、大音量で流れるアニソンの振動のせいなのかは分からない。

とにかく、フナムシは正常じゃない。ヤツはおそらく狂っている。

そして、ヒノキさんがドアを叩きはじめてから、何秒たっただろう。

(僕はものすごく長く感じた)

突然、ピタツとアニソンが鳴りやみ、静寂が訪れた。

その静けさは空気を凍らせた。

』でてくるぞ・・・』

ヒノキさんが呟いた。

僕は思わず生唾を飲み込む。

ギイイイイツ・・・。

そして今、魔界の扉が開かれる。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2787i/>

遠い町からやってきた。

2010年10月15日20時54分発行